

# 聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書

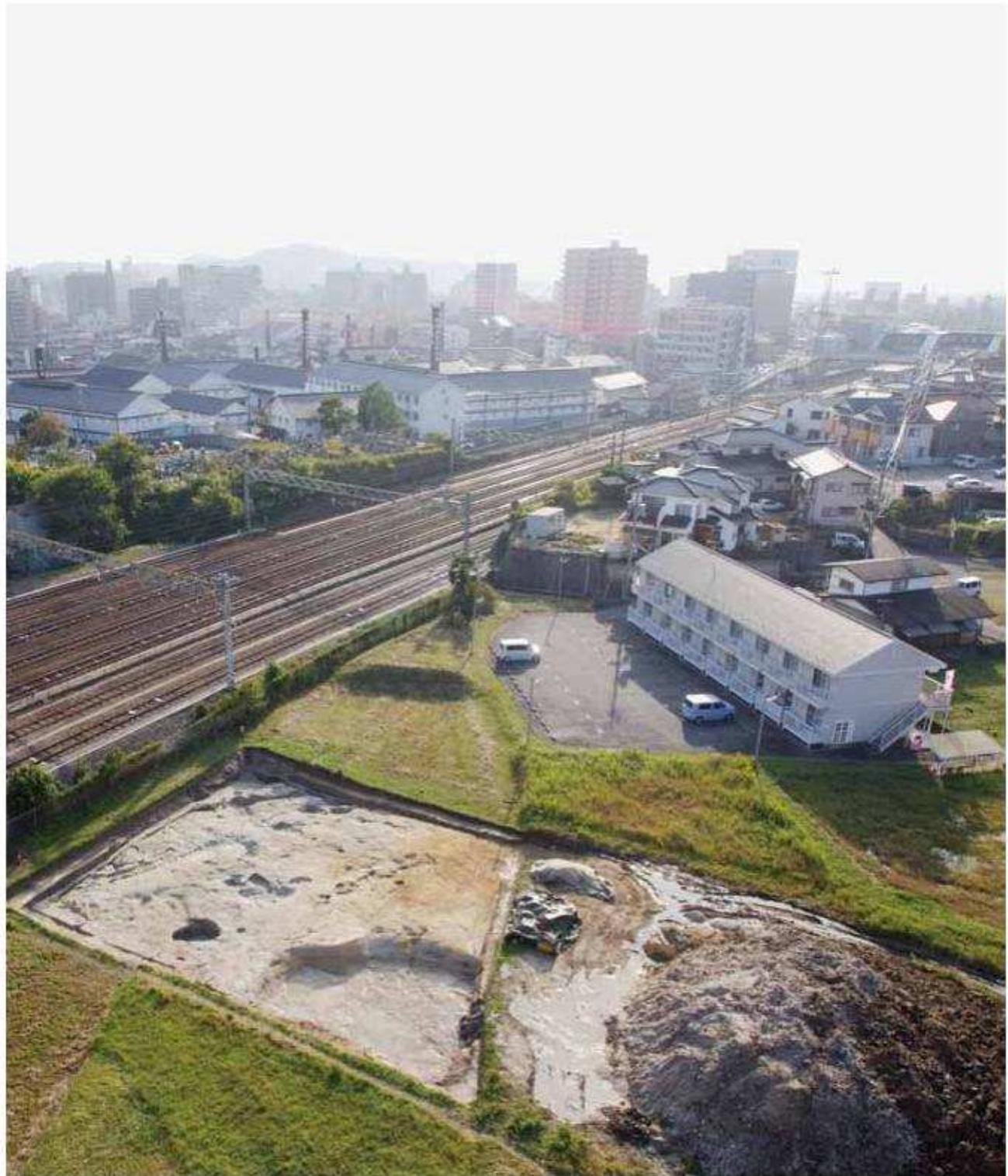
-都市計画道路吉行泉線道路改良事業に係る発掘調査-

# 聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書

－都市計画道路吉行泉線道路改良事業に係る発掘調査－

2 0 1 5

東広島市教育委員会



聲門遺跡空中写真（東から）

## は　し　が　き

聲門遺跡並びに安芸国分寺周辺遺跡の所在する東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、「未来にはばたく国際学術研究都市とともに育み、人が輝くまちー」を将来の都市像とし、環境と調和した生活しやすいまち、魅力ある住環境の整ったまちなどの目標を掲げ、その魅力や機能を活かしたまちづくりを進めております。

こうした中、市内の狭小な道路の改善と市街地へのアクセス強化を図っているところですが、市街地内の交通渋滞は依然として解消しておらず、また、高齢化社会や交通弱者に対応した構造や安全性が確保された道路整備についても十分ではありません。そこで、現在、幹線道路の早期建設により、安心で快適な暮らしを確保する生活関連道路の整備が徐々に進められているところです。今回、発掘調査を実施するきっかけとなりました都市計画道路吉行泉線道路改良事業につきましても、このような問題を解消すべく建設が行われるものであります。

今回の発掘調査では、土坑、溝状遺構、道状遺構、井戸跡などのほか、円面硯、墨書き器、古代瓦、人形木簡など、史跡安芸国分寺跡や周辺遺跡との関連性がみられる資料を確認することができました。これらの調査成果をまとめた本報告書は、平成18年度から平成20年度に財団法人東広島市教育文化振興事業団が発掘調査を行った安芸国分寺周辺遺跡の成果と合わせ、古代安芸国を考えていくうえで、当該地域における今後の調査研究に貴重な資料を提供してくれたものと言えます。

本報告書が、郷土の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と关心をより一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施・報告書の刊行にあたり、関係各機関並びに地元関係者各位には、多大な御協力と御理解をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年5月

東広島市教育委員会  
教育長 下川聖二

## 例　　言

1. 本書は、平成26（2014）年度に東広島市教育委員会が発掘調査を実施した聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡（東広島市西条町吉行・土与丸）の発掘調査報告書である。
2. 東広島市長（都市部都市整備課）の依頼により、発掘調査（現地作業）及び基礎整理と整理作業（報告書刊行）までの全てを東広島市教育委員会で実施した。
3. 発掘調査・基礎整理、整理作業（報告書刊行）は、東広島市教育委員会の主査植田広と埋蔵文化財調査員吉田由弥・杉原弥生・日浦裕子が行い、文化課職員が協力した。
4. 遺構の写真撮影・実測・製図・遺物の実測・製図は植田と杉原が、遺物の写真撮影は主査中山学が行った。
5. 本書の執筆は、吉田が遺物観察表を、それ以外は植田が執筆及び編集した。
6. 測量用基準杭打設業務は株式会社グリーンコンサルに、仮設電気工事は株式会社森商に、空中写真撮影は株式会社イビソクに委託した。
7. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「安芸西条」、「清水原」、「白市」、「田万里市」を使用した。
8. 第2図は、東広島市発行の東広島市地形図「O-8」1/2,500を使用した。
9. 遺物実測図に付した遺物番号と写真図版に付した遺物番号は同一である。
10. 本書で使用した方位は、第1図が旧平面直角座標第Ⅲ系座標北で、他が世界測地系座標北（平面直角座標第Ⅲ系）である。
11. 調査で得られた遺物、図面、写真等の資料は、すべて東広島市教育委員会で保管している。
12. 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。  
SK：土坑 SD：溝状遺構 SF：道状遺構 SE：井戸跡 P：柱穴  
SX：性格不明遺構

# 聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書

## 目 次

I はじめに.....	1
II 位置と環境.....	2
III 調査の概要.....	5
IV 遺構と遺物.....	10
V まとめ.....	51

### 奥付・抄録

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000) .....	3
第2図 周辺地形図 (1:5,000) .....	6
第3図 聲門遺跡遺構配置図 (1:200) .....	8
第4図 安芸国分寺周辺遺跡遺構配置図 (1:200) .....	9
第5図 SK1・SK2実測図 (1:30) .....	11
第6図 SK3・SX1実測図 (1:40) .....	12
第7図 SK4実測図 (1:30) .....	13
第8図 SK5・SK6・SK7実測図 (1:30) .....	15
第9図 SD1~3・SF1・SX2実測図 (1:80) .....	19
第10図 SD1~3・SF1・SX2土層断面図 (1:40) .....	20
第11図 SE1・SE2実測図 (1:40) .....	23
第12図 P1~10実測図 (1:30) .....	25
第13図 出土遺物実測図1 (1・4-1:6、2-1:4、3・5~8-1:3) .....	27
第14図 出土遺物実測図2 (9~11-1:3、12・13-1:4) .....	28

第15図	出土遺物実測図3 (1:4) .....	29
第16図	出土遺物実測図4 (18・19-1:4、20-1:3) .....	30
第17図	出土遺物実測図5 (21~27・29~33-1:3、28-1:4) .....	31
第18図	出土遺物実測図6 (1:4) .....	32
第19図	出土遺物実測図7 (38・39-1:4、40~46-1:3) .....	33
第20図	出土遺物実測図8 (1:2) .....	34
第21図	出土遺物実測図9 (50・51-1:3、52・53-1:4) .....	35
第22図	出土遺物実測図10 (54・58~60-1:3、55~57-1:4) .....	36
第23図	出土遺物実測図11 (61・64-1:4、62・63・65~67-1:3) .....	37
第24図	出土遺物実測図12 (1:6) .....	38
第25図	SD1実測図 (遺構図1:100、断面図1:30) .....	42
第26図	SD1出土遺物実測図1 (1~3-1:3、4~7-1:4) .....	45
第27図	SD1出土遺物実測図2 (1:4) .....	46
第28図	包含層出土遺物実測図1 (1:3) .....	47
第29図	包含層出土遺物実測図2 (1:4) .....	48
第30図	包含層出土遺物実測図3 (32~34-1:4、35-1:1) .....	49

## 卷頭図版目次

聲門遺跡空中写真（東から）

## 図版目次

### 聲門遺跡

- 図版1 a 調査前風景（北から）
  - b 調査区東側壁面（南西から）
- 図版2 a 調査区北側壁面（南西から）
  - b SK1断面（西から）
  - c SK1完掘（北東から）
  - d SK2断面（南東から）
  - e SK2完掘（北東から）
- 図版3 a SK3断面（東から）
  - b SK3完掘（北から）
  - c SK4断面（北東から）
  - d SK4石出土状況（北西から）
  - e SK4完掘（北西から）
- 図版4 a SK5断面（北から）

- b SK5木枠出土状況（西から）
  - c SK5完掘（北から）
  - d SK6断面（南西から）
  - e SK6木製品出土状況（南から）
  - f SK6完掘（南から）
- 図版5 a SK7断面（西から）  
b SK7石検出状況（北から）  
c SK7完掘（北から）
- 図版6 a SD1西側断面（東から）  
b SD1南側断面（北から）
- 図版7 a SD2断面（北西から）  
b SD2遺物出土状況①（西から）  
c SD2遺物出土状況②（北から）
- 図版8 a SD3断面（西から）  
b SD3遺物出土状況①（南西から）  
c SD3遺物出土状況②（南から）
- 図版9 a SD1～SD3、SF1完掘（西から）  
b SD1～SD3、SF1完掘（東から）
- 図版10a SE1検出状況（北西から）  
b SE1完掘（北西から）  
c SE2遺物出土状況（南東から）  
d SE2完掘（西から）
- 図版11a SX1断面（南東から）  
b SX1完掘（北から）  
c SX2断面（北西から）  
d SX2完掘（東から）  
e P5断面（東から）  
f P5遺物出土状況（南から）  
g P5完掘（南から）  
h P1～P4、P6、P7完掘（北東から）
- 図版12 遺跡完掘（直上から）
- 図版13 出土遺物1
- 図版14 出土遺物2
- 図版15 出土遺物3

- 図版16 出土遺物4  
 図版17 出土遺物5  
 図版18 出土遺物6  
 図版19 出土遺物7  
 図版20 出土遺物8  
 図版21 出土遺物9  
 図版22 出土遺物10  
 図版23 出土遺物11  
 図版24 出土遺物12  
 図版25 出土遺物13

#### 安芸国分寺周辺遺跡

- 図版26a 調査前風景（南から）  
 b 調査区西側壁面（北東から）  
 図版27a SD1検出（北西から）  
 b SD1完掘（北西から）  
 c SD1断面（北西から）  
 d SD1遺物出土状況①（西から）  
 e SD1遺物出土状況②（北東から）  
 f 作業風景（東から）  
 図版28a 調査区北西部完掘（東から）  
 b 完掘（南西から）  
 図版29 出土遺物14  
 図版30 出土遺物15  
 図版31 出土遺物16  
 図版32 出土遺物17  
 図版33 出土遺物18  
 図版34 出土遺物19

#### 表 目 次

第1表 聖門遺跡遺物観察表 .....	38
第2表 安芸国分寺周辺遺跡遺物観察表 .....	50

## I　はじめに

東広島市では、急速な発展に比して市街地内の縦貫道路の整備が遅れ、朝夕のラッシュ時や休日には、国道や県道などの主要幹線道路に車が集中する事態がみられる。このような渋滞を避けた車両等は市街地の小規模な道路に流れ込み、事故などの新たな問題も多く発生しているのが現状である。このため市街地における縦貫道路の整備を図ることで、交通混雑の解消や市街地へのアクセスを強化し、歩行者及び自転車等に対する安全確保と防災機能の強化を目指している。都市計画道路吉行泉線道路改良事業は、このような目的で実施される事業であり、聲門遺跡及び安芸国分寺周辺遺跡の発掘調査は、その事業に係わり実施したものである。また平成18年度から平成20年度には同事業により安芸国分寺周辺遺跡の一部の発掘調査が実施され、発掘調査報告書が既刊されている。

以下、調査の経緯について概述することにする。

### 平成26年度の経緯

平成21(2009)年5月14日付けで東広島市都市部都市整備課(以下、「都市整備課」という。)から都市計画道路吉行泉線道路改良事業地内の試掘調査の依頼があった。これを受けて東広島市教育委員会生涯学習文化課(以下、「市教委」という。)は、平成22(2010)年2月3~5日に試掘調査を実施した。試掘の結果、当該計画地内に安芸国分寺周辺遺跡(約700m<sup>2</sup>)及び聲門遺跡(650m<sup>2</sup>)を確認した旨、同年3月29日付けで都市整備課に回答した。市教委と都市整備課はその取扱いについて協議したが、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることもやむを得ないと判断された。その後平成26(2014)年5月7日付けで埋蔵文化財発掘の通知(土木工事の届出)が都市整備課から提出され、事前に発掘調査を実施することとなった。都市整備課から同年5月19日付けで市教委に対して埋蔵文化財の発掘調査について依頼があった。市教委は同年5月26日付けで発掘調査を実施することを承諾する旨を都市整備課に回答した。

発掘調査(現地作業)は、聲門遺跡が同年9月から同年11月まで、安芸国分寺周辺遺跡が同年11月から平成27(2015)年2月までの期間で実施し、順次整理作業及び発掘調査報告書の印刷刊行を実施した。

本報告書は、以上のような経過を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。古代から中世研究の資料として利用するのみにとどまらず、当該地域の歴史の資料として、また埋蔵文化財に対する理解を深める資料として広く活用していただければ幸いである。

発掘調査にあたっては、東広島市都市部都市整備課の御協力を得るとともに、地元の方々には調査をはじめとして多大なる御協力をいただいた。

末筆ながら記して感謝の意を表したい。

## II 位置と環境

東広島市は広島県の中央部に位置し、県内4番目の人口を擁する中核都市である。本市は、「未来にはばたく国際学術研究都市－ともに育み、人が輝くまち－」を将来の都市像とし、それに基づく都市基盤整備、区画整備事業など、各種の開発事業が進展するとともに、山陽自動車道・山陽新幹線・山陽本線などの大動脈が市内を東西に貫き、高規格道路の呉東広島道路が建設されるなど、交通の要所としても関連開発が進展している。これらの事業に関連して、このたび都市計画道路吉行泉線道路改良事業による発掘調査を実施したものである。

聲門遺跡及び安芸国分寺周辺遺跡の所在地は西条町吉行・土与丸にあり、西条盆地の北東部に位置する。西条盆地は標高200m前後の山間盆地であり、瀬戸内海側と日本海側、中国地方の東西を結ぶ交通の要衝地として古くから重要な位置を占めてきた。また、低平な地形で県内でも有数の遺跡密集地である。これらの遺跡は、標高575mの龍王山の南側に広がる低丘陵にあり、西条盆地の北側の裾部にあたる。主に古代から中世を主体とする遺構からなる。以下では、周辺地域の遺跡の様相について概観する。

### [旧石器時代・縄文時代]

旧石器時代の遺跡は、五楽遺跡(8)や鐘錠原池遺跡(9)などで採集されている。今のところ調査地周辺では縄文時代の纏まった資料は確認されていない。

### [弥生時代]

弥生時代の遺跡については、これまで多くの遺跡が確認されているが、中期後半以前の遺跡は非常に少ない。前期では友松3号遺跡(10)<sup>(1)</sup>、前期～中期では小西遺跡(11)<sup>(2)</sup>、団子遺跡(12)<sup>(3)</sup>などがあり、いずれも前期でみると後半に位置付けられる。また小西遺跡や団子遺跡は前期後半から中期を主体とする遺跡であるが、土坑等や自然流路から少量ではあるが、弥生土器が出土している。

中期では大槅1号遺跡(13)<sup>(4)</sup>、助平2号遺跡(14)<sup>(5)</sup>、湯谷追遺跡(15)<sup>(6)</sup>などがあり、西条盆地各地に点在している。小西遺跡のように前期後半から連続するものや助平2号遺跡など、中期中葉後半に集落の形成が始まり後期まで集落が存在するもの、後2者は沖積地から少し比高差の高い低丘陵上に立地するものが多く、後期の遺跡の一般的な立地と共通する。助平2号遺跡は中期中葉後半～後期前葉の遺跡で、1時期が1～数件の竪穴住居跡とそれに伴う貯蔵穴などで構成される小規模な集落が確認されている。

後期になると石佛遺跡(16)<sup>(7)</sup>、諫訪神社周辺遺跡(17)<sup>(8)</sup>、諫訪神社南遺跡(18)<sup>(9)</sup>、後迫1号遺跡(19)<sup>(10)</sup>、奥田遺跡(20)<sup>(11)</sup>、大槅2号遺跡(21)<sup>(12)</sup>、大槅3号遺跡(22)<sup>(13)</sup>などがある。これらの遺構群は弥生時代後葉～後葉に位置付けられる。また淨福寺遺跡(23)<sup>(14)</sup>からは、後期の祭祀に使用したと考えられる遺物が出土している。後期になると、狐が城跡(24)<sup>(15)</sup>などの遺跡があり、箱式石棺、石蓋土坑墓、土坑墓などを主体とした墳墓群が形成される。特にこの時期になると箱式石棺の割合が大きく増加していることがわかる。

### [古墳時代]



1. 聲門遺跡 2. 安芸国分寺周辺遺跡 3. 史跡安芸国分寺跡 4. 大地面遺跡 5. 青谷1号遺跡 6. 鶩田遺跡 7. 平田遺跡  
 8. 五楽遺跡 9. 鐘鑄原池遺跡 10. 友松3号遺跡 11. 小西遺跡 12. 团子遺跡 13. 大槻1号遺跡 14. 助平2号遺跡  
 15. 湯谷追遺跡 16. 石佛遺跡 17. 諸訪神社周辺遺跡 18. 諸訪神社南遺跡 19. 後追1号遺跡 20. 奥田遺跡 21. 大槻2号遺跡  
 22. 大槻3号遺跡 23. 淨福寺遺跡 24. 狐が城跡 25. 史跡三ッ城古墳 26. 大槻第1号古墳 27. 大槻第3号古墳 28. 古市古墳  
 29. 山崎1号遺跡 30. 山崎2号遺跡 31. 道照遺跡 32. 八幡山宮下遺跡 33. 御建遺跡 34. 四日市遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

古墳時代をみると西条盆地のほぼ中央に中期の古墳として史跡三ッ城古墳（25）<sup>(15)</sup>、大槻第1号古墳（26）<sup>(16)</sup>、同第3号古墳（27）<sup>(17)</sup>などがある。後期の古墳には狐が城古墳（24）<sup>(18)</sup>、古市古墳（28）<sup>(19)</sup>がある。

### [古代以降]

古代以降の主要な遺跡には以下のものが上げられる。古代では史跡安芸国分寺跡（3）<sup>(20)</sup>、聲門遺跡（1）、安芸国分寺周辺遺跡（2）<sup>(21)</sup>、大地面遺跡（4）<sup>(22)</sup>、青谷1号遺跡（5）<sup>(23)</sup>、鶩田遺跡（6）<sup>(24)</sup>、平田遺跡（7）<sup>(25)</sup>、などが史跡安芸国分寺跡を中心とする周辺に分

布している。安芸国分寺周辺遺跡や青谷1号遺跡からは円面鏡が出土し、大地面遺跡からは大型の掘立柱建物跡が検出されており、郡衙など役所的な施設として捉えられている。中世になると南北朝期及び室町時代には狐が城跡（24）<sup>(26)</sup>を始めとする多くの山城が築城されている。また集落では山崎1号遺跡（29）<sup>(27)</sup>、山崎2号遺跡（30）<sup>(28)</sup>、道照遺跡（31）<sup>(29)</sup>、八幡山宮下遺跡（32）<sup>(30)</sup>などがある。主なものでは、山崎1号遺跡からは、輪の羽口や鉄滓が溶着した土師質土器などが出土し、鍛冶に関係した遺構と考えられている。御建遺跡（33）<sup>(31)</sup>では、中世山陽道の一部や町屋などが確認された。近世では、西国街道の宿場町として栄えた四日市遺跡（34）<sup>(32)</sup>は近世から幕末に掛けての宿場町の様相を伝えている。近代では御建遺跡から酒造に使用される蒸米用の釜場跡が検出され、酒造の一端を知ることができた。

\*大カッコの数字は、図1の番号に、小カッコの数字は、参考文献の数字と同一。

## 参考文献

- (1) 津田真季編『友松2・3号道路発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成26(2014)年
- (2) 藤岡孝司編『小西道路発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成10(1998)年
- (3) 中山学編『辻子遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成16(2004)年
- (4) 佐々木直彦編『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(II)』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成5(1993)年
- (5) 横田千佳穂編『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- (6) 石井隆博編『湯谷迫遺跡』『埋蔵文化財調査報告』 東広島市教育委員会 平成5(1993)年
- (7) 佐伯博司編『石佛遺跡』『山陽白駆車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(V)』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成2(1990)年
- (8) 妹尾赳三編『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成7(1995)年
- (9) 石井隆博編『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成17(2005)年
- (10) 永井康輔『後追1号道路発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成9(1997)年
- (11) 沢元保夫編『奥田遺跡』『奥田・是石・鶴田・藤田』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成元(1989)年
- (12) 道上康仁編『大槀2号遺跡』『大槀遺跡群』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和60(1985)年
- (13) 道上康仁編『大槀3号遺跡』『大槀遺跡群』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和60(1985)年
- (14) 伊藤健司編『淨福寺遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 昭和59(1984)年
- (15) 石井隆博編『史跡三ヶ城古墳発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成16(2004)年
- (16) 藤岡孝司編『大槀第1号古墳』『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』 東広島市教育委員会 平成5(1993)年
- (17) 横田千佳穂編『狐が城跡』『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- (18) (17) 同じ
- (19) 横田千佳穂編『古市古墳』『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58(1983)年
- (20) 中山学他編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書1~IV』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成11~19(1999~2007)年
- (21) 横田広編『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成21(2009)年
- (22) 古野健志編『大地面道路発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成20(2008)年
- (23) 石井隆博編『青谷1号道路発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成14(2002)年
- (24) 沢元保夫編『鶴田遺跡』『奥田・是石・鶴田・藤田』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成元(1989)年
- (25) 石井隆博編『平田遺跡発掘調査報告書』 東広島市教育委員会 平成17(2005)年
- (26) (17) 同じ
- (27) 妹尾赳三編『山崎1号遺跡発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成7(1995)年
- (28) 古野健志編『山崎2号遺跡発掘調査報告書』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成11(1999)年
- (29) 鍛治益生編『道照道路』 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和57(1982)年
- (30) 藩坂光彦編『八幡山宮下遺跡発掘調査報告』 八幡山宮下遺跡発掘調査団 昭和56(1981)年
- (31) 横田 広編『御建道路発掘調査報告書I・II』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成22~25(2010~2013)年
- (32) 石原敏之他編『四日市遺跡発掘調査報告書1~IV』 財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成16~19(2004~2007)年

### III 調査の概要

聲門遺跡（東広島市西条町土与丸）、安芸国分寺周辺遺跡（東広島市西条町吉行・土与丸）の発掘調査は、都市計画道路吉行泉線道路改良事業に係るものである。聲門遺跡の調査面積約650m<sup>2</sup>で、遺構は土坑7基、溝状遺構3条、道状遺構1条、井戸跡2基、柱穴10個、性格不明遺構2基を検出した。遺物は、須恵器、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、古代瓦、金属製品、木製品、石製品などが出土した。安芸国分寺周辺遺跡は調査面積約700m<sup>2</sup>で、遺構は溝状遺構1条や遺物包含層を検出した。遺物は須恵器、土師質土器、古代瓦、金属製品などが出土した。

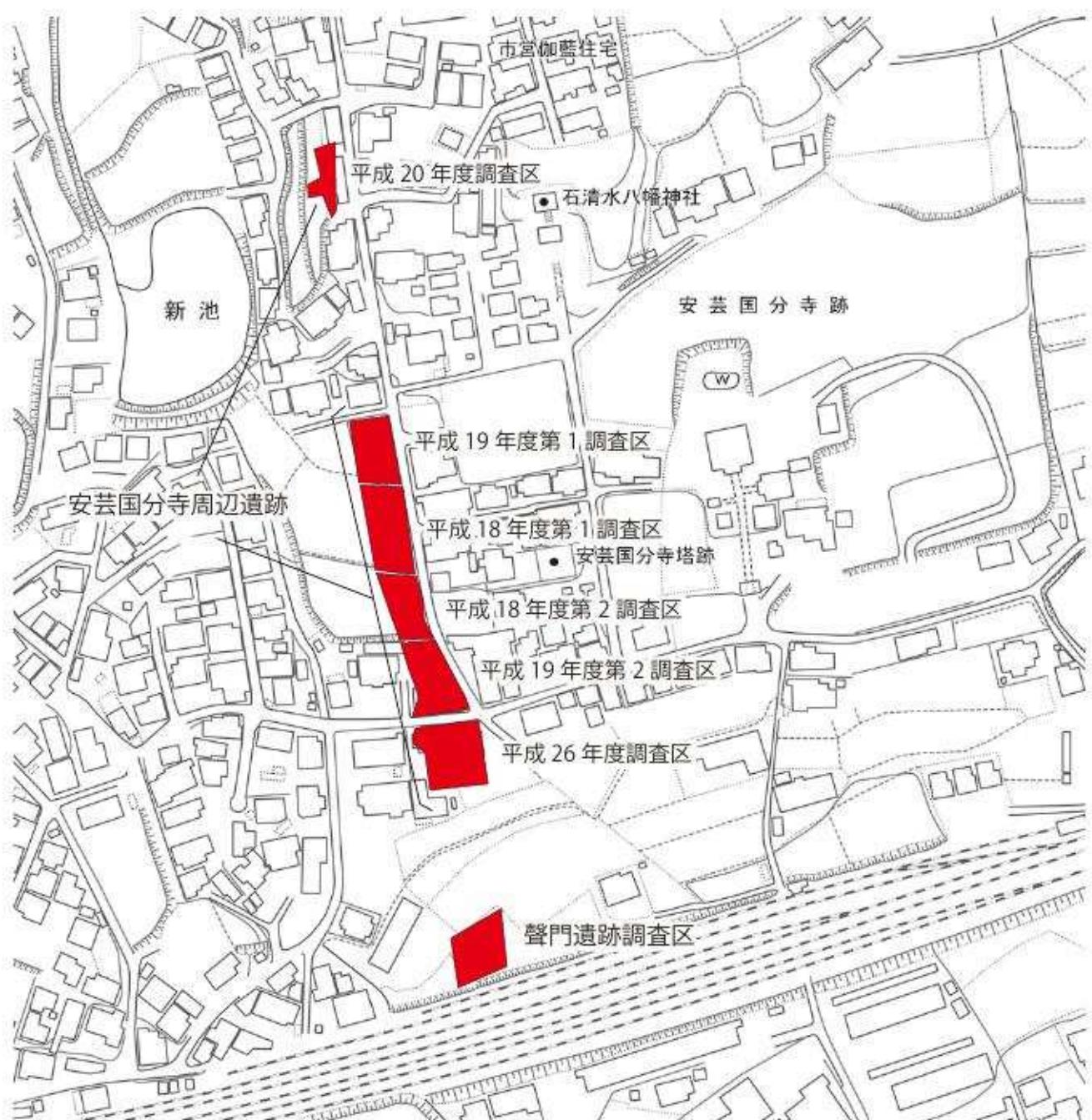
#### 1. 聲門遺跡

聲門遺跡の調査は、現状での調査前の状況を写真撮影した。その後、試掘調査で得た資料を基に遺構検出面まで、調査区の南側から順に重機による表土剥ぎを実施した。遺構検出面に近づくほど湧水が著しくなり、特に南側の調査区内に水が溜まることから、水中ポンプを使用し常時排水を行うことになった。この表土剥ぎを行うに際して、調査区周辺にはJR山陽本線や民有地が隣接してあるため、それらに影響を及ぼさないよう慎重に実施していった。表土剥ぎ後、調査区の北側では遺構密度が低く、中央より下半から南側に遺構が集中して存在し、良好な遺物包含層の堆積がみられた。また遺構検出面からは、手作業により順次精査及び遺構検出作業を実施した。また円滑な実測作業を進めるために、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）に基づき5m方眼の測量用基準杭を打設し、遺構の位置関係を明確に記録できるようにした。遺構検出後は、検出状況の写真撮影を行い、掘り下げを行っていった。各遺構については、個別の検出状況写真撮影及び埋土の堆積状況を確認するため、遺構を半裁することで、土層の観察を行い記録した。遺物包含層からは良好な資料を多量に得ることができた。最後に調査区全体の完掘状況の写真撮影を足場による撮影とリモコンヘリコプターを使用し、空中写真撮影を行うことにより最終的な記録を行い、調査を終了した。調査終了後には、重機と人力により調査範囲全体の埋戻し及び整地作業を実施し、現状復帰を行ったが、湧水が著しいため埋戻し土が安定せず、重機などが沈み、はまり込むという状況であったため、労災事故の発生や隣接するJR山陽本線への影響等も考慮し、時間をかけて慎重に実施していくことにより安全対策を施しながら実施した。

なお埋め戻し後も湧水が浮き出てくることや、隣接する安芸国分寺周辺遺跡の発掘調査に備えて、継続して水中ポンプによる排水を実施した。

#### 2. 安芸国分寺周辺遺跡

安芸国分寺周辺遺跡の調査は、先に実施された都市計画道路吉行泉線道路改良事業第1期工区により平成18（2006）年度～平成20（2008）年度に、財團法人東広島市教育文化振興事業団による発掘調査が実施されており、その調査区が史跡安芸国分寺跡の西側に隣接することなどから、史跡安芸国分寺跡の西側の様相が次に報告され、「安芸国分寺周辺遺跡発掘調



第2図 周辺地形図（1:5,000）

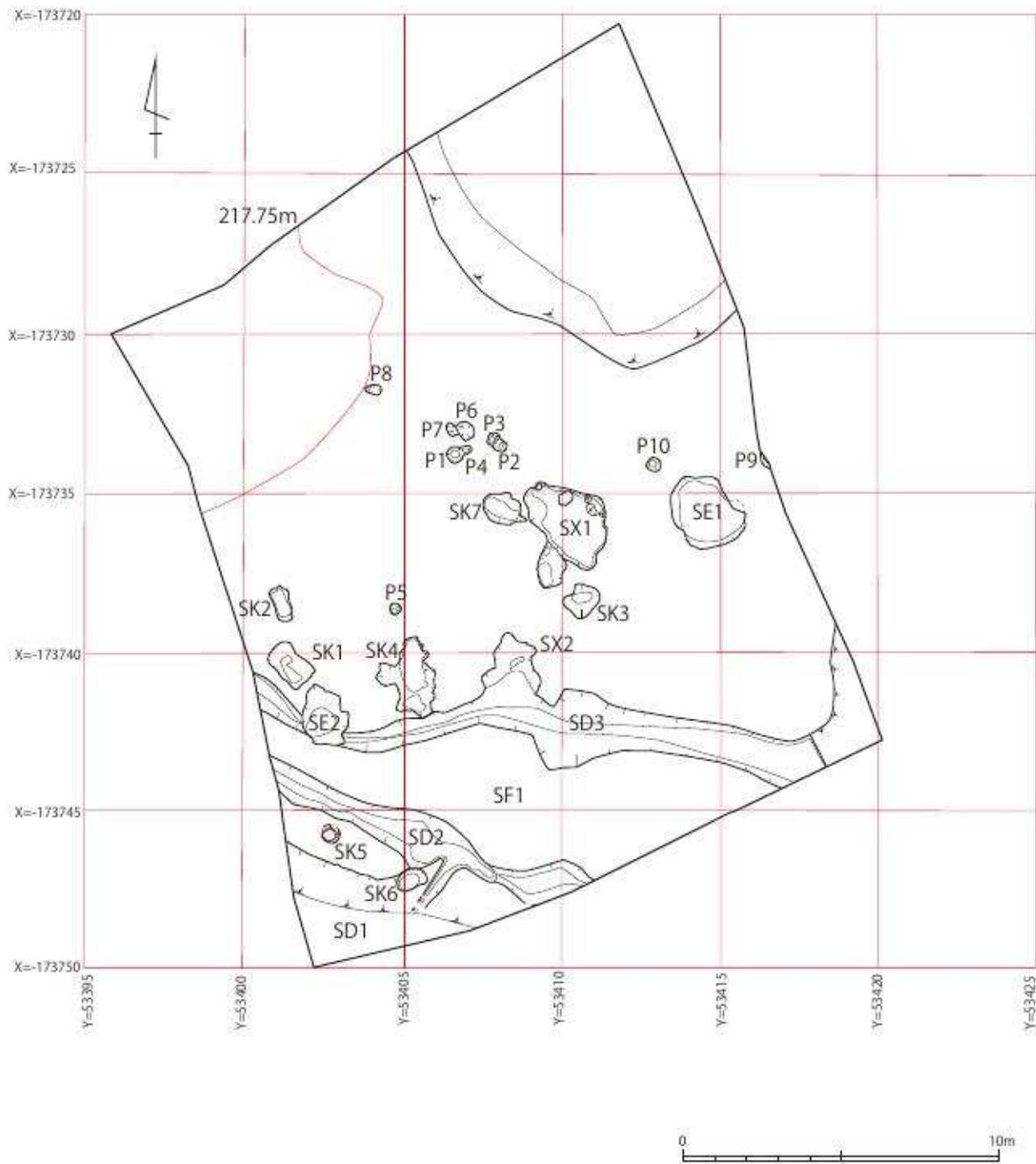
査報告書』として刊行されている。今回の調査区との関連性を求めるため、既調査区の主な遺構と遺物について概説しておくこととする。

## 既調査区の主な遺構と遺物

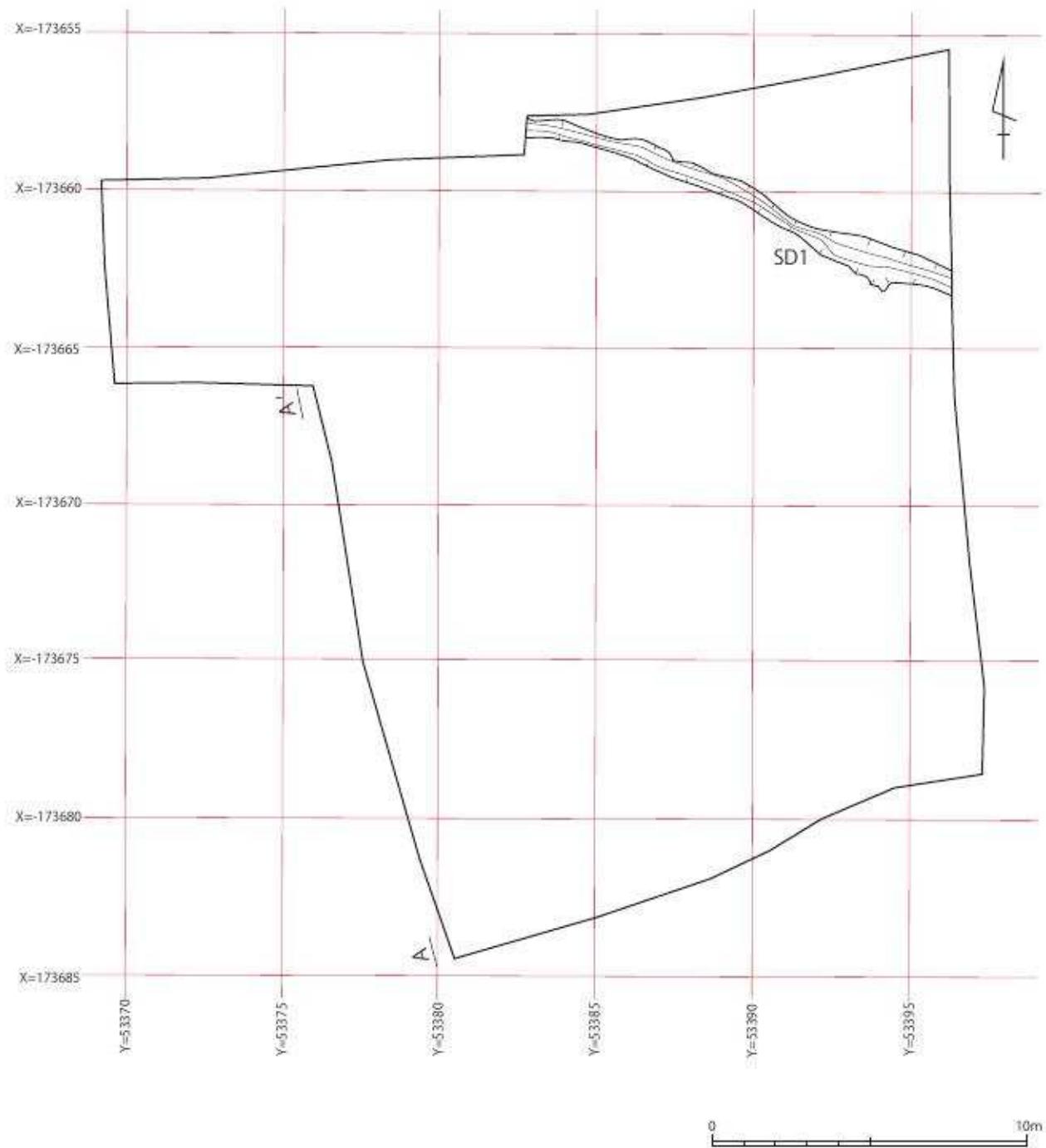
1. 平成18年度第1調査区（第2図） 遺構は、溝状遺構11条、土坑2基、流路条遺構1条、柱穴4基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、土師質土器などが出土地した。
2. 平成18年度第2調査区（第2図） 遺構は、溝状遺構12条、土坑6基、流路条遺構1条、柱穴8基を検出した。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、古代瓦、土師質土器などが出土した。
3. 平成19年度第1調査区（第2図） 遺構は、柱穴列1条、溝状遺構10条、土坑6基、性格不明遺構1基、柱穴4基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、古代瓦、鉄製品などが出土した。
4. 平成19年度第2調査区(第2図) 遺構は、柱穴列1条、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構7条、土坑1基、性格不明遺構8基を検出した。遺物は、土師器、須恵器などが出土地した。
5. 平成20年度調査区（第2図） 遺構は、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構1条、土坑1基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、綠釉陶器、陶磁器、古代瓦などが出土した。

今回の調査は、まず現状での調査前の状況を写真撮影した。調査区の北側が宅地跡であり、南側が水田であったが、南側半分の水田面の上層に宅地部との高さまで、工事残土や宅地の廃材などが現状より約2m積み上げられているという状況であった。市街地での調査のため、作業員の休憩所や駐車場及び廃土の移動場所などを確保する必要があり、このことを踏まえて表土剥ぎについては、部分的に行っていくこととした。先に調査区の東側に進入路を確保するため、北西隅から隨時重機による表土剥ぎを実施していく、北西隅の調査が終了した箇所を一端埋め戻すことにより再度西側に進入路などを確保した。そして東側の表土剥ぎを行つていったことから、表土剥ぎにかなりの時間を要することとなった。

また表土がマサ土の硬化土であり、非常に硬く締まっていたことや廃土の移動にも時間を要した。それから調査区に隣接して生活道や民有地があるため、それらに影響を及ぼさないよう安全対策を施し慎重に実施した。遺構検出面からは、手作業により順次精査及び遺構検出作業を実施した。また円滑な実測作業を進めるために、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）に基づき5m方眼の測量用基準杭を打設し、遺構の位置関係を明確に記録できるようにした。遺構検出後は、検出状況の写真撮影を行い、掘り下げを行つていった。遺構については、個別の検出状況写真撮影及び埋土の堆積状況を確認するため、遺構を半裁するで、土層の観察を行い記録した。遺物包含層からは良好な資料を多量に得ることができた。最後に調査区全体の完掘状況の写真撮影を行つたが、調査を分割して行つたため、一括した空中写真撮影を行うことが困難であった。そのことにより、調査後の写真撮影については、先述したように北西隅の終了後と東側の終了後と2回に分けて足場による撮影のみを実施した。調査終了後には、重機と人力により調査範囲全体の埋戻し及び整地作業を実施し、現状復帰を行つたが、湧水が著しいため埋戻し土が安定せず、かなりの時間を要することとなった。



第3図 聲門遺跡遺構配置図 (1:200)



第4図 遺構配置図 (1 : 200)

## IV 遺構と遺物

### 1. 聖門遺跡の遺構と遺物

本遺跡では、土坑7基、溝状遺構3条、道状遺構1条、井戸跡2基、柱穴10個、性格不明遺構2基を検出した。遺物は、須恵器、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、古代瓦、金属製品、木製品、石製品などが出土地した。

以下、発掘調査で検出した遺構と、それに伴う遺物について詳述する。

#### SK1（第3・5図、図版2・12）

SK1は、調査区中央付近の西端に位置する土坑である。平面形は、不整の長方形を呈する。壁面の立ち上がりは、上方に向かって斜行する。床面は凸凹している。規模は長軸約1.46m、短軸約0.84m、深さ約0.34mである。埋土は、黒褐色土層と疊層の堆積がみられる。遺物は木製品（板材）が出土地している。

#### 出土遺物（第13図、図版13）

1は、木製品（板材）である。用途は不明である。大きさは長さ約47.6cm、幅約9.8cm、厚さ約2.4cmのものである。

#### SK2（第3・5図、図版2・12）

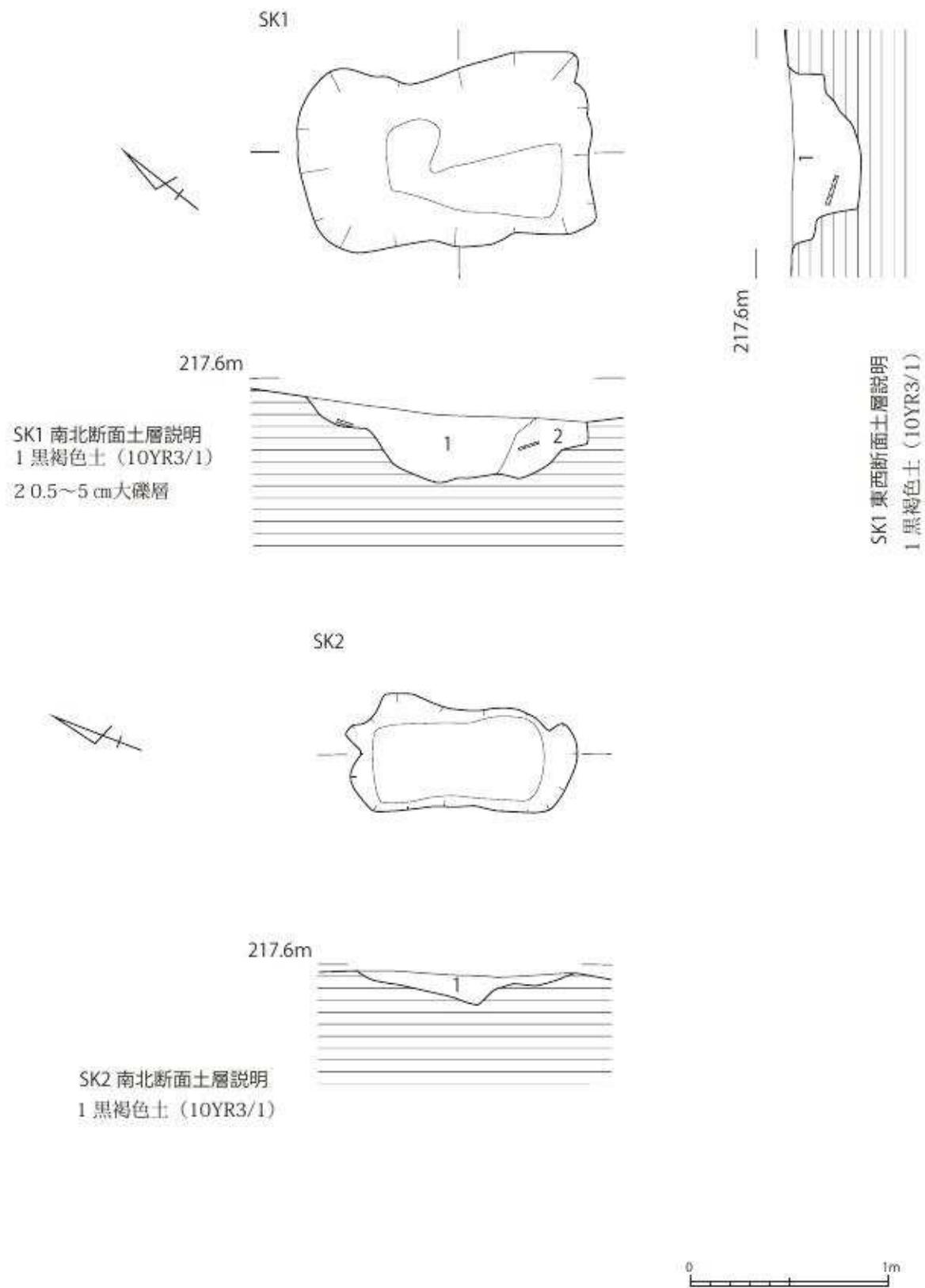
SK2は、SK1の北側約0.50mに位置する土坑である。平面形は、不整の長方形を呈する。壁面の立ち上がりは、上方に向かって斜行する。床面は凸凹している。規模は長軸約1.10m、短軸0.50m～0.58m、深さ約0.14mである。埋土は、黒褐色土層1層の堆積がみられる。遺物は出土地していない。

#### SK3（第3・6図、図版3・12）

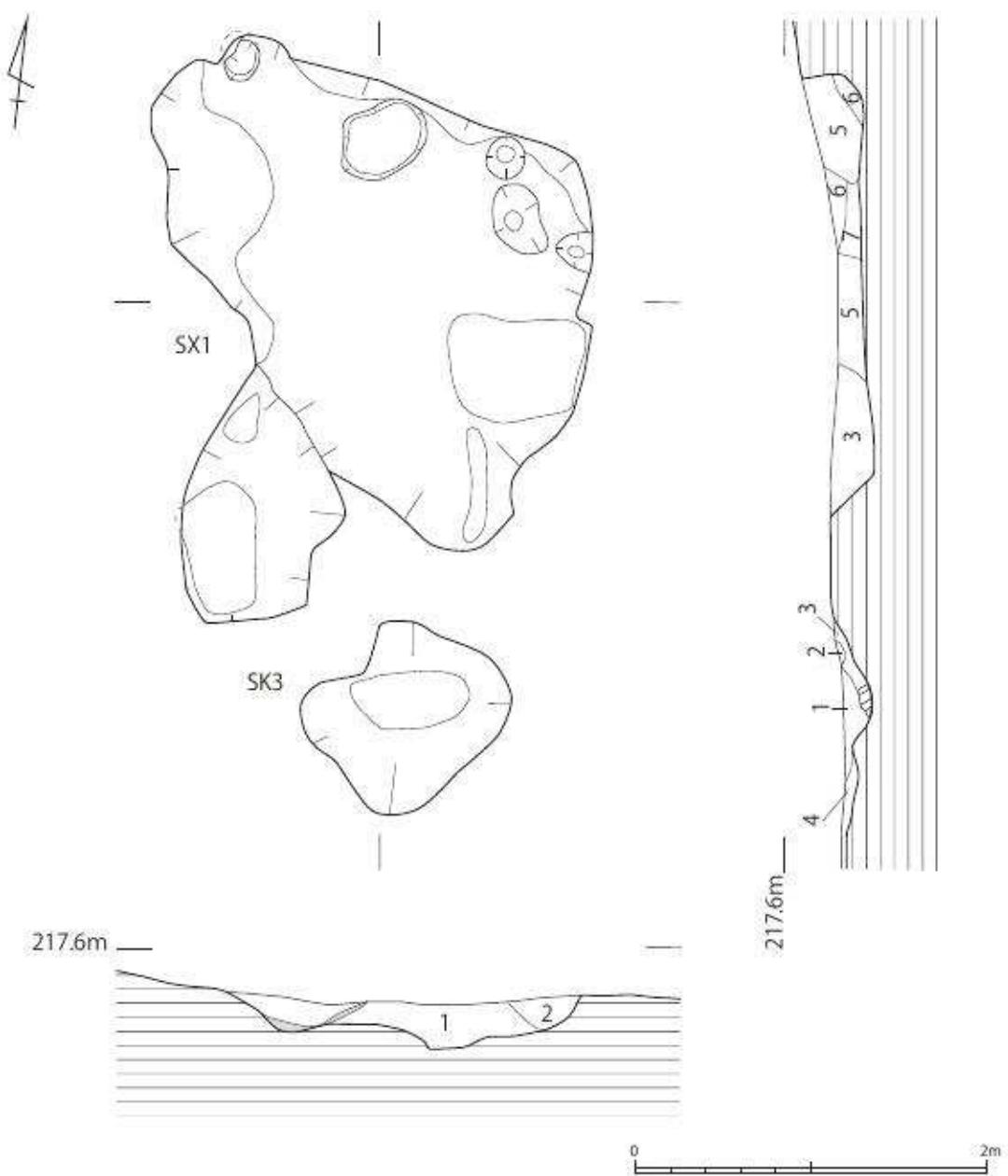
SK3は、SX1の南側約0.08mに位置する土坑である。平面形は、楕円形を呈する。壁面の立ち上がりは、上方に向かって斜行する。床面は凸凹している。規模は長軸約0.90m、短軸約0.81m、深さ0.07m～0.10mである。埋土は、明青灰色砂質土から明黄褐色土の堆積がみられる。遺物は出土地していない。

#### SK4（第3・7図、図版3・12）

SK4は、SK1の東側約2mで、南側はSD3と接している。平面形は、不整の長方形を呈する。壁面の立ち上がりは、若干斜め方向に上がる。床面はほぼ平坦である。規模は長軸約2.58m、短軸0.38m～1.69m、深さ0.12m～0.32mである。埋土は、黒褐色砂質土と黒褐色土の混合土と黒褐色土の堆積がみられる。遺物は古代瓦が出土地している。



第5図 SK1・SK2 実測図 (1 : 30)



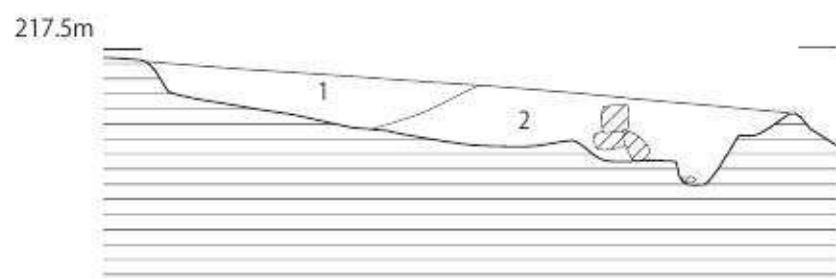
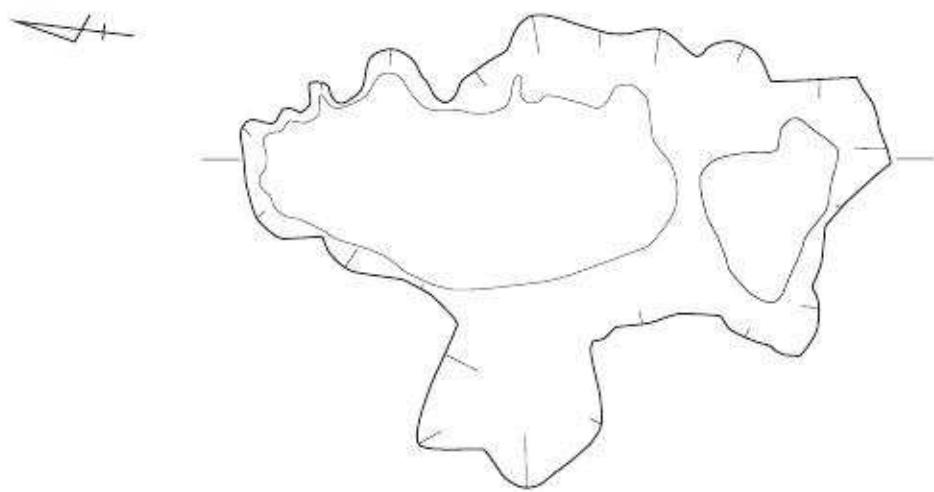
#### SX1 東西断面土層説明

- 1 黒褐色土（10YR3/2）砂質土層を含む
- 2 黒褐色土（10YR3/2）と明青灰色粘質土（10BG7/1）の混合土

#### SK3・SX1 南北断面土層説明

- 1 黒褐色土（10YR3/2）石・遺物・砂層を含む
- 2 明黄褐色土（10YR6/8）
- 3 黒褐色土（10YR3/2）と明青灰色粘質土（10BG7/1）の混合
- 4 明青灰色砂質土（10BG7/1）
- 5 黒褐色土（10YR3/2）
- 6 灰黄色砂質土（2.5YR2/2）
- 7 明青灰色砂質土（10YR3/2）

第6図 SK3・SX1 実測図 (1:40) ※アミ目は砂質土層



SK4南北断面土層説明  
1 黒褐色砂質土と黒褐色土(10YR3/2)の混合土  
2 黒褐色土(10YR3/2)

第7図 SK4 実測図 (1 : 30)

### 出土遺物（第13図、図版13）

2は、軒丸瓦片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は瓦当面は素文であり、凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施し、凹面は布目圧痕がみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。

### SK5（第3・8図、図版4・12）

SK5は、SD1の北側約0.50m、SD2の南側約0.30mに位置する埋桶土坑である。平面形は、不整の円形を呈する。中には直径約0.40mの桶が埋められていたが、竹製のタガのみで底板及び側板は無かった。壁面の立ち上がりは桶が埋められていたことにより、ほぼ垂直である。規模は土坑の掘り方で、長軸約0.58m、北側は若干流失するが残存で短軸約0.44m、深さ約0.10mである。埋土は、桶の中が黒褐色土で、桶の外側に当たる東側で黒褐色粘質土と灰黄褐色砂質土の堆積がみられる。遺物は出土していない。

### SK6（第3・8図、図版4・12）

SK6は、北側をSD2と南側をSD1と接して位置する埋桶土坑である。平面形は不整の長方形を呈する。壁面の立ち上がりは、上方に向かって緩やかに立ち上がる。中には桶底と思われる板材が残っていたが、桶枠は確認できなかった。規模は長軸約0.96m、短軸約0.60m、深さ約0.28mである。埋土は、黒褐色土から黒褐色砂質土の堆積がみられる。遺物は須恵器と木製品が出土している。

### 出土遺物（第13図、図版13）

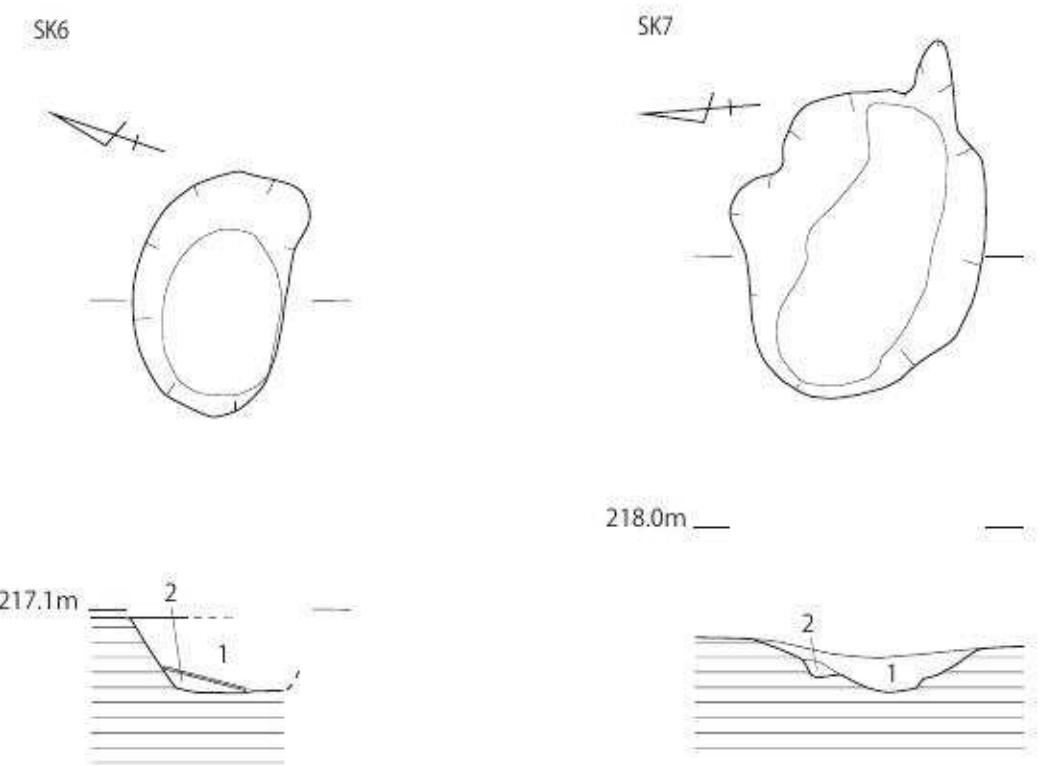
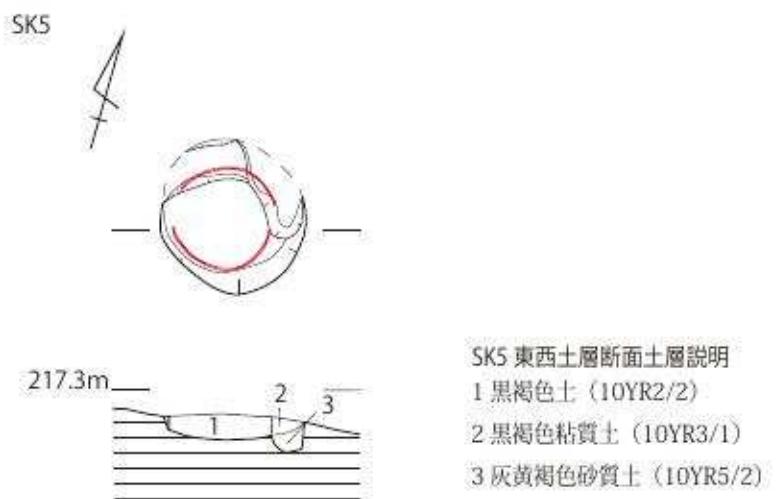
3は、須恵器の甕である。体部から上半を欠失する。大きさは残存器高約16.3cm、底径0.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が板状工具による平行のタタキ目で、内面は内輪タタキ目で、底部はナデを施す。色調は外面が灰色で、内面は灰白色を呈する。4は、木製品の板材である。残存面ではめ込み用のホゾ穴がみられることから桶等の底板に使用されていたものと思われる。大きさは残存長35.3cm、幅11cm、厚さ1.1cmである。

### SK7（第3・8図、図版5・12）

SK7はSX1の西側にほぼ接して位置する土坑である。平面形は、不整の長方形を呈する。壁面の立ち上がりは、上方に向かって緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.20m、短軸約0.94m、深さ約0.14mである。埋土は、黒褐色砂質土から褐灰色砂質土の堆積がみられる。遺物は出土していない。

### SD1（第3・9・10図、図版6・9・12）

SD1は、調査区の南西端に位置する、西から東へ向かって傾斜した東側と西側は調査区外に続いている。規模は残存で、長さ約6.80m、幅約3.40m、深さ約0.78mである。断面は緩やかに立ち上がり逆台形を呈する。埋土は、黒褐色粘質土から黄褐色砂質土までの堆



第8図 SK5・SK6・SK7 実測図 (1:30) ※赤色は竹製のタガ (木枠)

積がみられる。遺物は、須恵器、古代瓦、木製品などが出土している。

#### 出土遺物（第13～16図、図版14～18）

5は、須恵器の杯片である。破片のため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。6は、須恵器の杯片である。器高は3.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施す。また底部には「三万」の字の墨書きがみられる。色調は内外面ともに灰白色を呈する。7は、須恵器の杯である。法量は、口径14.2cm、器高3.5cm、底径8.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法ののちナデを施す。色調は内外面ともに灰白色を呈する。8は、須恵器の杯片である。底径11.0cmである。焼成は不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施したのち、高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰白色を呈する。9は、須恵器の杯である。法量は、口径16.4cm、器高5.4cm、底径12.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施したのち、高台を貼り付けている。また底部には「-」状のヘラ記号を施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。10は、須恵器の甕片である。破片のため法量は不明であるが、体部最大径を21.8cmのところに持つ。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面がヘラ削りののち回転ナデを施し、自然釉がかかる。内面は回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。11は、須恵器の壺である。底径は9.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰色である。12は、丸瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのち部分的にナデ消し、ケズリを施す。凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。13は、丸瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.7cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面がナデののちケズリで、凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。14は、丸瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのちナデ消し、ケズリを施す。凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。15は、丸瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.5cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのちナデ消し、ケズリを施す。凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。16は、平瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕で、凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸面が灰白色で、凹面が灰色を呈する。17は、平瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕ののちケズリを施す。凹面は布目圧痕と模骨痕をケズリ消したのち、ケズリを施す。

色調は凸凹面ともに灰色を呈する。18は、平瓦の細片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕ののちケズリを施す。凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸面が灰色で、凹面が灰白色を呈する。19は、平瓦の完形品である。法量は長さ35.0cm、広端幅24.3cm、狭端幅26.2cm、厚さ2.0～3.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕ののちケズリを施す。凹面は布目圧痕と模骨痕をナデ消したのち、ケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色である。20は、木製品の板材片である。大きさは残存長19.7cm、残存幅1.2cm、厚さ0.4cmである。

#### SD2（第3・9・10図、図版7・9・12）

SD2は、調査区の南西端にSD1と平行して位置する、西から東へ向かって傾斜した東側と西側は調査区外に続いている。規模は残存で、長さ約11.0m、幅0.90m～1.54m、深さ約0.70mである。断面は緩やかに立ち上がり逆台形を呈する。埋土は、黒褐色粘質土から褐灰色砂質土までの堆積がみられる。遺物は、須恵器、瓦質土器、金属製品、古代瓦、木製品などが出土している。

#### 出土遺物（第17図、図版17・18）

21は、須恵器の壺の破片である。破片のため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が回転ナデで、頸部に凸線1条を施し、自然釉がかかる。内面は回転ナデを施し、頸部に指頭圧痕がみられる。色調は外面が灰色で、内面が灰白色を呈する。22は、高杯の杯部である。脚部以下を欠失する。法量は口径約12.5cm、残存器高3.7cm、底径7.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が回転ナデを施す。内面は回転ナデを施し、指頭圧痕がみられる。脚部の貼り付け痕が残る。色調は内外面ともに青灰色を呈する。23は、須恵器の杯である。口縁部を欠失する。残存器高2.8cm、底径9.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切りののちナデを施す。また底部には「寺」の字の墨書きがみられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。24は、須恵器の杯である。器高4.3cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は外面が灰色で、内面が灰白色を呈する。25は、須恵器の杯である。口径15.8cm、器高5.5cm、底径10.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに薄い灰色を呈する。26は、瓦質土器の皿である。破片のため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が回転ナデで、凸線1条を施し、自然釉がかかる。内面は回転ナデを施す。底部にヘラ切り技法がみられる。色調は内外面ともに灰色である。27は、金属製品の巻である。大きさは径6.5cm、幅6.2cm、厚さ0.4cm、重量15.35gである。28は、軒丸瓦の瓦当面である。直径12.2cm、中房経2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は瓦当面が複弁蓮華文（8葉）で、圈線2条、線鋸歯文がみられ、ナデで仕上げる。凹面はケズリを施す。史跡安芸国分寺跡出土

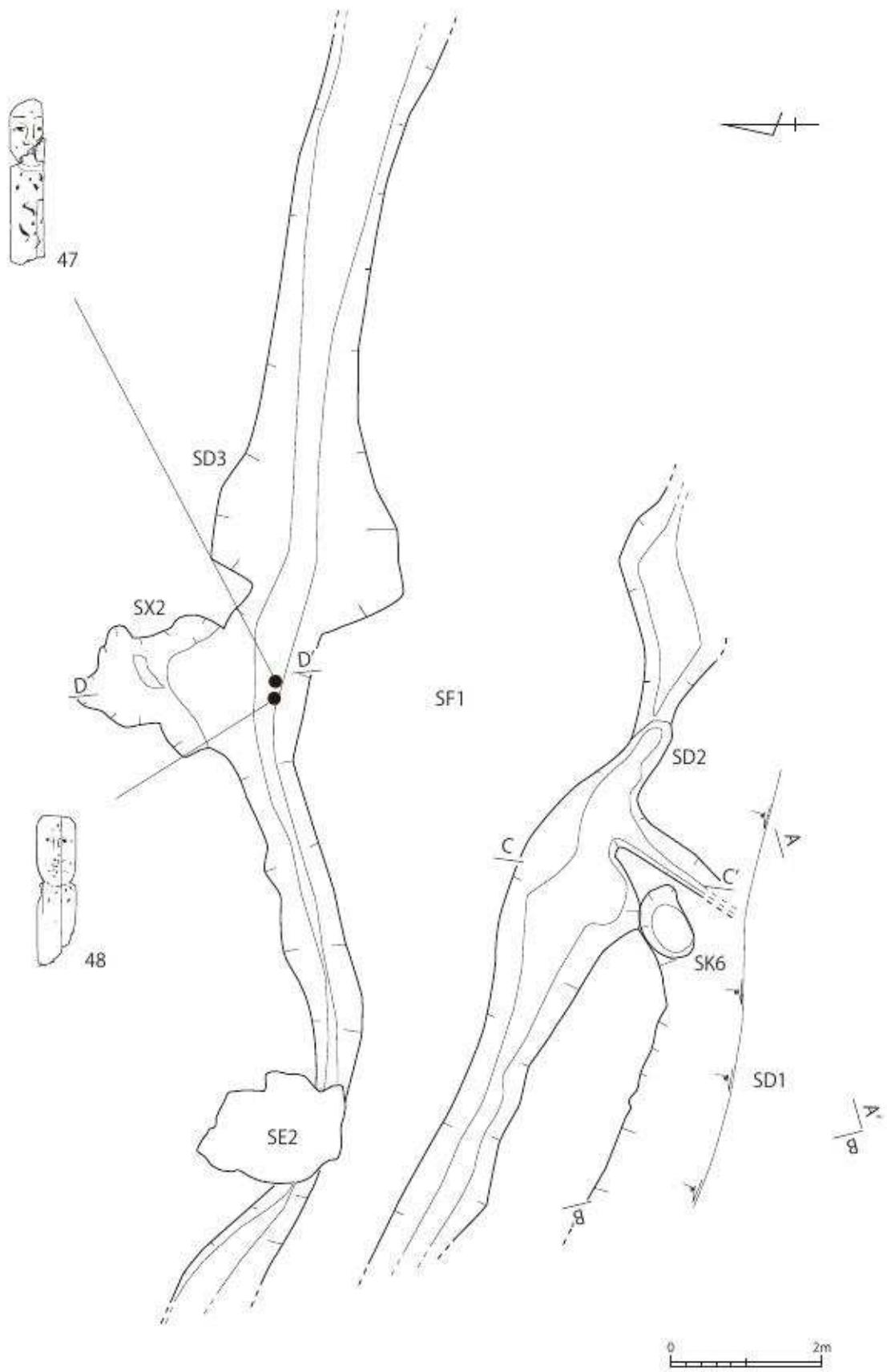
瓦の01 A型式にあたる。色調は薄い灰色を呈する。29は、棒状木製品である。長さ36.0cm、幅1.1cm、厚さ1.0cmである。先端部に加工痕があり、炭化物が付着する。用途は不明である。30は、板状木製品である。残存長さ12.9cm、幅2.1cm、厚さ0.8cmである。用途は不明である。

### SD3 (第3・9・10図、図版8・9・12)

SD3は、SD2の北側約2.50mに位置し、西側の一部がSE2に切られている。西から東へ向かって傾斜した東側と西側は調査区外に続いている。規模は残存で、長さ約18.0m、幅0.50m～1.52m、深さ約0.22mである。断面は緩やかに立ち上がり逆台形を呈する。埋土は、黒褐色土から明青灰色土と黒褐色土の混合土までの堆積がみられる。遺物は、須恵器、土師質土器、古代瓦、木製品、石製品などが出土している。

### 出土遺物 (第17～21図、図版18～23)

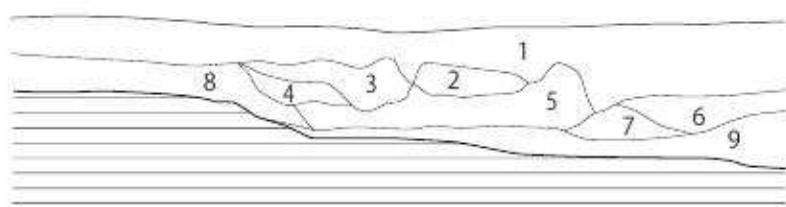
31は、土師質土器の杯の破片である。器高3.5cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は外面が黒色で、内面が暗褐色を呈する。32は、須恵器の杯蓋である。つまみ部を欠失する。口径13.6cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は外面が灰色で、内面はオリーブ色を呈する。33は、須恵器の高杯である。破片のため法量は不明である。焼成は不良で、胎土は密である。調整は、内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰白色を呈する。34は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのち、ナデ消す。凹面は糸切りのち布目圧痕で、ケズリを施す。色調は凸面が灰色と灰白色で、凹面は灰色を呈する。35は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面がナデで、凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。36は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのち一部ナデ消し、ケズリを施す。凹面は模骨痕をケズリ消すが、布目圧痕が薄く残る。色調は凸面が灰白色で、凹面は灰色を呈する。37は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施し、指頭圧痕がみられる。凹面は糸切りのち布目圧痕で、ケズリを施す。色調は凸面が灰白色で、凹面は灰色を呈する。38は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施すが、模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに黒色を呈する。39は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。40は、棒状木製品である。大きさは残存長14.8cm、幅



第9図 SD1～3・SF1・SX2実測図 (1:80)

216.0m A

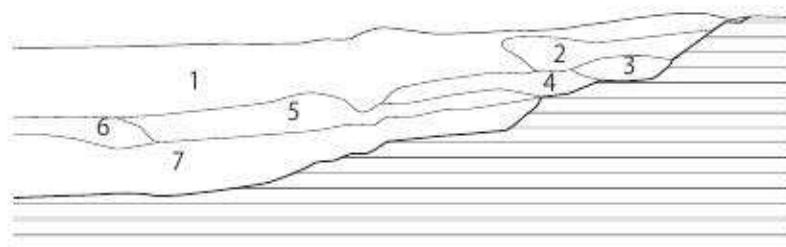
A'



SD1 東西断面土層説明  
1 黒褐色粘質土 (5YR2/1)  
2 黒褐色砂質土 (10YR2/2)  
3 鷺灰色砂質土 (7.5YR7/1)  
4 明褐灰色粘質土 (7.5YR7/1)  
5 暗褐色砂質土 (10YR3/4)  
6 灰白色砂質土 (2.5Y8/2)  
7 暗褐色粘質土 (10YR3/3)  
8 灰白色砂質土 (7.5YR8/2)  
9 黄褐色砂質土 (10YR5/6)

217.0m B

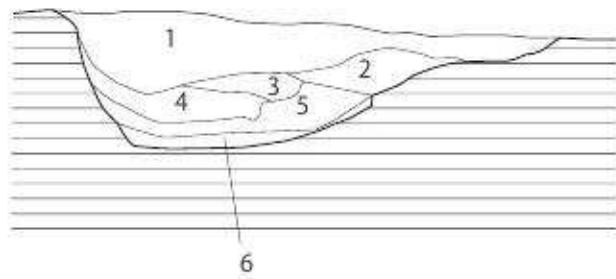
B'



SD1 南北断面土層説明  
1 黒褐色粘質土 (5YR2/1)  
2 鷺灰色砂質土 (10YR5/1)  
3 灰白色砂質土 (10YR7/1)  
4 鷺灰色砂質土 (5YR5/1)  
5 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1)  
6 灰白色砂質土 (2.5Y8/2)  
7 黄褐色砂質土 (10YR5/6)

217.3m C

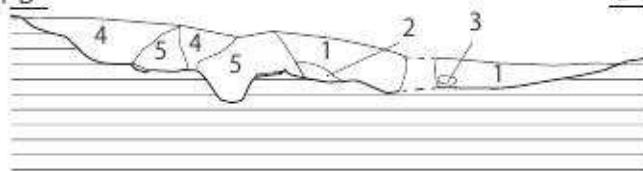
C'



SD2 南北断面土層説明  
1 黒褐色粘質土 (10YR3/1)  
2 鷺灰色砂質土 (10YR4/1)  
3 暗褐色砂質土 (10YR3/3)  
4 黑色粘質土 (10YR2/1)  
5 灰白色砂質土 (10YR7/1)  
6 鷺灰色砂質土 (10YR6/1)

218.9m D

D'



SD3・SX2 南北断面土層説明  
1 黒褐色土 (10YR3/2)  
2 明青灰色粘質土 (10BG7/1)  
3 灰黄褐色礫層 (10YR6/2)  
4 1 層目と同じ  
5 明青灰色土 (10BG7/1) と  
黒褐色土 (10YR3/2) の混合土



第 10 図 SD1 ~ 3 · SF1 · SX2 土層断面図 (1 : 40)

1.5cm、厚さ1.2cmである。先端部に加工がみられる。用途は不明である。41は、棒状木製品である。大きさは残存長20.7cm、幅1.5cm、厚さ1.0cmである。用途は不明である。42は、棒状木製品である。大きさは残存長11.0cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm～0.7cmである。先端部に加工がみられる。用途は不明である。43は、板状木製品である。大きさは残存長9.6cm、幅1.7cm、残存厚0.5cmである。用途は不明である。44は、板状木製品である。大きさは残存長11.2cm、幅2.4cm、厚さ0.5cmである。一部ススの付着がみられるが、用途は不明である。45は、板状木製品である。大きさは残存長11.4cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmである。桶の側板の可能性がある。46は、板状木製品である。大きさは残存長24.0cm、幅2.4cm、厚さ0.5cmである。桶の側板の可能性がある。47は、人形木簡である。大きさは全長16.4cm、残存幅3.3cm、厚さ0.2cmである。頭を表現するために刻目を入れている。48は、人形木簡である。大きさは全長14.8cm、幅3.8cm、厚さ0.2cmである。頭を表現するため刻目を入れている。49は、木簡である。大きさは長さ12.5cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmである。形状は木簡であるため、赤外線撮影を行なったが、文字は確認できなかったことから、未使用品と思われる。50は、木製品の木杭である。大きさは残存長20.8cm、幅4.7cm、厚さ3.5cmである。溝の淵に使用していたのではないかと思われる。51は、木製品の柱材である。大きさは残存長6.7cm、残存幅9.3cm、残存厚5.6cmである。形状からすると柱の部材が想定できる。52は、石製品の台石である。大きさは長さ21.4cm、幅20.7cm、厚さ4.7cm、重量3.7kgである。53は、石製品の磨石である。大きさは長さ10.8cm、幅9.8cm、厚さ2.9cm、重量0.5kgである。

#### SF1（第3・9・10図、図版9・12）

SF1は、北側をSD3と南側をSD2と接して位置する溝状遺構である。西から東に向かって比較的平坦なものであり、牛馬などの足跡が多数みられる。また西側から東側の調査区外に続いている。現存規模は長さ約13.60m、幅1.50m～3.10mである。遺物は土師質土器と古代瓦が出土している。

#### 出土遺物（第22図、図版23・24）

54は、土師質土器の鍋の破片である。破片であるため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。内耳に孔がみられる。色調は内外面ともに橙色を呈する。55は、丸瓦の破片である。破片であるため法量は不明であるが、厚さ1.8cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施したのちナデ消し、ケズリを施す。凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。56は、丸瓦の破片である。破片であるため法量は不明であるが、厚さ2.3cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちナデ消し、ケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。57は、平瓦の破片である。破片であるため法量は不明であるが、厚さ1.8cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施し、凹面は布目圧痕と模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。

### SE1 (第3・11図、図版10・12)

SE1はSX1の東側約2.2mに位置する素掘りの井戸跡である。平面形は橢円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は口部分で長軸約1.86m、短軸約1.29m、深さ約0.92mである。底部の東側が内湾する箇所がある。埋土は、黒褐色粘質土から灰色砂質土の堆積がみられる。遺物は出土していない。

### SE2 (第3・11図、図版10・12)

SE2はSK1の南側約0.06m、SD3の西側で接し位置する素掘りの井戸跡である。西北側の上面は攪乱を受けている。平面形は橢円形を呈する。壁の立ち上がりは、上方に向けて緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.48m、短軸約0.94m、深さ約0.50mである。埋土は、黒褐色土と疊層の堆積がみられる。遺物は底から土師質土器が出土している。

### 出土遺物 (第22図、図版23)

58は、土師質土器の皿である。大きさは口径8.4cm、器高2.0cm、底径5.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施す。井戸の底から出土したため、祭祀などに使用された可能性がある。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。

### P1・4 (第3・11図、図版11・12)

P1・4は、SK7の北西側約1.40mに位置する柱穴である。大きさはP1が直径約0.50m、深さ約0.13mで、P4が直径約0.23m、深さ約0.05mである。遺物は出土していない。

### P2・3 (第3・12図、図版11・12)

P2・3は、P4の北東側約0.50mに位置する柱穴である。大きさはP2が直径約0.34m、深さ約0.12mで、P3が直径約0.42m、深さ約0.24mである。遺物は出土していない。

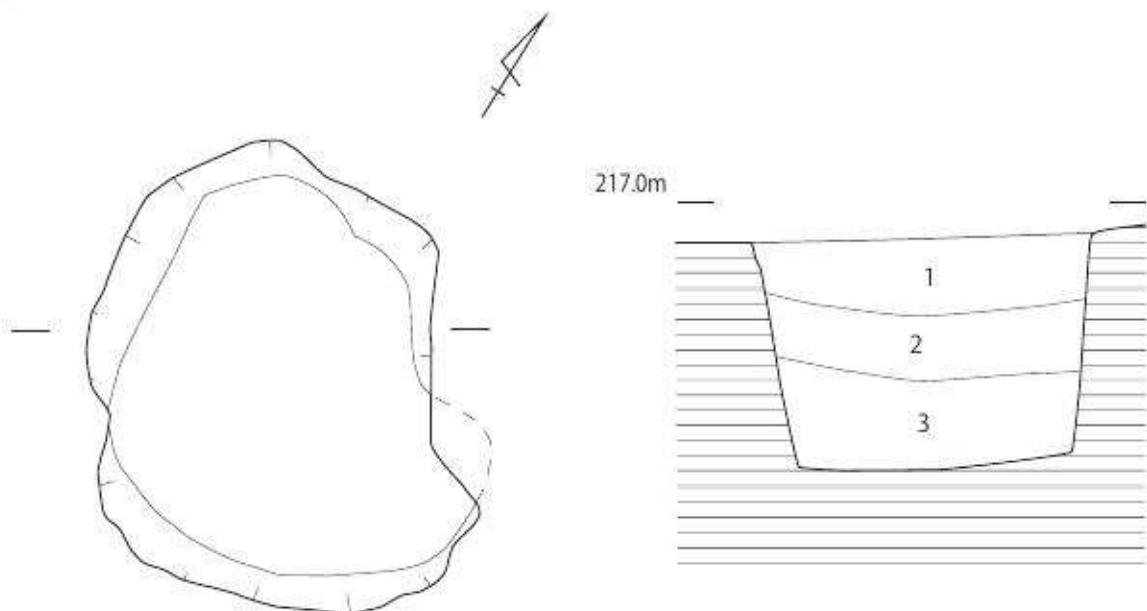
### P5 (第3・12図、図版11・12)

P5は、SK4の北側約0.80mに位置する柱穴である。大きさは直径約0.32m、深さ約0.13mである。遺物は底から土師質土器が出土している。

### 出土遺物 (第22図、図版23)

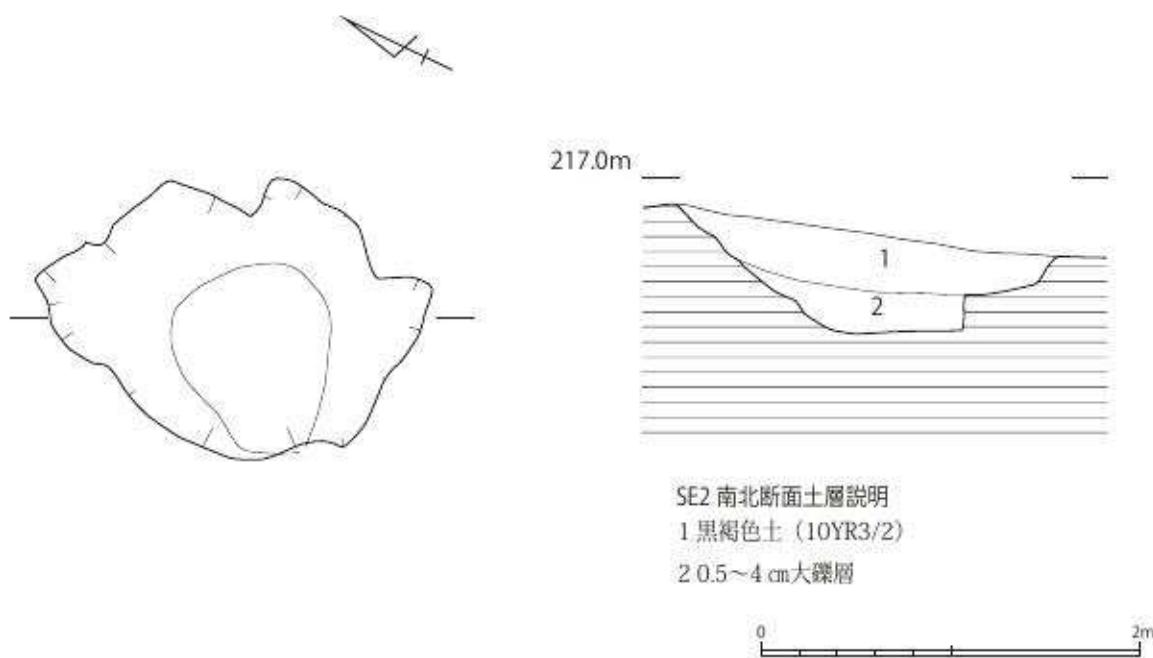
59は、土師質土器の皿の破片である。残存高0.9cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。60は、土師質土器の杯である。口径13.4cm、器高3.1cm、底径8.0cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

SE1



SE1 東西断面土層説明  
1 黒褐色粘質土 (10YR3/2)  
2 明青灰粘質土 (10BG7/1)  
3 灰色砂質土 (10YR6/1)

SE2



第 11 図 SE1・SE2 実測図 1 (1 : 40)

#### P6・7 (第3・12図、図版11・12)

P6・7は、P4の北東側約0.04mに位置する柱穴である。大きさはP6が直径約0.58m、深さ約0.06mで、P7が直径約0.38m、深さ約0.16mである。遺物は出土していない。

#### P8 (第3・12図、図版12)

P8は、P7の北西側約2.40mに位置する柱穴である。大きさは直径約0.34m、深さ約0.24mである。遺物は出土していない。

#### P9 (第3・12図、図版12)

P9は、SE1の北東側約1.50mに位置する柱穴である。3分の2以上が調査区外に依存する。大きさは推定で直径約0.58m、深さ約0.16mである。遺物は出土していない。

#### P10 (第3・12図、図版12)

P10は、SE1の北西側約0.70mに位置する柱穴である。大きさは直径約0.44m、深さ約0.12mである。遺物は出土していない。

#### SX1 (第3・6図、図版11・12)

SX1は、SK3の北側約0.50mに位置する性格不明遺構である。平面形は不整の楕円形を呈する。壁面の立ち上がりは、緩やかに上方に向かって立ち上がる。規模は長軸約2.38m、短軸約2.0m、深さ約0.24mである。北側の底には、直径0.22m～0.46mの浅い落ち込みが5箇所ほどみられる。また南側には長軸約1.32m、短軸約0.86m、深さ約0.21mの付随施設を設けている。用途は駄然とはしないが、何らかに利用した水溜などのようなものがあったのではないかと考えられる。遺物は出土していない。

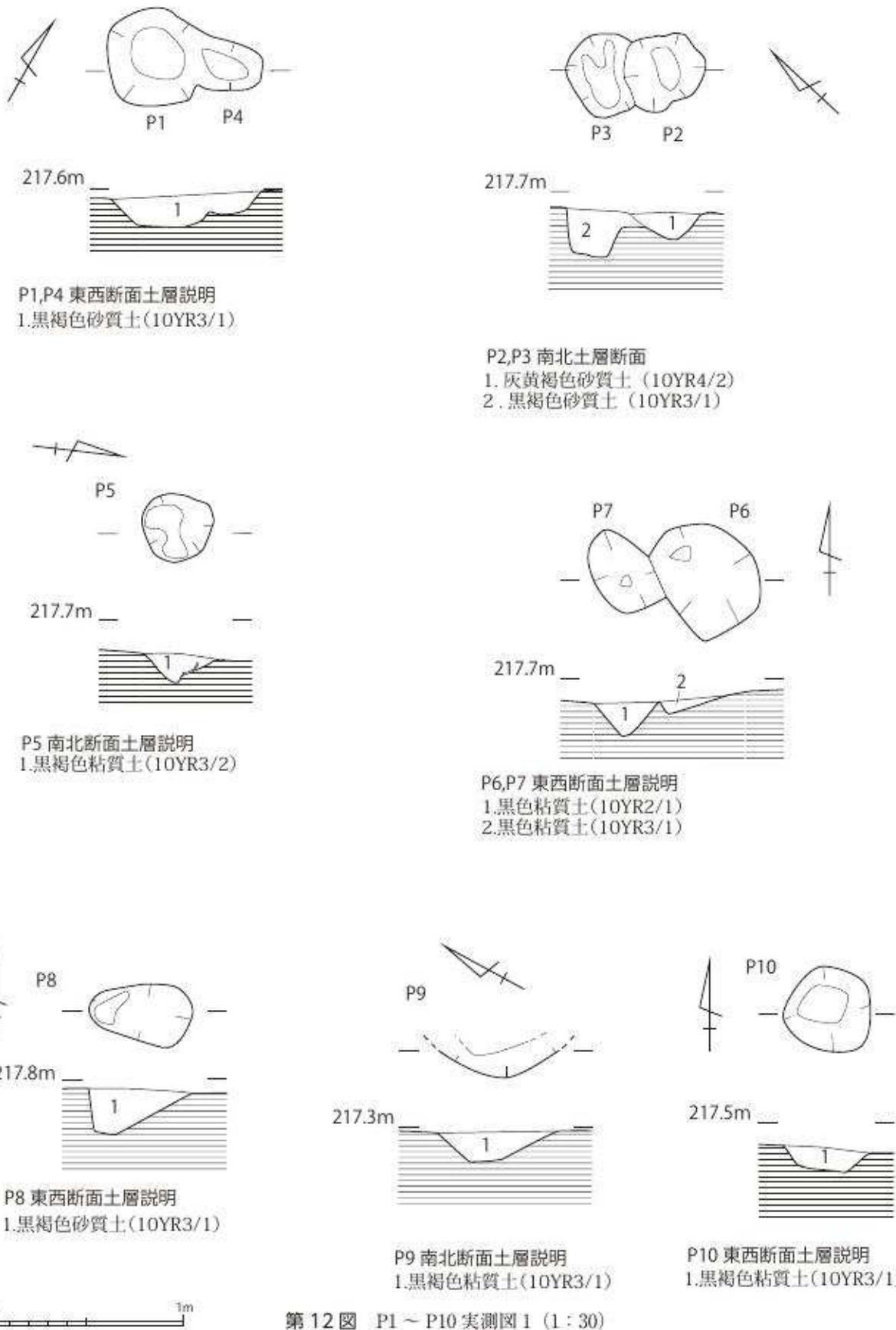
#### SX2 (第3・9・10図、図版11・12)

SX2は、SD3の中央付近に接して位置する性格不明遺構である。平面形は不整の楕円形を呈する。壁面の立ち上がりは、緩やかに上方に向かって立ち上がる。規模は長軸約1.60m、短軸約1.20m、深さ約0.34mである。また南西側には長軸約0.80m、短軸約0.14m、深さ約0.24mの付随施設を設けている。用途は駄然とはしないが、SD3が切っているため、SD3の付随施設を想定することはできない。従ってSD3の北側に単独であったものが、SD3に流れる水の流れを受けることにより、SX2の南側が流失したものと思われる。

遺物は古代瓦や木製品などが出土している。

#### 出土遺物 (第23図、図版24・25)

61は、平瓦の破片である。破片であるため法量は不明であるが、厚さ2.1cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施し、凹面が布目圧痕と模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。62は、木製品の桶である。大き

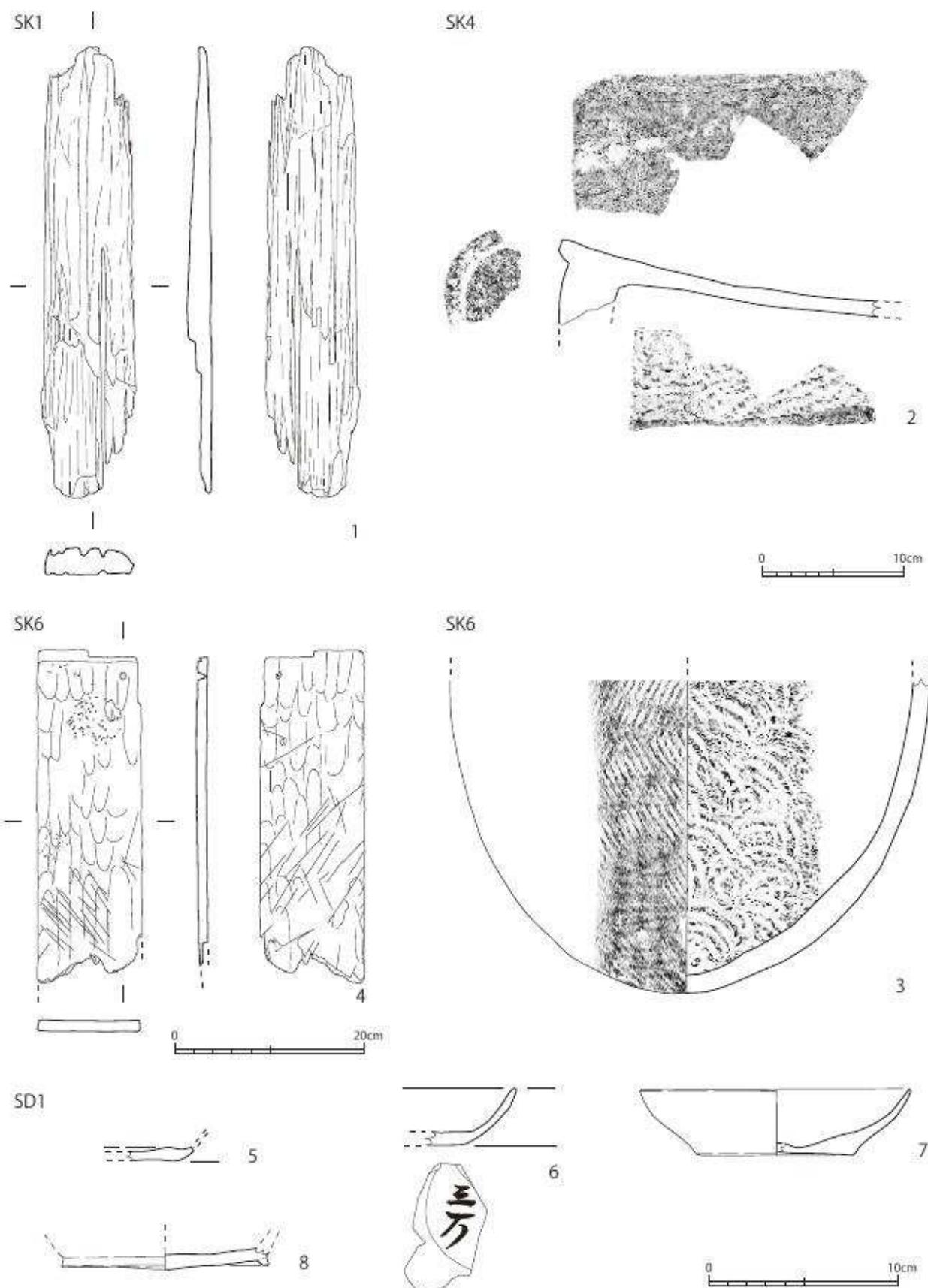


第12図 P1～P10 実測図1 (1:30)

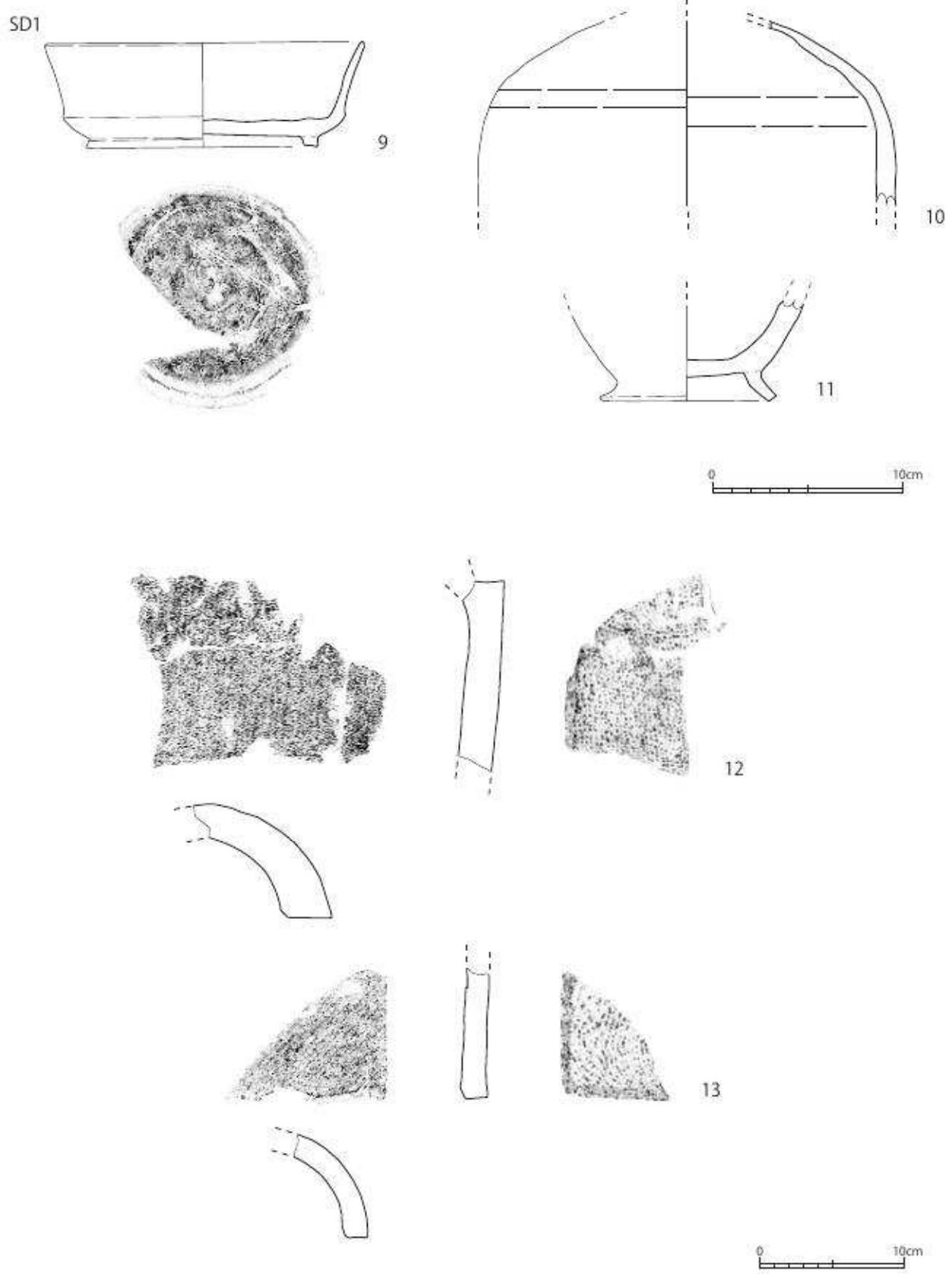
さは長さ12.1cm、残存幅8.8cm、厚さ0.5cmである。用途は桶底が想定できる。

#### 遺構に伴わない遺物（第23・24図、図版23・24・25）

63は、輸入陶磁器の白磁の破片である。体部以上を欠失する。大きさは残存器高0.9cm、底径6.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が施釉で、内面が回転ケズリ技法ののち施釉を施す。色調は内外面ともに灰白色を呈する。13世紀代が想定できる。64は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.1cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面がナデで、凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。65は、木製品の木杭である。大きさは残存長28.2cm、幅3.0cm、厚さ3.0cmである。先端部は欠いている。用途は不明である。66は、木製品の木杭である。大きさは残存長39.7cm、幅5.6cm、厚さ3.8cmである。先端部に加工がみられる。用途は不明である。67は、板状木製品である。大きさは残存長18.6cm、幅3.6cm、厚さ1.1cmである。用途は不明である。68は、木製品の板材である。大きさは長さ54.8cm、幅15.2cm、厚さ1.8cmである。用途は不明である。

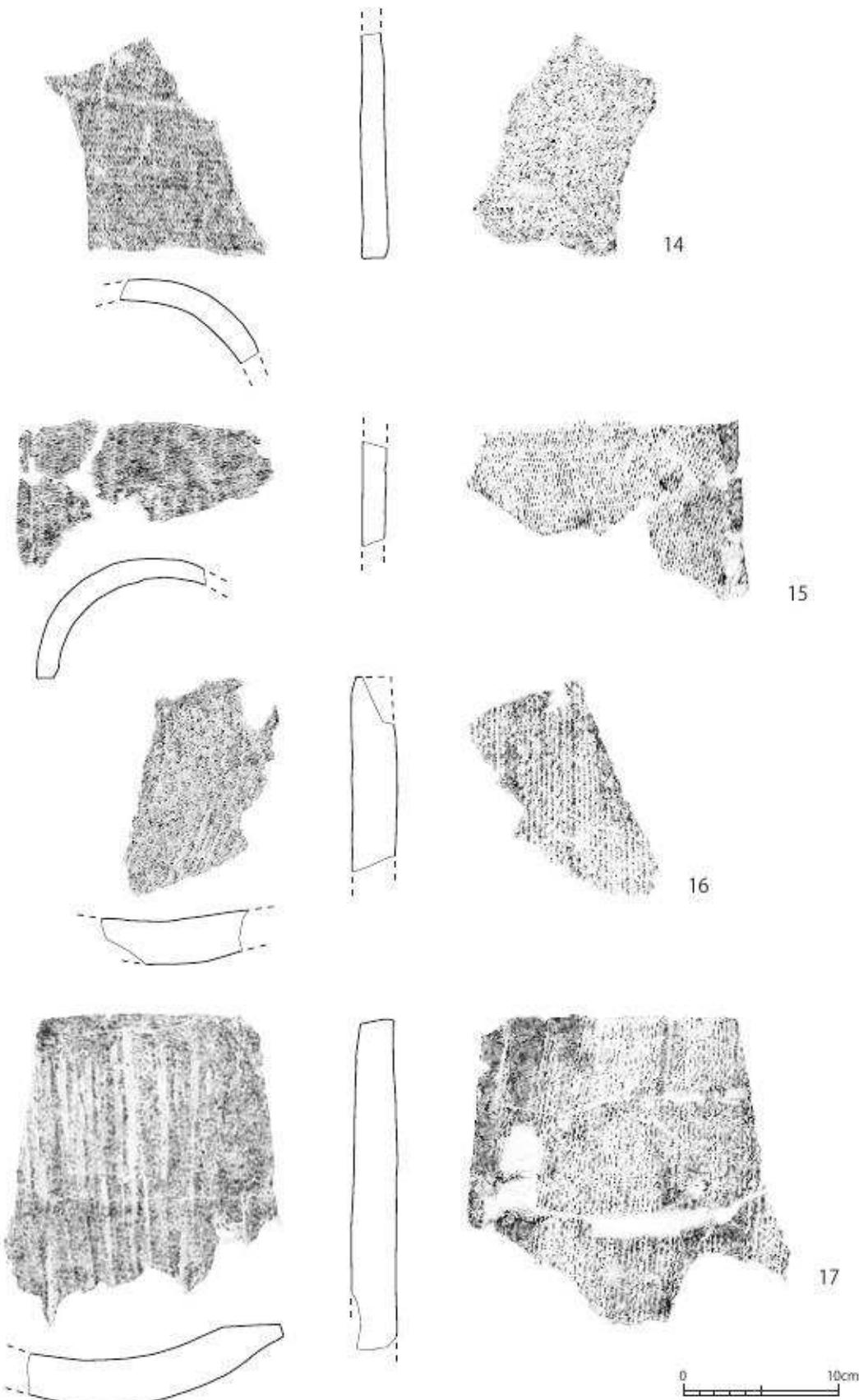


第13図 出土遺物実測図1 (1・4-1:6, 2-1:4, 3・5~8-1:3)



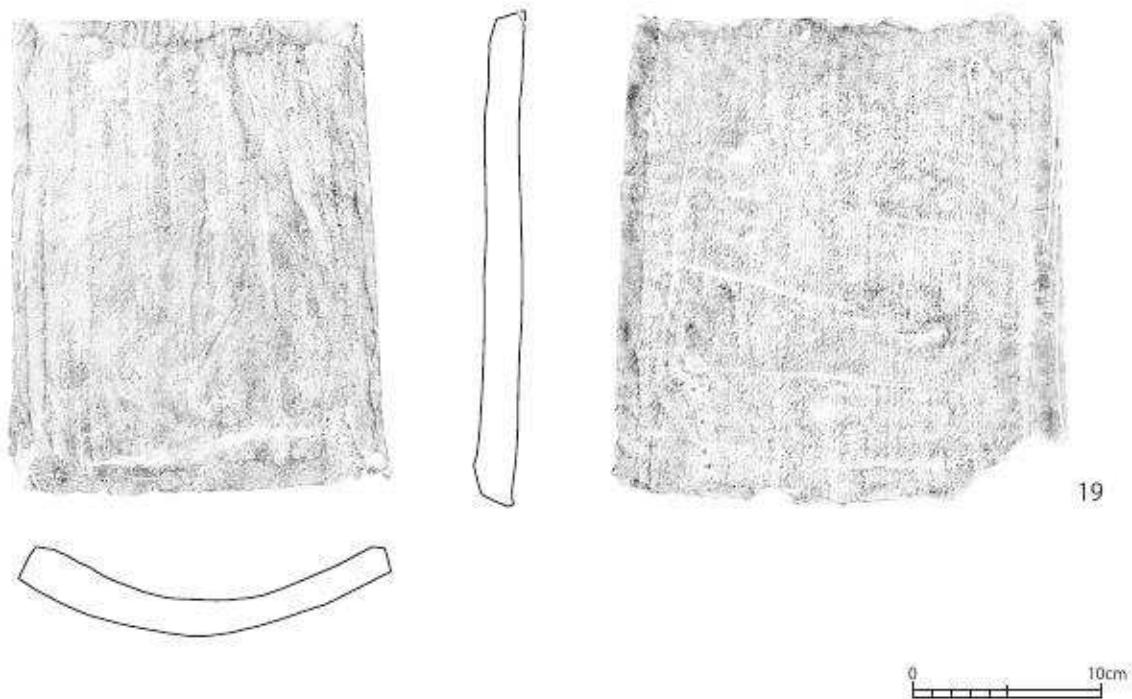
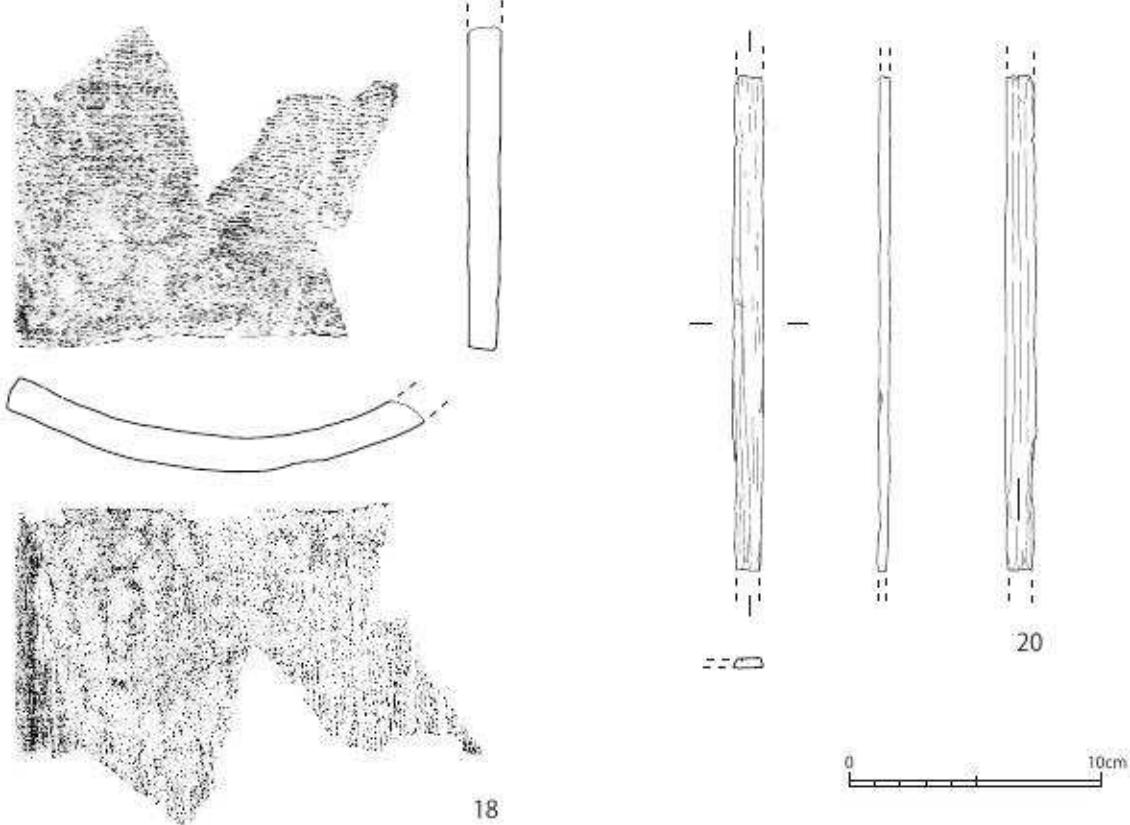
第14図 出土遺物実測図2 (9~11-1:3, 12・13-1:4)

SD1

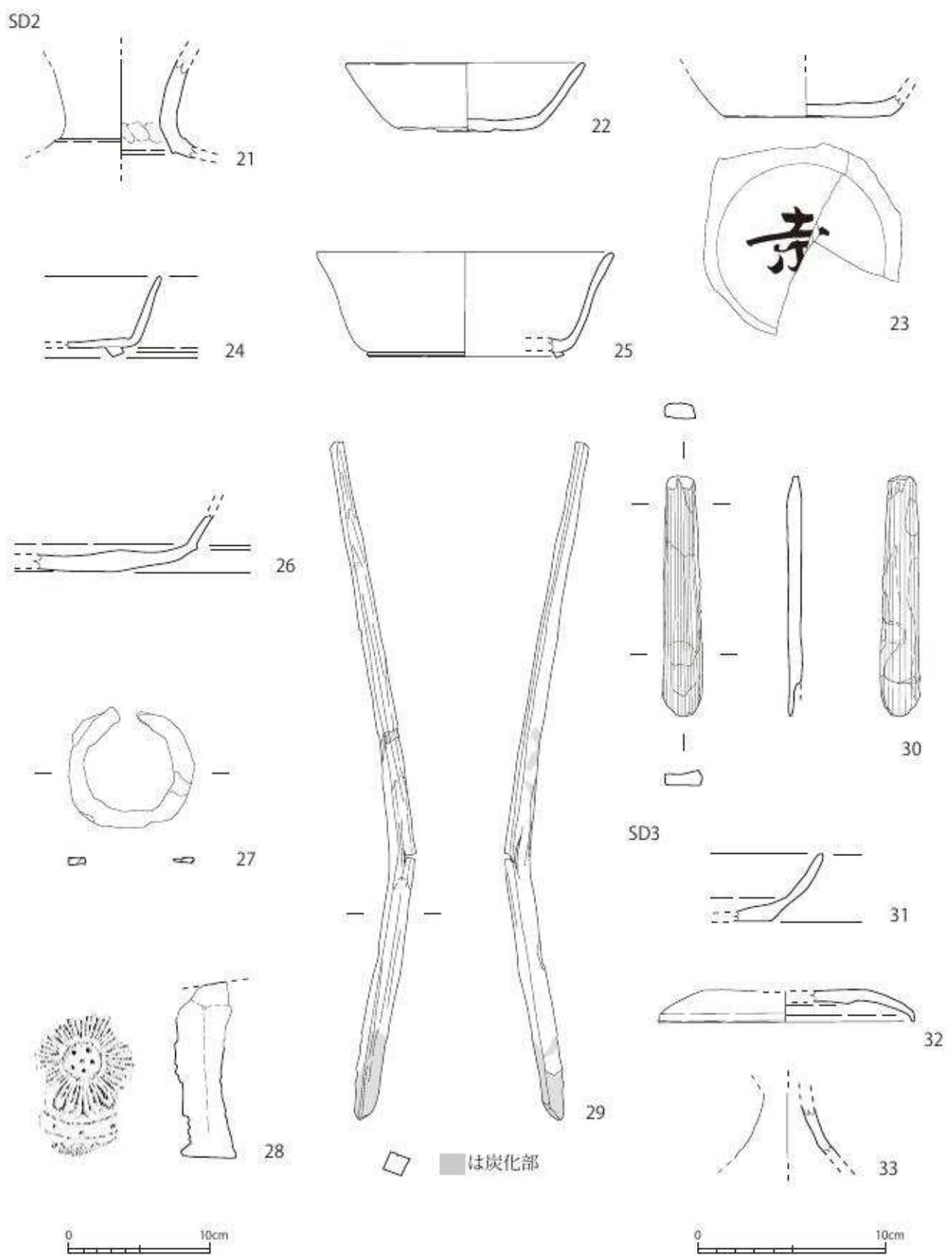


第15図 出土遺物実測図3 (1:4)

SD1

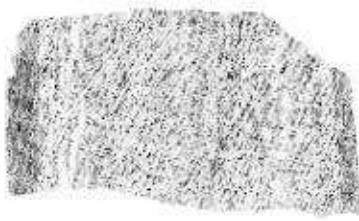
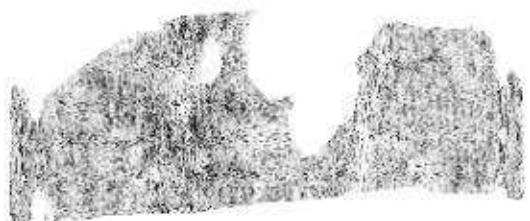


第16図 出土遺物実測図 4 (18・19 - 1:4, 20 - 1:3)

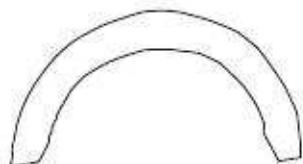


第17図 出土遺物実測図5 (21~27・29~33-1:3, 28-1:4)

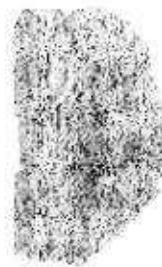
SD3



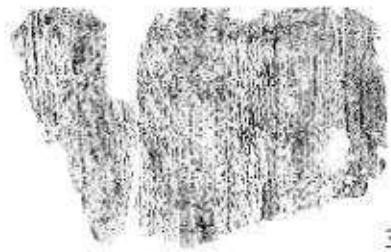
34



35



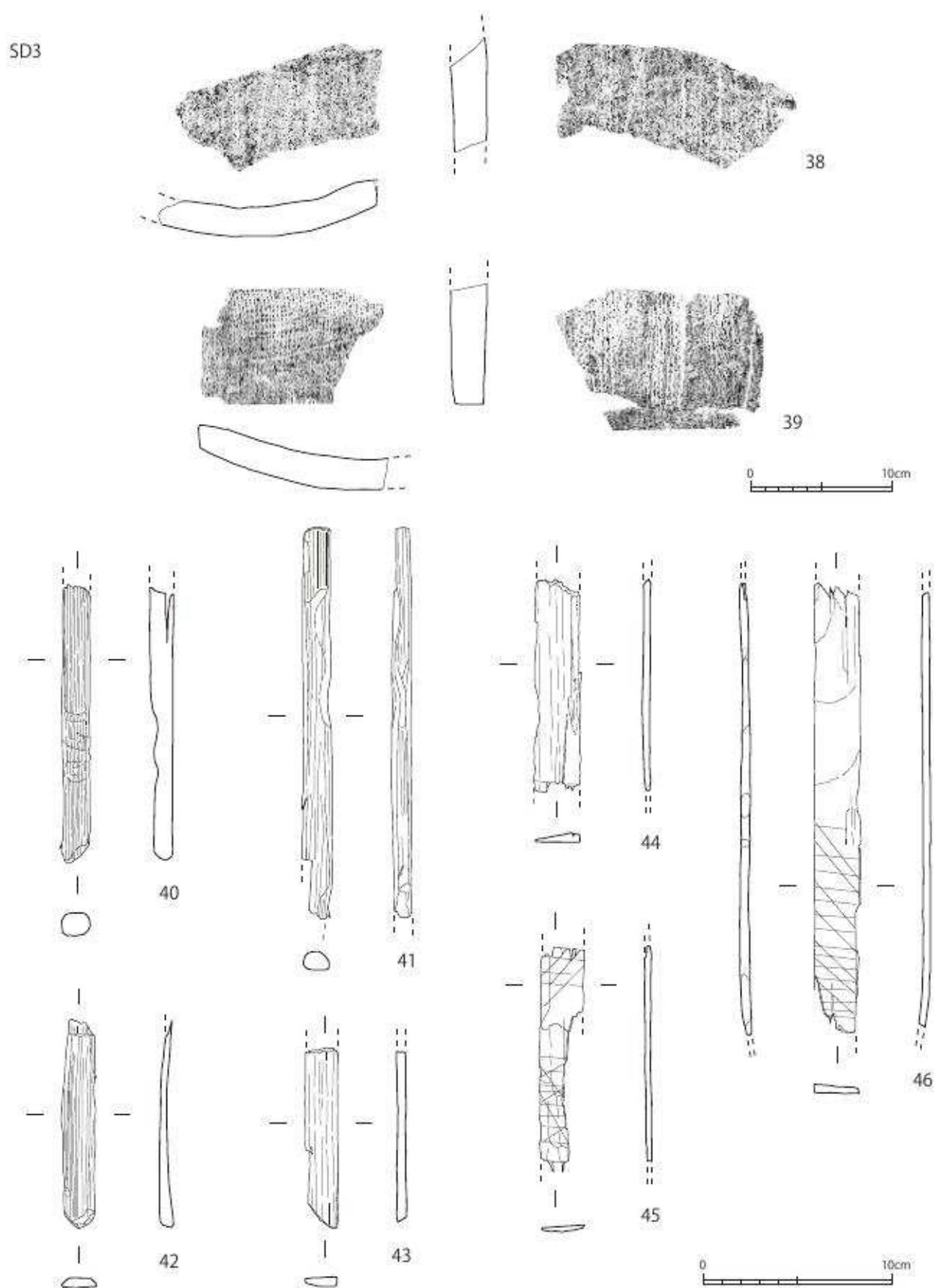
36



37

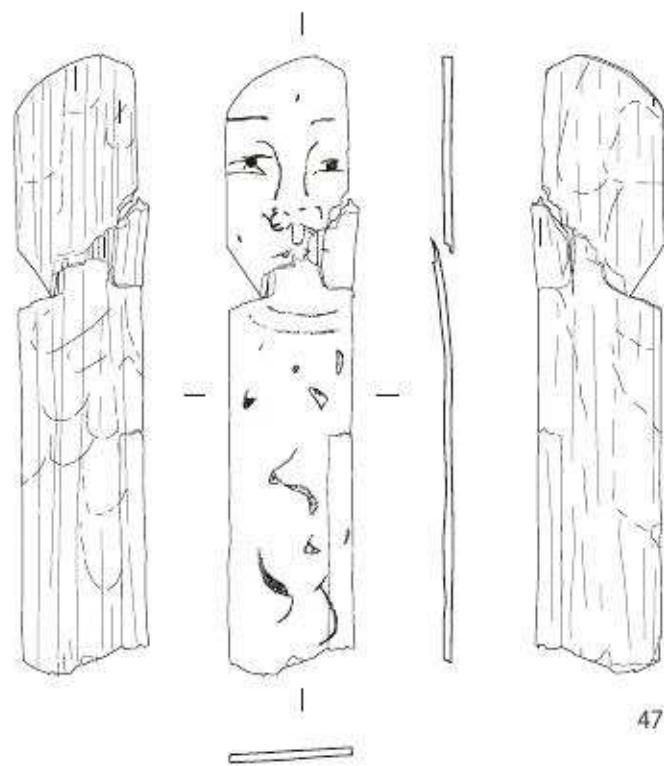


第18図 出土遺物実測図6 (1:4)

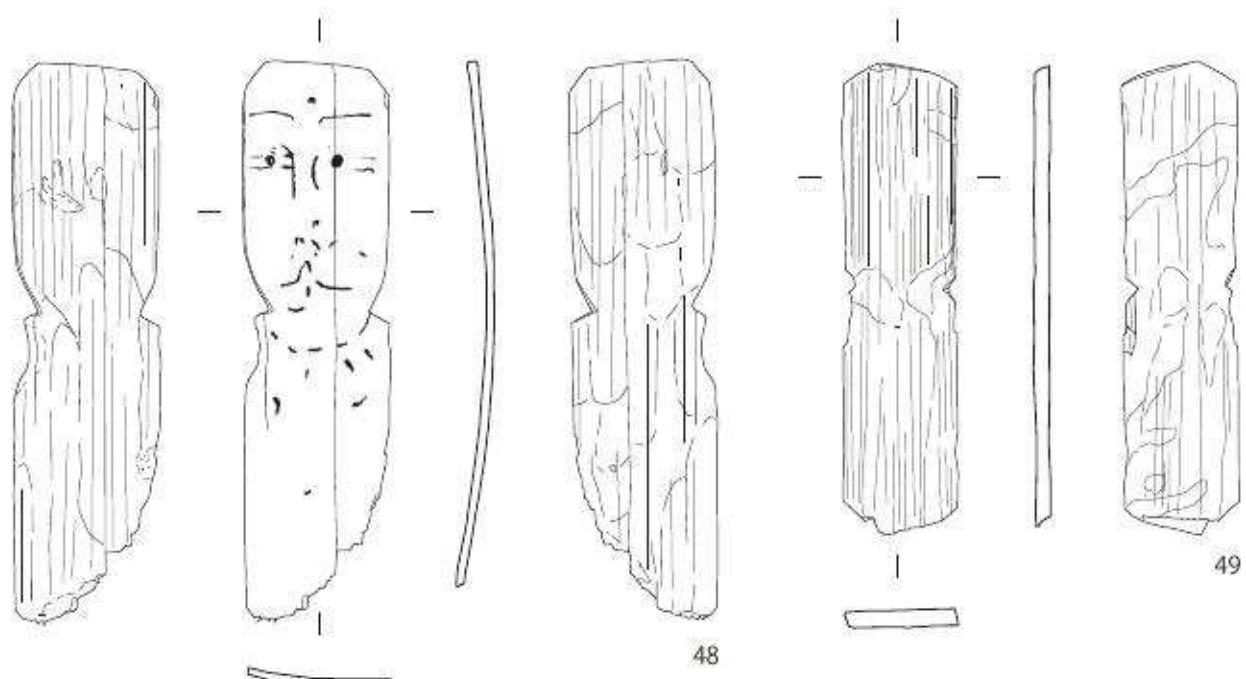


第19図 出土遺物実測図7 (38・39 - 1:4, 40~46 - 1:3)

SD3

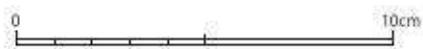


47



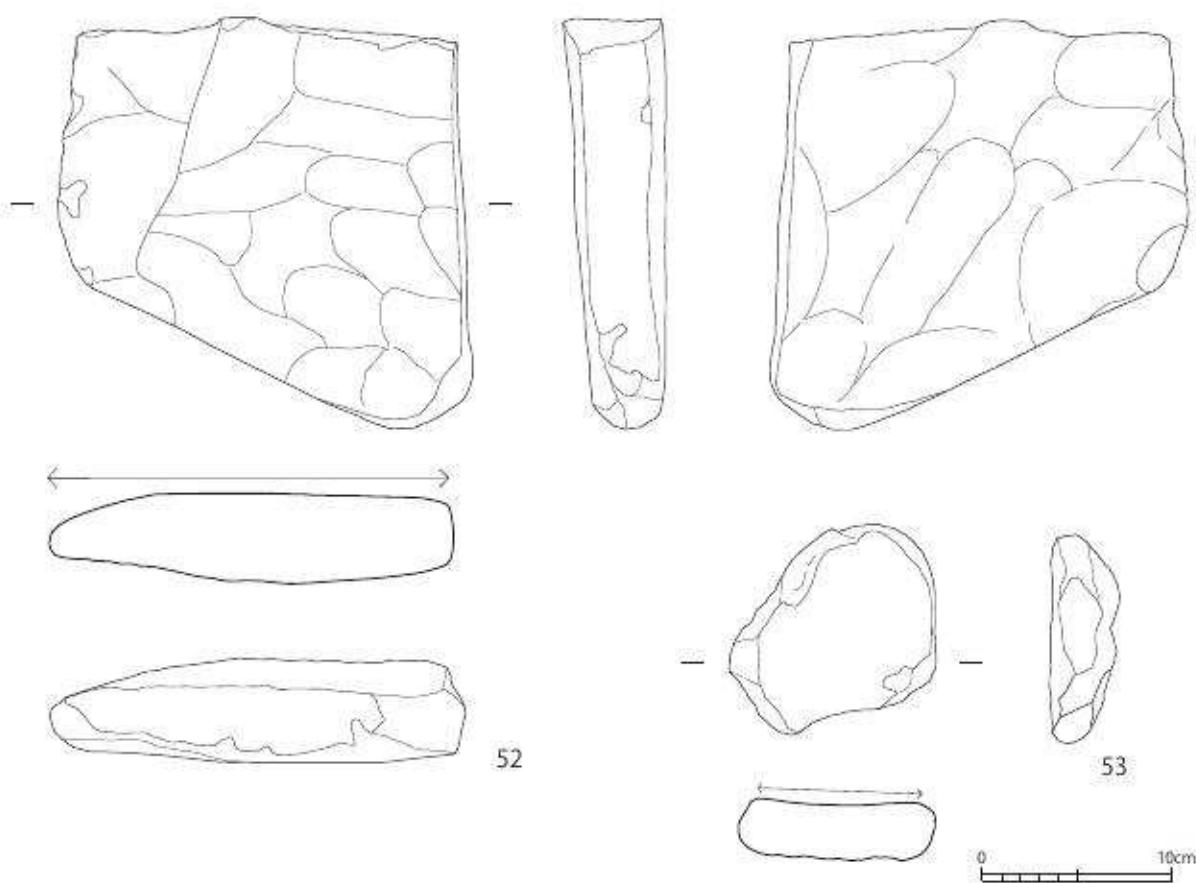
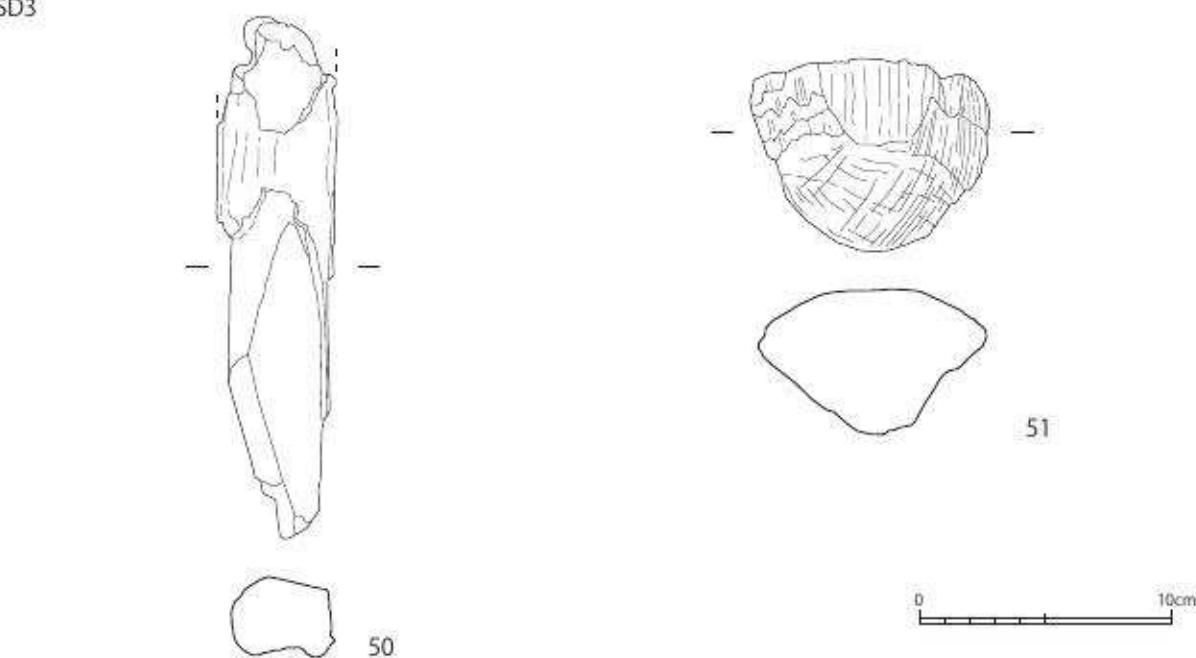
48

49

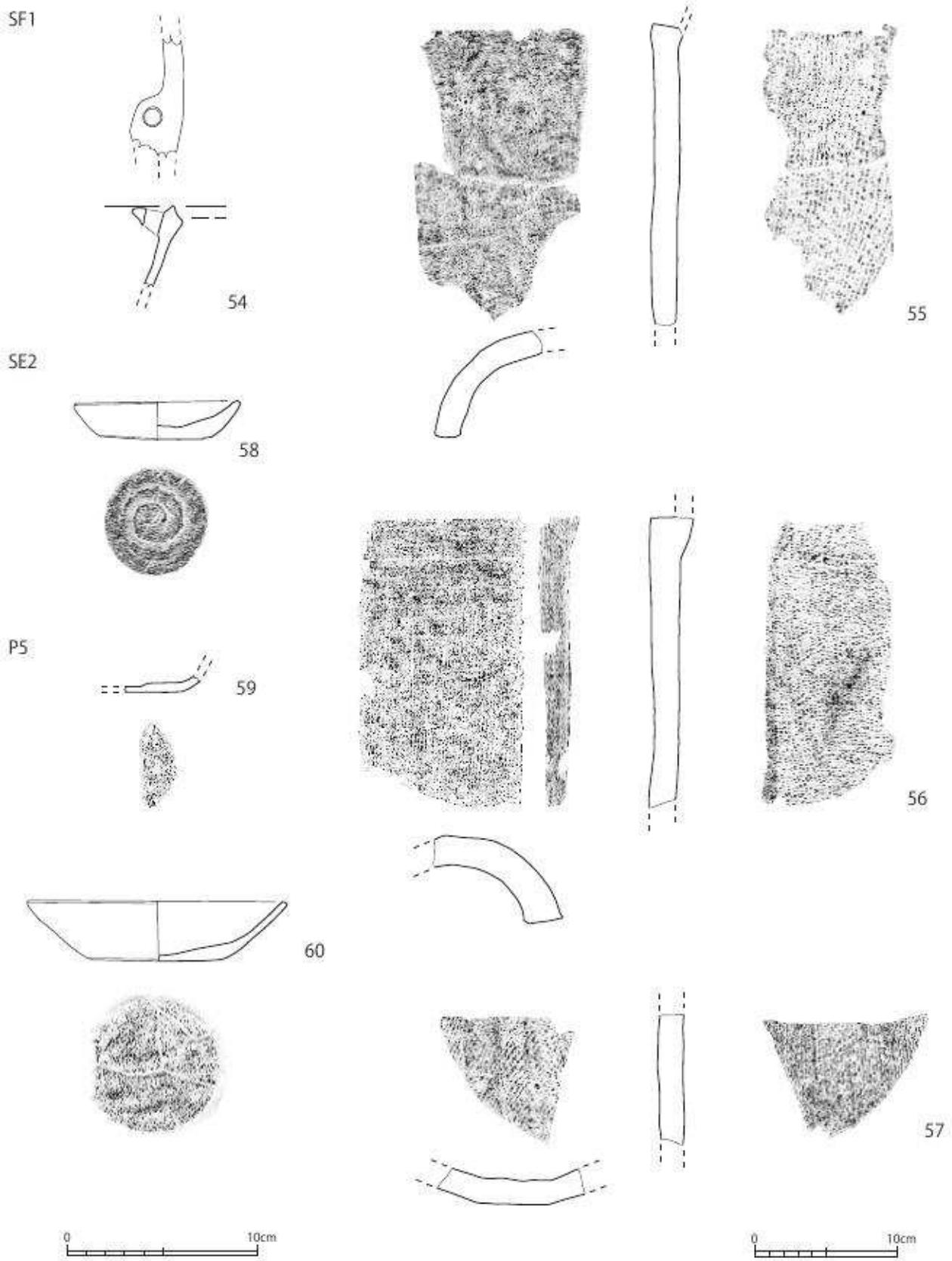


第20図 出土遺物実測図8 (1:2)

SD3

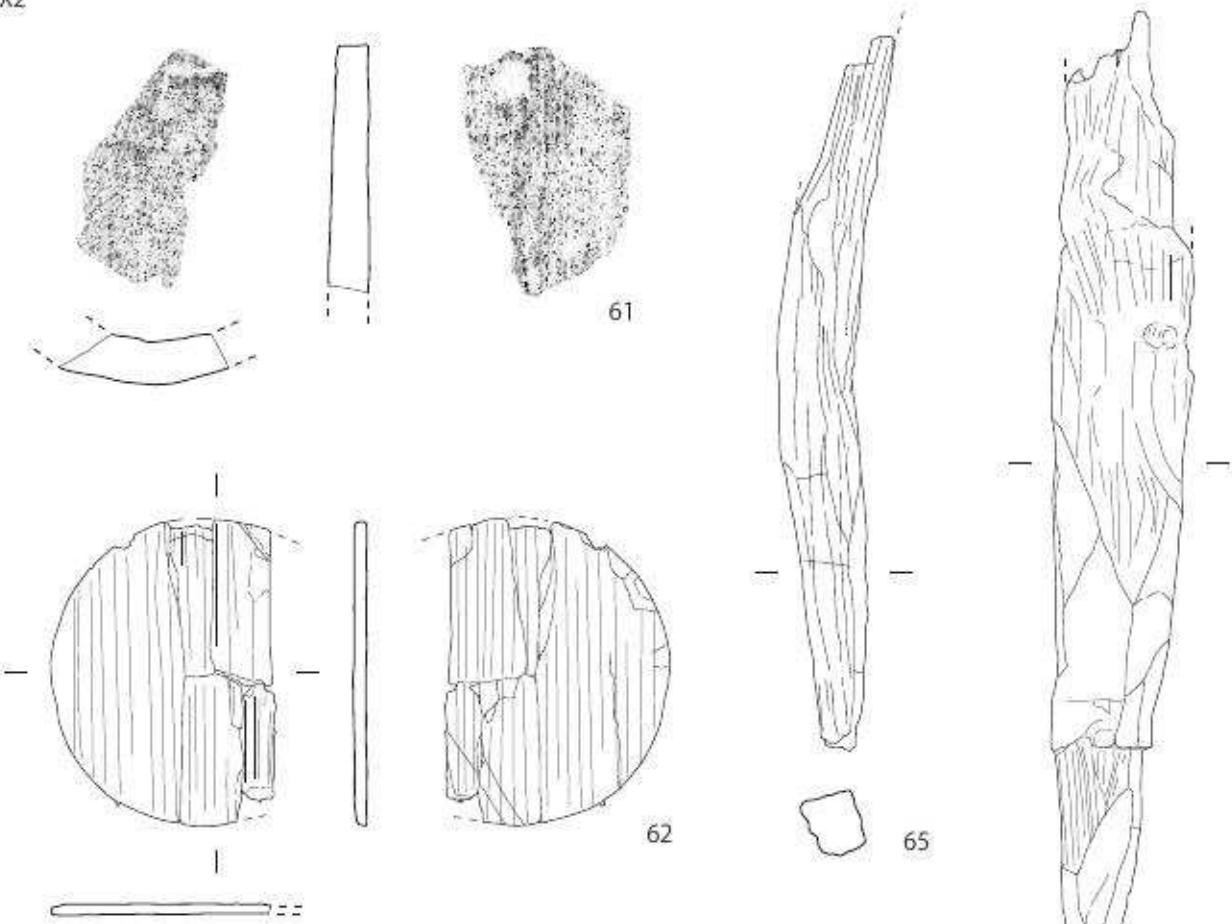


第21図 出土遺物実測図9 (50・51 - 1:3, 52・53 - 1:4)

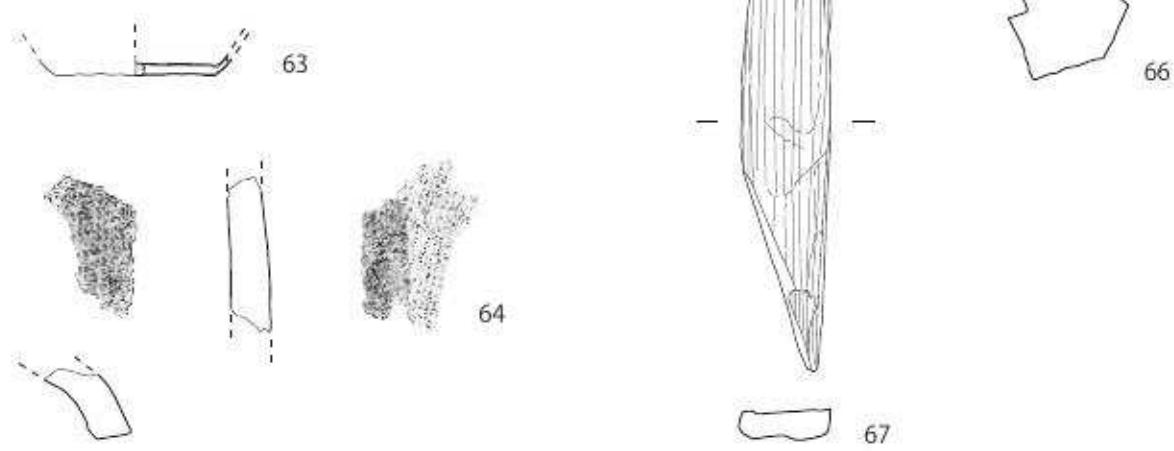


第22図 出土遺物実測図 10 (54・58～60 - 1:3, 55～57 - 1:4)

SX2



包含層

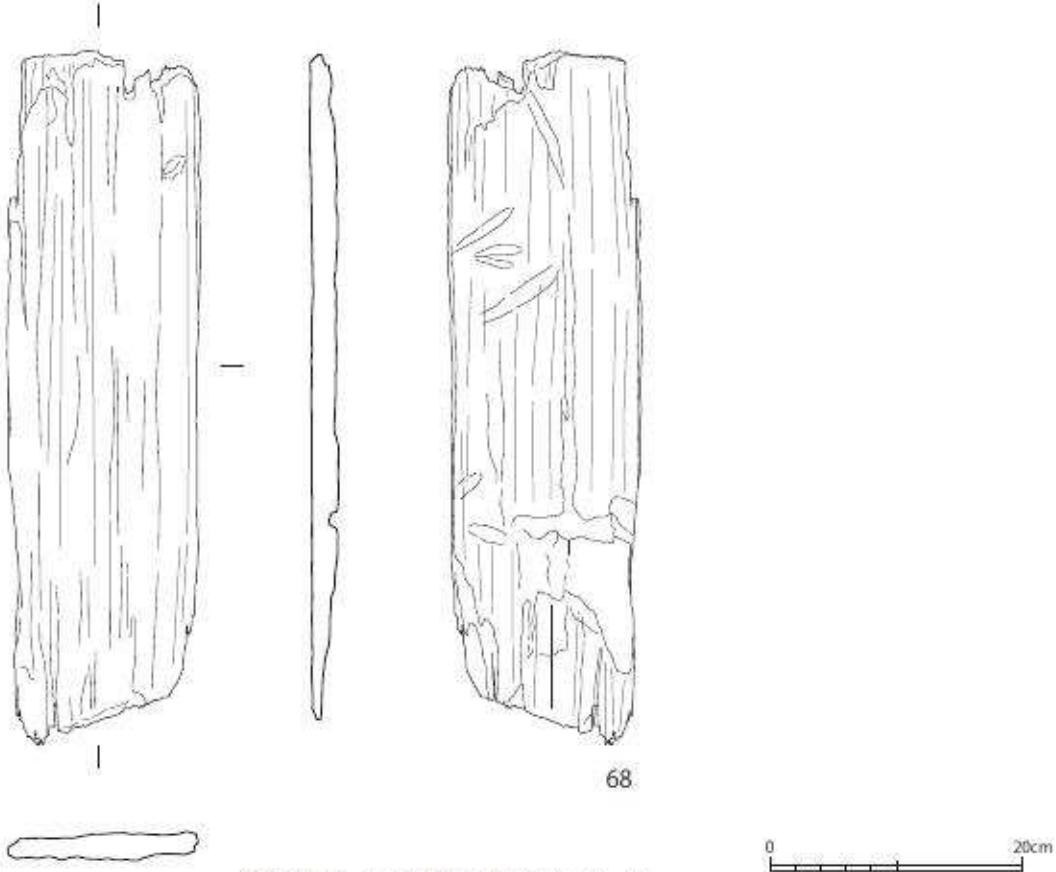


0 10cm

0 10cm

第23図 出土遺物実測図11 (61・64 - 1:4, 62・63・65~67 - 1:3)

包含層



第24図 出土遺物実測図 12 (1:6)

第1表 聾門遺跡遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器形	法量 (cm) ( )は復元値	焼成	貼土	色調	調整	備考
1	SK1	木製品	板材	全長: 47.6 幅: 9.8 厚さ: 2.4	—	—	—	—	
2	SK4	軒丸瓦	—	厚さ: 2.5	良	密	灰	凸面: 繩目タタキ 汪痕後ケズリ 凹面: 布目	素文 SE2 出土遺物と接合
3	SK6	須恵器	甕	口径: — 器高: (16.3) 底径: 0.2	良	密	外面: 灰 内面: 灰白	外面: 平行テラ牛目 内面: 内輪タタキ目 底径: ナヂ	
4	SK6	木製品	板状 木製品	残存長: 35.3 幅: 11.0 厚さ: 1.1	—	—	—	—	縄の底板
5	SD1	須恵器	杯	口径: — 器高: — 底径: —	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り	
6	SD1	須恵器	杯	口径: — 器高: 3.0 底径: —	良	密	外面: 灰白 内面: 灰白	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り	墨書「三万」 SD3 出土遺物と接合
7	SD1	須恵器	杯	口径: (14.2) 器高: 3.5 底径: (8.2)	良	密	外面: 灰白 内面: 灰白	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り後ナデ消し	
8	SD1	須恵器	杯	口径: — 器高: — 底径: 11.0	不真	密	外面: 灰白 内面: 灰白	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り	貼付高台 SD2・SD3・包含層出土 遺物と接合
9	SD1	須恵器	杯	口径: (16.4) 器高: 5.4 底径: 12.0	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り。洗線 1 条	貼付高台 SD3・P5 出土遺物と接合
10	SD1	須恵器	甕	口径: — 器高: — 底径: —	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ケズリ。回転ナデ、自然釉 内面: 回転ナデ	

遺物番号	出土地点	種別	器形	法量(cm) ( )は復元値	焼成	胎土	色調	調整	備考
11	SD1	須恵器	壺	口径: - 器高: - 底径: 9.0	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	貼付高台 SX2 出土遺物と接合
12	SD1	丸瓦	-	厚さ: 25	良	密	灰	凸面: 縄目タタキ圧痕ナデ消し。ケズリ 凹面: 布目	SX2 出土遺物と接合
13	SD1	丸瓦	-	厚さ: 17	良	密	灰白	凸面: ケズリ、ナデ消し 凹面: 布目、ケズリ	
14	SD1	丸瓦	-	厚さ: 15	良	密	灰白	凸面: 縄目タタキ圧痕ナデ消し。ケズリ 凹面: 布目	
15	SD1	丸瓦	-	厚さ: 15 やや不良	良	密	灰白	凸面: 縄目タタキ圧痕ナデ消し。ケズリ 凹面: 布目、ケズリ	SX3・SX2 出土遺物と接合
16	SD1	平瓦	-	厚さ: 29	良	密	凸面: 灰白 凹面: 灰	凸面: 縄目タタキ圧痕 凹面: 布目、ケズリ	
17	SD1	平瓦	-	厚さ: 29	良	密	灰	凸面: 縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面: ケズリ、布目、模骨痕ケズリ消し	SX2 出土遺物と接合
18	SD1	平瓦	-	厚さ: 19	良	密	凸面: 灰 凹面: 灰白	凸面: 縄目タタキ圧痕、ケズリ、指頭圧痕 凹面: 布目、ケズリ	SX3 出土遺物と接合
19	SD1	平瓦	-	全長: 35.0 広邊幅: 残存 24.3 狭邊幅: 26.2 厚さ: 2.0 - 3.0	良	密	灰白	凸面: 縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面: ケズリ、布目、模骨痕ナデ消し	
20	SD1	木製品	板材	残存長: 19.7 残存幅: 1.2 厚さ: 0.4	-	-	-	-	
21	SD2	須恵器	壺	口径: - 器高: - 底径: -	良	密	外面: 灰 内面: 灰白	外面: 回転ナデ、凸線1条、自然釉 内面: 回転ナデ、指頭圧痕	
22	SD2	須恵器	高杯	口径: (12.5) 器高: 3.7 底径: 7.4	良	密	外面: 青灰 内面: 青灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ、指頭圧痕	脚部貼付痕あり SD3 出土遺物と接合
23	SD2	須恵器	杯	口径: - 残存高: 2.8 底径: 9.0	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り後ナデ消し	墨書「寺」
24	SD2	須恵器	杯	口径: - 器高: 4.3 底径: -	良	密	外面: 灰 内面: 灰白	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	貼付高台 SD3 出土遺物と接合
25	SD2	須恵器	杯	口径: (15.8) 器高: 5.5 底径: (10.4)	良	密	外面: 薄い灰 内面: 薄い灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	貼付高台
26	SD2	瓦質土器	皿	口径: - 器高: - 底径: -	良	密	外面: 灰 内面: 灰	外面: 回転ナデ、凸線1条、自然釉 内面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り	SD3・包含層出土遺物と接合
27	SD2	金属製品	轆	径: 6.5 幅: 6.2 厚さ: 0.4 重量: 15.35g	-	-	-	-	
28	SD2	軒丸瓦	-	直徑: 12.2 内区径: - 中房径: 2.9	良	密	薄い灰	瓦当面: 極井基草文(8葉)、櫻線2条、 線端葉文、ナデ 凹面: ケズリ	接合痕。D1 A型式
29	SD2	木製品	棒状 木製品	全長: 36.0 幅: 1.1 厚さ: 1.0	-	-	-	-	炭化部分あり
30	SD2	木製品	板状 木製品	残存長: 12.9 幅: 2.1 厚さ: 0.8	-	-	-	-	
31	SD3	土師質 土器	杯	口径: - 器高: 3.5 底径: -	やや 不良	密	外面: 黑 内面: 暗褐色	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	被熱によるススの付着 か
32	SD3	須恵器	杯蓋	口径: (13.6) 器高: - 底径: -	良	密	外面: 灰 内面: オリーブ	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	SF1 出土遺物と接合
33	SD3	須恵器	高杯	口径: - 器高: - 底径: -	不良	密	外面: 灰白 内面: 灰白	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	
34	SD3	丸瓦	-	厚さ: 20	良	密	凸面: 灰、灰白 凹面: 灰	凸面: 縄目タタキ圧痕ナデ消し 凹面: 条切井後布目、ケズリ	
35	SD3	丸瓦	-	厚さ: 12	良	密	灰白	凸面: ナデ 凹面: 布目、ケズリ	
36	SD3	平瓦	-	厚さ: 15	良	密	凸面: 灰白 凹面: 灰	凸面: 縄目タタキ圧痕ナデ消し。ケズリ 凹面: 模骨痕、布目、ケズリ	縦巻き作り
37	SD3	平瓦	-	厚さ: 25	良	密	凸面: 灰白 凹面: 灰	凸面: 縄目タタキ圧痕、指頭圧痕 凹面: 条切井後布目、ケズリ	一枚作り 包含層出土遺物と接合
38	SD3	平瓦	-	厚さ: 25	良	密	黑	凸面: 縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面: 布目、模骨痕、ケズリ	
39	SD3	平瓦	-	厚さ: 25	良	密	灰白	凸面: 縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面: 布目、ケズリ	
40	SD3	木製品	棒状 木製品	残存長: 14.8 幅: 1.5 厚さ: 1.2	-	-	-	-	
41	SD3	木製品	棒状 木製品	残存長: 20.7 幅: 1.5 厚さ: 1.0	-	-	-	-	

遺物番号	出土地点	種別	器形	法量(cm) ( ) は復元値	焼成	胎土	色調	調整	備考
42	SD3	木製品	板状 木製品	残存長:11.0 幅:1.8 厚さ:0.3~0.7	—	—	—	—	
43	SD3	木製品	板状 木製品	残存長:9.6 幅:1.7 厚さ:0.5	—	—	—	—	
44	SD3	木製品	板状 木製品	残存長:11.2 幅:2.4 厚さ:0.5	—	—	—	—	刻み痕 墨付着
45	SD3	木製品	板状 木製品	残存長:11.4 幅:2.2 厚さ:0.3	—	—	—	—	
46	SD3	木製品	板状 木製品	残存長:24.0 幅:2.4 厚さ:0.5	—	—	—	—	縦・斜めに刻み目
47	SD3	木製品	人形	全長:16.4 残存幅:3.3 厚さ:0.2	—	—	—	—	
48	SD3	木製品	人形	全長:14.8 幅:3.8 厚さ:0.2	—	—	—	—	
49	SD3	木製品	木箇か	全長:12.5 幅:3.0 厚さ:0.5	—	—	—	—	文字等観察できず
50	SD3	木製品	木机	残存長:20.8 幅:4.7 厚さ:3.5	—	—	—	—	
51	SD3	木製品	柱材か	残存長:6.7 残存幅:9.3 残存厚:5.6	—	—	—	—	炭化部分あり
52	SD3	石製品	台石	全長:21.4 幅:20.7 厚さ:4.7 重量:37kg	—	—	—	—	花崗岩
53	SD3	石製品	磨石	全長:10.8 幅:9.8 厚さ:2.9 重量:0.5kg	—	—	—	—	二面にすり痕 花崗岩
54	SF1	土師質 土器	鍋	口径:— 器高:— 底径:—	良	密	外面:橙 内面:橙	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	内側に2つ孔
55	SF1	丸瓦	—	厚さ:1.8	良	密	灰白	凸面:繩目タタキ圧痕ナデけし。ケズリ 凹面:布目	
56	SF1	丸瓦	—	厚さ:2.3	良	密	灰	凸面:繩目タタキ圧痕ナデけし。ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
57	SF1	平瓦	—	厚さ:1.8	良	密	灰	凸面:繩目タタキ圧痕 凹面:布目、横骨痕	
58	SE2	土師質 土器	皿	口径:8.4 器高:2.0 底径:5.5	良	密	外面:浅黄橙 内面:浅黄橙	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:へラ切り	
59	P5	土師質 土器	皿	口径:— 残存高:0.9 底径:—	やや 不良	密	外面:にぶい橙 内面:にぶい橙	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	
60	P5	土師質 土器	秤	口径:(13.4) 器高:3.1 底径:8.0	やや 不良	密	外面:にぶい橙 内面:にぶい橙	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底部:回転糸切り	
61	SX2	瓦	平瓦	厚さ:2.1	良	密	灰白	凸面:繩目タタキ圧痕 凹面:布目、横骨痕	
62	SX2	木製品	桶底か	全長:12.1 残存幅:8.8 厚さ:0.5	—	—	—	—	
63	包含層	白磁	皿	口径:— 残存高:0.9 底径:(6.4)	良	密	外面:灰白 内面:灰白	外面:施袖 内面:回転ケズリ後施袖	13世紀
64	包含層	丸瓦	—	厚さ:2.1	良	密	灰	凸面:ナデ 凹面:布目、ケズリ	
65	包含層	木製品	木机	残存長:28.2 幅:3.0 厚さ:3.0	—	—	—	—	
66	包含層	木製品	木机	残存長:39.7 幅:5.6 厚さ:3.8	—	—	—	—	
67	包含層	木製品	板状 木製品	残存長:18.6 幅:3.6 厚さ:1.1	—	—	—	—	
68	包含層	木製品	板材	全長:54.8 幅:15.2 厚さ:1.8	—	—	—	—	

## 2. 安芸国分寺周辺遺跡の遺構と遺物

本遺跡では、溝状遺構1条、良好な遺物包含層を検出した。遺物は、須恵器、土師質土器、古代瓦、金属製品などが出土地した。

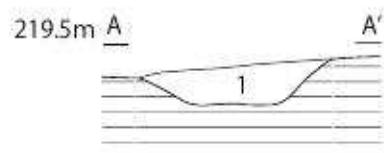
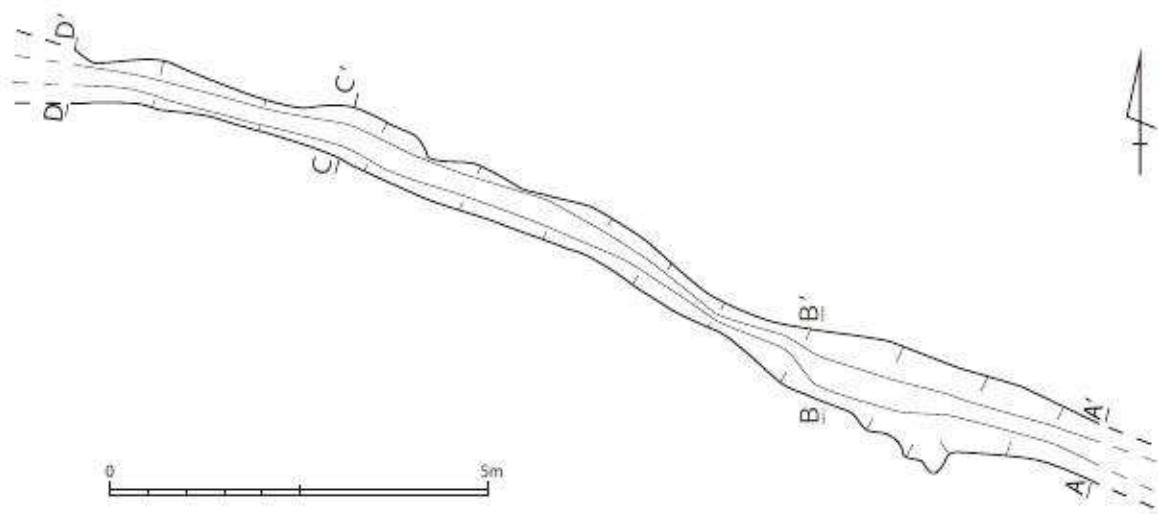
以下、発掘調査で検出した遺構と、それに伴う遺物について詳述する。

### SD1 (第4・25図、図版26・27)

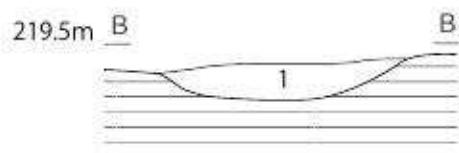
SD1は、調査区中央付近より北側に位置する溝状遺構である。西から東に向かって流れおり、東側と西側は調査区外に続いている。壁面の立ち上がりは上方に向かって緩やかに斜行し、形状は逆台形を呈する。規模は残存長約14.40m、幅は西側と中央付近で約0.60m、東側で0.90m、深さ約0.15mである。埋土は、暗灰黄色土から灰黄褐色土までの堆積がみられる。当初は史跡安芸国分寺跡の南限の溝を想定していたが、流れが南側の軸に合わないことなど規格性が無いことで、西側から東側に流れる自然流路と判断した。遺物は須恵器、古代瓦などが出土地している。

### 出土遺物 (第26・27図、図版28~30)

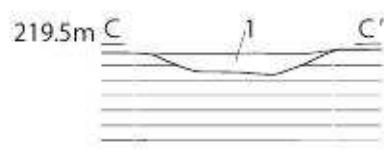
1は、須恵器の杯蓋の破片である。破片のため、法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。2は、須恵器の杯である。大きさは口径12.6cm、器高4.0cm、底径7.8cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部はヘラ切り技法を施す。色調は内外面ともに灰白色を呈する。3は、須恵器の円面鏡である。大きさは口径22.8cm、器高6.7cm、底径26.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が回転ナデ、貼付凸帯に竹管文を施す。内面は回転ナデを施す。また透かしが推定で5箇所開けられていたものと考えられる。色調は内外面ともに灰色を呈する。4は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面がナデのちケズリで、凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸面がにぶい黄橙色で、凹面は橙色を呈する。5は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施し、凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに浅黄橙色である。6は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリで、凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。7は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は、凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施すが、模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。8は、平瓦の破片である。破片のため法量が不明であるが、厚さ3.0cmである。焼成は不良で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施す。凹面は不明である。色調は凸凹面ともに浅黄橙色を呈する。9は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕を施し、凹面は布目圧痕をナデ消す。色調は凸



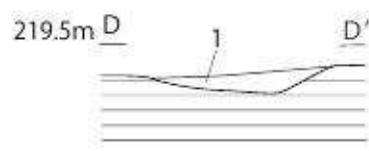
1.暗灰黄色土(2.5 Y 4/2)



1.灰黄褐色土(10 Y R 4/2)



1.灰黄褐色土(10 Y R 4/2)炭化物を含む



1.暗灰黄色土(2.5 Y 4/2)



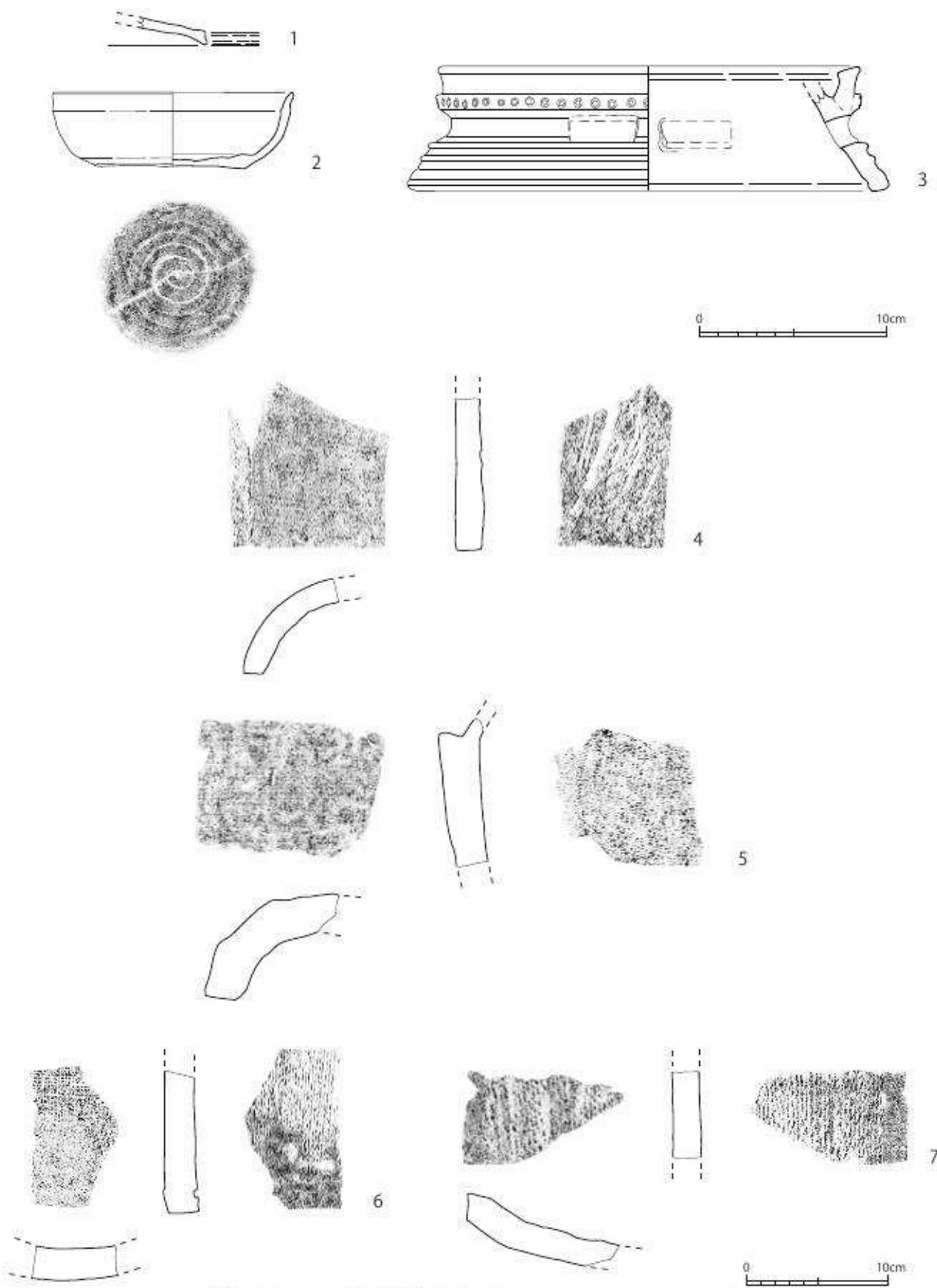
第25図 SD1 実測図 (遺構図 1:100 断面図 1:30)

面が灰色で、凹面は灰白色を呈する。10は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.8cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕ののちケズリを施す。凹面は布目圧痕ののちケズリを施すが、模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色である。11は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.8cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕ののちケズリで、凹面は布目圧痕ののちケズリを施す。色調は凸面が青灰色で、凹面は浅黄橙色を呈する。

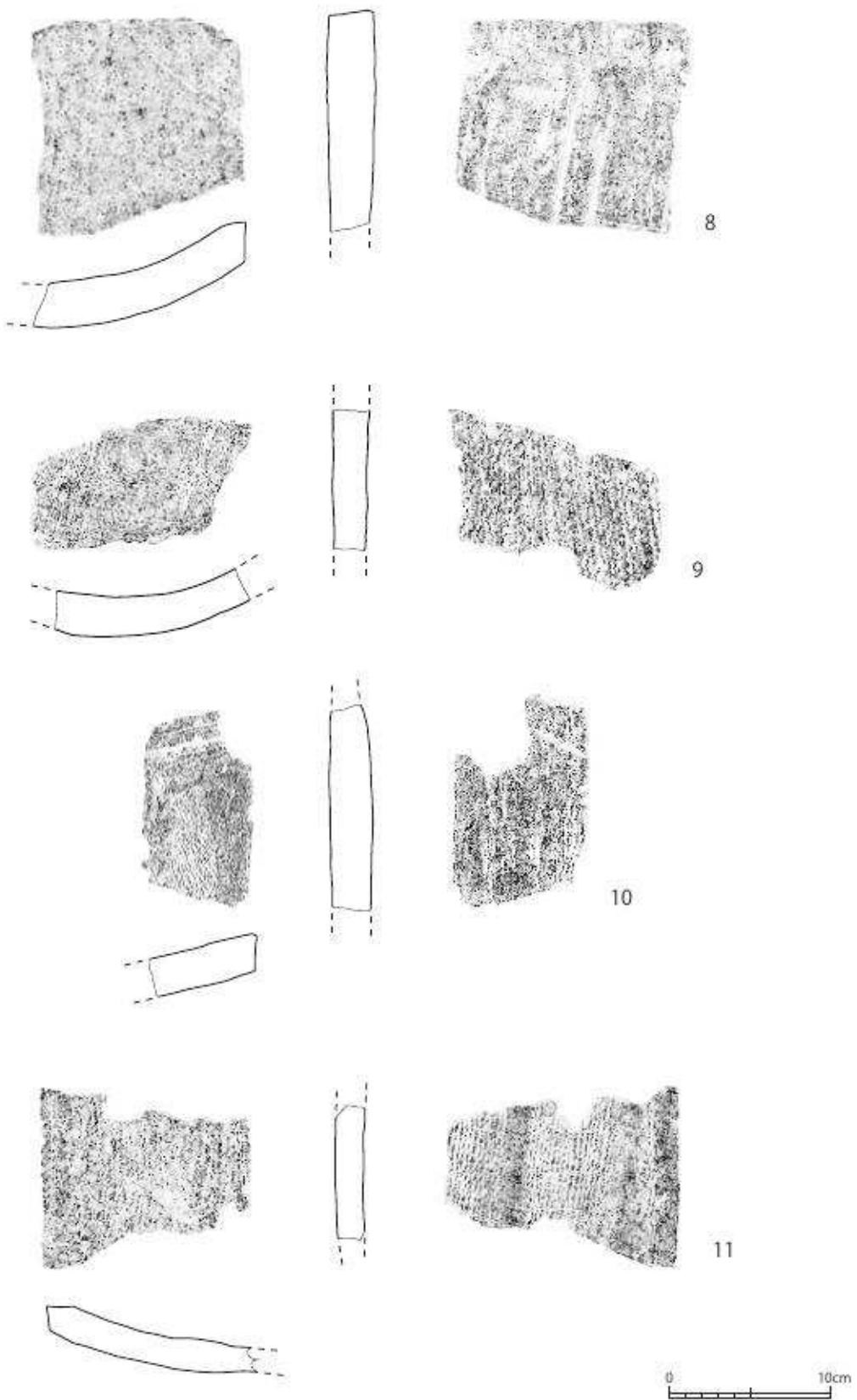
#### 遺構に伴わない遺物（第28～30図、図版31～33）

12は、須恵器の壺である。大きさは残存高5.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに青灰色を呈する。13は、須恵器の杯である。体部以上を欠失する。破片のため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。14は、須恵器の杯である。大きさは器高5.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰色を呈する。15は、須恵器の杯の破片である。大きさは残存器高1.7cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰色を呈する。16は、須恵器の杯の破片である。大きさは残存器高1.3cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰色を呈する。17は、須恵器の杯の破片である。大きさは残存器高1.8cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに明青灰色を呈する。18は、須恵器の杯の破片である。大きさは残存器高2.2cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰白色を呈する。19は、須恵器の杯の破片である。大きさは残存器高1.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部に高台を貼り付けている。色調は内外面ともに灰色を呈する。20は、須恵器円面硯の脚部である。大きさは脚部径が2.7cm～3.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面が手びねりを施す。獸脚付円面硯の可能性がある。色調は内外面ともに明青灰色を呈する。21は、土師質土器の托の破片である。大きさは残存高1.8cm、底径3.4cmである。焼成は不良で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。22は、土師質土器の鍋の破片である。破片のため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は外面がナデで、口縁部に1条の沈線を施し、被熱痕がみられる。内面は回転ナデを施す。色調は外面が黒褐色で、内面はにぶい黄橙色を呈する。23は、土師質土器の鍋の破片である。破片であるため法量は不明である。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに黒色である。24は、土師質土器の皿の破片である。大きさは器高1.3cmである。焼成は良好で、胎土は密である。色調は内外面ともに褐色を呈する。調整は内外

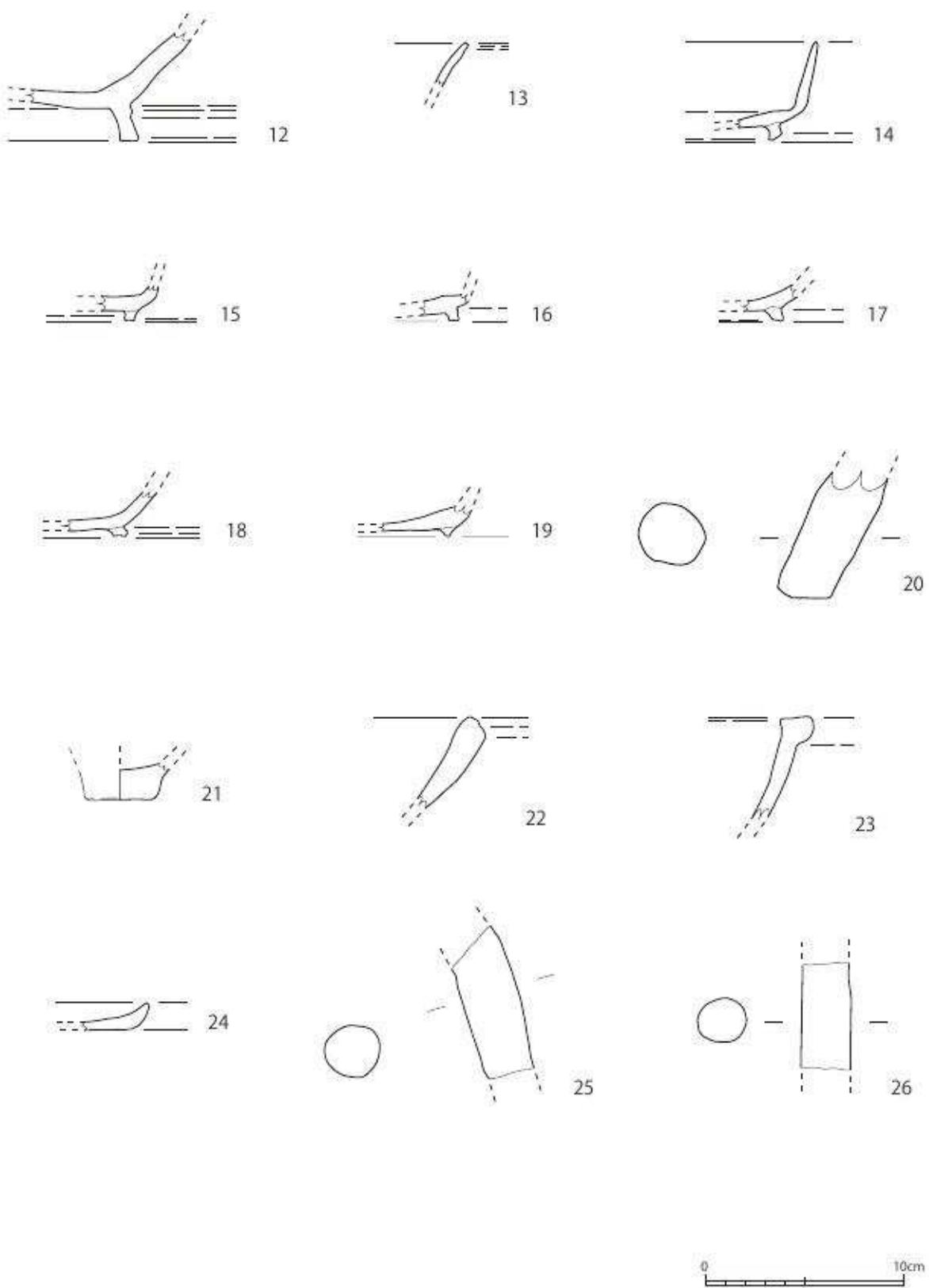
面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。25は、土師質土器鍋の脚部である。大きさは脚径が2.4cm～2.9cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに明黄褐色を呈する。26は、土師質土器鍋の脚部である。大きさは脚径2.4cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は回転ナデを施し、被熱痕がみられる。色調は内外面ともに黒色を呈する。27は、軒丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ4.8cmである。焼成は不良で、胎土は密である。調整は瓦当面に蓮華文を施す。色調は内外面ともに灰白色を呈する。28は丸瓦である。法量は不明であるが、厚さ1.8cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面がナデを施し、凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。29は、丸瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施し、凹面は布目圧痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色である。30は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.5cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリで、凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。31は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施すが、模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。32は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.7cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施す。凹面は布目圧痕のちケズリを施すが、模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰色を呈する。33は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ1.8cmである。焼成はやや不良で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリで、凹面は布目圧痕のちケズリを施す。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。34は、平瓦の破片である。破片のため法量は不明であるが、厚さ2.0cmである。焼成は良好で、胎土は密である。調整は凸面が縄目タタキ圧痕のちケズリを施し、凹面は布目圧痕と模骨痕がみられる。色調は凸凹面ともに灰白色を呈する。35は、古錢の破片である。大きさは残存径2.0cm、厚さ0.15cm、重量0.96 gである。文字は「祥符□□」がみられるため、「祥符元寶」若しくは「祥符通寶」であれば北宋時代の1008年頃が想定できる。



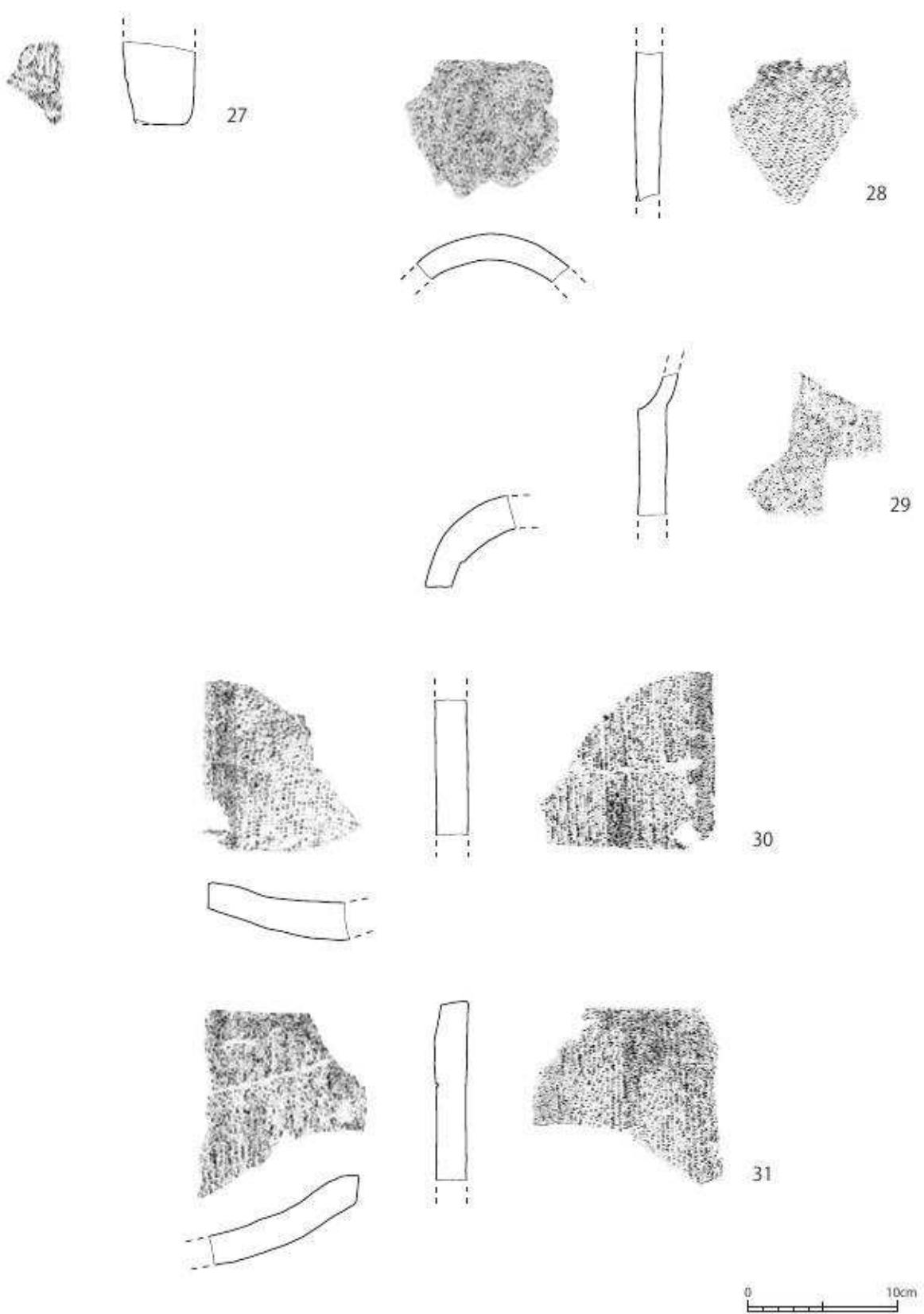
第26図 SD1出土遺物実測図 1 (1~3-1:3, 4~7-1:4)



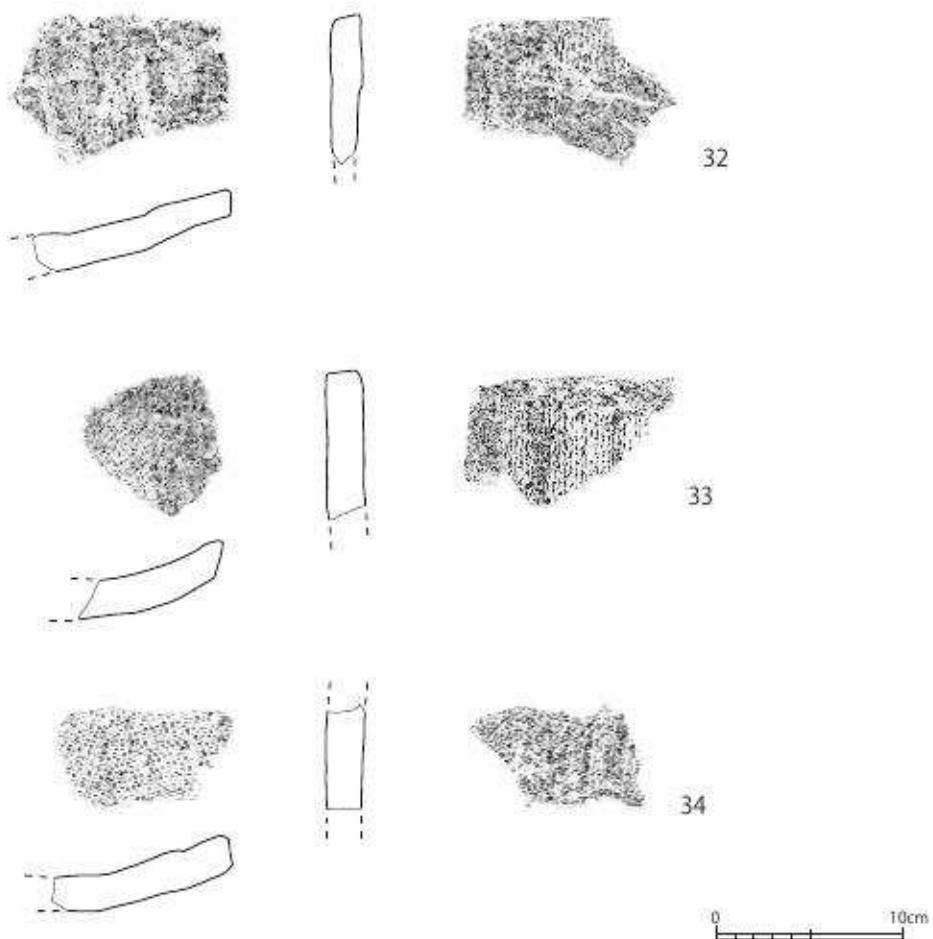
第27図 SD1出土遺物実測図2 (1:4)



第28図 包含層出土遺物実測図1 (1:3)



第29図 包含層出土遺物実測図2 (1:4)



第30図 包含層出土遺物実測図3 (32~34-1:4, 35-1:1)

第2表 安芸国分寺周辺遺跡遺物観察表

遺物番号	出土場所	種別	器形	法量(cm) ( )は復元値	焼成	胎土	色調	調整	備考
1	SD1	須恵器	杯蓋	口径:二 器高:二 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	
2	SD1	須恵器	杯	口径:12.6 器高:4.0 底径:7.8	やや不良	密	外面:灰白 内面:灰白	外面:ナデ 内面:ナデ底部:ペラ切り	
3	SD1	須恵器	円面鏡	口径:(22.8) 器高:6.7 底径:(26.0)	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:回転ナデ。點付凸帯に竹管文 内面:回転ナデ	透かし5個(推定)
4	SD1	丸瓦	-	厚さ:2.0	良	密	凸面:にぶい黄緑 凹面:橙	凸面:ナデ、ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
5	SD1	丸瓦	-	厚さ:2.9	良	密	浅黄緑	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目	
6	SD1	平瓦	-	厚さ:2.2	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
7	SD1	平瓦	-	厚さ:2.0	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、模骨痕、ケズリ	
8	SD1	平瓦	-	厚さ:3.0	不良	密	浅黄緑	凸面:縄目タタキ圧痕 凹面:	
9	SD1	平瓦	-	厚さ:2.2	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕 凹面:布目ナ字消し	
10	SD1	平瓦	-	厚さ:2.8	良	密	灰白	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、模骨痕、ケズリ	
11	SD1	平瓦	-	厚さ:1.8	やや不良	密	凸面:青灰 凹面:浅黄緑	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
12	包含層	須恵器	蓋	口径:一 器高:5.4 底径:一	良	密	外面:青灰 内面:青灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
13	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:一 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	
14	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:5.0 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
15	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:1.7 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
16	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:1.3 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
17	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:1.8 底径:一	良	密	外面:明青灰 内面:明青灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
18	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:2.2 底径:一	良	密	外面:灰白 内面:灰白	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
19	包含層	須恵器	杯	口径:一 器高:1.5 底径:一	良	密	外面:灰 内面:灰	外面:ナデ 内面:ナデ	貼付高台
20	包含層	須恵器	獸脚付円面 器脚部か	口径:二 器高:二 径:27~30	良	密	外面:明青灰	外面:手びねり	獣脚か
21	包含層	土師質 土器	托	口径:一 器高:1.8 底径:3.4	不良	密	外面:浅黄緑 内面:浅黄緑	外面:ナデ 内面:ナデ	
22	包含層	土師質 土器	鍋	口径:一 器高:一 底径:一	良	密	外面:黒褐 内面:にぶい黄緑	外面:ナデ、沈線1条(口縁部) 内面:ナデ	外面に被熱痕
23	包含層	土師質 土器	鍋	口径:一 器高:一 底径:一	良	密	外面:黒 内面:黒	外面:ナデ 内面:ナデ	
24	包含層	土師質 土器	皿	口径:一 器高:1.3 底径:一	良	密	外面:褐 内面:褐	外面:ナデ 内面:ナデ底部:回転糸切り	
25	包含層	土師質 土器	鍋の脚部	口径:一 器高:一 径:24~29	良	密	外面:明黄褐	外面:ナデ	
26	包含層	土師質 土器	鍋の脚部	口径:一 器高:一 径:24	良	密	外面:黒	外面:ナデか	外面に被熱痕
27	包含層	軒丸瓦	-	厚さ:4.8	不良	密	灰白	瓦当面:題草文	
28	包含層	丸瓦	-	厚さ:1.8	良	密	灰	凸面:ナデ 凹面:布目	
29	包含層	丸瓦	-	厚さ:2.5	良	密	灰白	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:縄目タタキ圧痕、ケズリ	
30	包含層	平瓦	-	厚さ:2.5	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
31	包含層	平瓦	-	厚さ:2.0	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、模骨痕、ケズリ	
32	包含層	平瓦	-	厚さ:1.7	良	密	灰	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、模骨痕、ケズリ	
33	包含層	平瓦	-	厚さ:1.8	やや不良	密	灰白	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、ケズリ	
34	包含層	平瓦	-	厚さ:2.0	良	密	灰白	凸面:縄目タタキ圧痕、ケズリ 凹面:布目、模骨痕	
35	包含層	金属製品	古鏡	残存径:2.0 厚さ:0.15 重量:0.96g	-	-	-	-	様符□□ 様符元寶か祥符通寶か

## V まとめ

聲門遺跡、安芸国分寺周辺遺跡は、北側にある標高約575mの龍王山の南側に広がる標高220m前後の丘陵斜面上にあり、西条盆地の北側に立地する。聲門遺跡の調査は、遺跡面積約650m<sup>2</sup>である。調査の結果、検出した遺構は、土坑7基、溝状遺構3条、道状遺構1条、井戸跡2基、柱穴10個、性格不明遺構2基である。遺物は、須恵器、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、古代瓦、金属製品、木製品、石製品などが出土した。また安芸国分寺周辺遺跡の調査は、遺跡面積約700m<sup>2</sup>である。調査の結果、検出した遺構は、溝状遺構1条、良好な遺物包含層である。遺物は、須恵器、土師質土器、古代瓦、金属製品などが出土した。次に、これらを踏まえ若干の検討を行いまとめとする。

### 1. 聲門遺跡

聲門遺跡の調査で検出した遺構や遺物を整理すると概ね、次のようになる。

土坑は、SK5・6の埋桶遺構以外の詳細は不明である。

溝状遺構は、SD1～3があり、西から東に流れをもつものと思われるが、詳細は不明である。

道状遺構は、SD2と3を、北側と南側の両側に配し道状にみられるが、幅などの規格性が無く自然により形成された可能性が高いため、道か否かの詳細は不明である。

井戸跡は、SE1・2とともに素掘りの井戸であり、SE1からは、土師質土器片が出土し、SE2からは、祭祀に使用されたと思われる土師質土器が底面から出土した。土師質土器の年代は13世紀から14世紀代であり、中世頃に使用されていたものと考えられる。

柱穴は、位置関係もまばらに所在し、掘立柱建物跡も復原することができなかった。このことから、建物跡に關係する柱穴とは考えられず、詳細は不明である。

性格不明遺構は、SX1・2とともに、水の溜まりのような跡がみられることから、簡易な水溜のようなものが想定できるが、疑問は残るため、詳細は不明である。

遺物は、包含層を中心として多量に出土した。須恵器や古代瓦が8世紀～9世紀代で、土師質土器が13世紀～14世紀代、輸入陶磁器が13世紀代のものであり、古代と中世の遺物が大半である。また木簡（人形）には、お地蔵さまが描かれており、当地域では雨が多量に降ると大量の増水があることから、水神信仰の祭祀用具として使用された可能性も考えられる。なお史跡安芸国分寺跡<sup>(1)</sup>や安芸国分寺周辺遺跡<sup>(2)</sup>など周辺遺跡の発掘調査では、このような木簡は今のところ出土していないため、今回初例の発見とみられる。それから墨書土器を検出しているが、明確な遺構から出土したものでは無く、周辺からの流れ込みと考えられ、使用した用途などは不明であるが、本遺跡の周辺に、郡衙等の官衙に関わる遺跡の存在がうかがわれる。遺物は、井戸跡から出土した土師質土器を除くと、流れ込みのものが多いため、本遺跡の時期や性格を明確に示すものは無く、今回の調査では遺跡の全容を把握するまでには至らなかった。

### 2. 安芸国分寺周辺遺跡

安芸国分寺周辺遺跡の調査で検出した遺構や遺物を整理すると概ね、次のようになる。

溝状遺構は、西から東に向けて流れをもつものと思われるが、区画性が無く史跡安芸国分寺跡の

南側を画する溝では無く、自然流路が想定できる。また自然流路からは、流れ込みと思われる須恵器、土師質土器や古代瓦などが出土した。

遺物は、聲門遺跡とほぼ同様な時期を示す。須恵器や古代瓦が、8世紀～9世紀代で、土師質土器が13世紀～14世紀代という時期のものがみられる。また円面硯が出土していることで、周辺には郡衙等の官衙に関わる遺跡の存在がうかがわれる。

## 小結

聲門遺跡や安芸国分寺周辺遺跡の調査区域は、都市計画道路吉行泉線改良事業に係る区域のみの調査であり、遺跡の全容を十分に把握する資料等を得ることができなかった。

調査区の周辺には、史跡安芸国分寺跡をはじめとして大地面遺跡<sup>(3)</sup>、鷺田遺跡<sup>(4)</sup>、平田遺跡<sup>(5)</sup>、青谷1号遺跡<sup>(6)</sup>など8世紀から9世紀にかけての遺跡が集中して存在する。また青谷1号遺跡から円面硯が出土している点や大地面遺跡からは方形の柱掘方をもつ2間×5間の建物跡が検出されており、郡衙等の官衙に関わる遺跡と推測されている。聲門遺跡からは「寺」、「三万」と書かれた墨書き土器や人形木簡をはじめとした多量の木製品が出土した点、安芸国分寺周辺遺跡からも流れ込みだが、円面硯が出土していることから、これらの遺跡に何らかの関わりがあることが想定できる。

のことから遺跡の時期を整理すると須恵器、古代瓦（8世紀～9世紀代）、土師質土器（13世紀～14世紀代）、輸入陶磁器（13世紀代）の時期的様相がみられるため、次のような時期区分が想定できる。従って遺跡の主要時期は、古代（8世紀～9世紀代）、中世（13世紀～14世紀代）と考えられる。これらのことから、史跡安芸国分寺跡の南側に直接関連付けられる遺構などは無かったが、今回の発掘調査では、当該地域における古代～中世にかけての良好な資料を提供してくれたものと考えられる。

## 参考文献

- (1) 中山学他編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書I～IX』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成11～19(1999～2007)年
- (2) 植田広編『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成21(2009)年
- (3) 吉野健志編『大地面遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成20(2008)年
- (4) 沢元保夫編『鷺田遺跡』『奥田・是石・鷺田・藤田』財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成元(1989)年
- (5) 石井隆博編『平田遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成17(2005)年
- (6) 石井隆博編『青谷1号遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団 平成14(2002)年

図 版



a. 調査前風景（北から）



b. 調査区東側壁面（南西から）



a. 調査区北側壁面 (南西から)



b. SK1断面 (西から)



d. SK2断面 (南東から)



c. SK1完掘 (北東から)



e. SK2完掘 (北東から)



a. SK3断面（東から）



b. SK3完掘（北から）



c. SK4断面（北東から）



d. SK4石出土状況（北西から）



e. SK4完掘（北西から）

図版 4

聲門遺跡



a. SK5断面（北から）



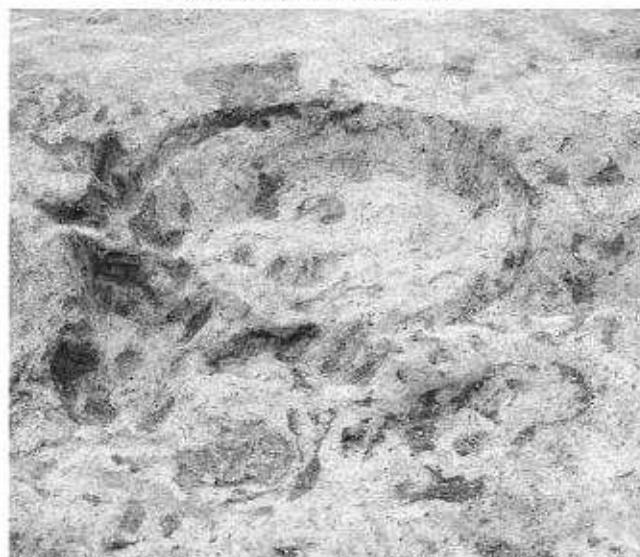
d. SK6断面（南西から）



b. SK5木枠出土状況（西から）



e. SK6木製品出土状況（南から）



c. SK5完掘（北から）



f. SK6完掘（南から）



a. SK7断面  
(西から)



b. SK7石検出状況  
(北から)



c. SK7完掘  
(北から)



a. SD1西側断面 (東から)



b. SD1南側断面 (北から)



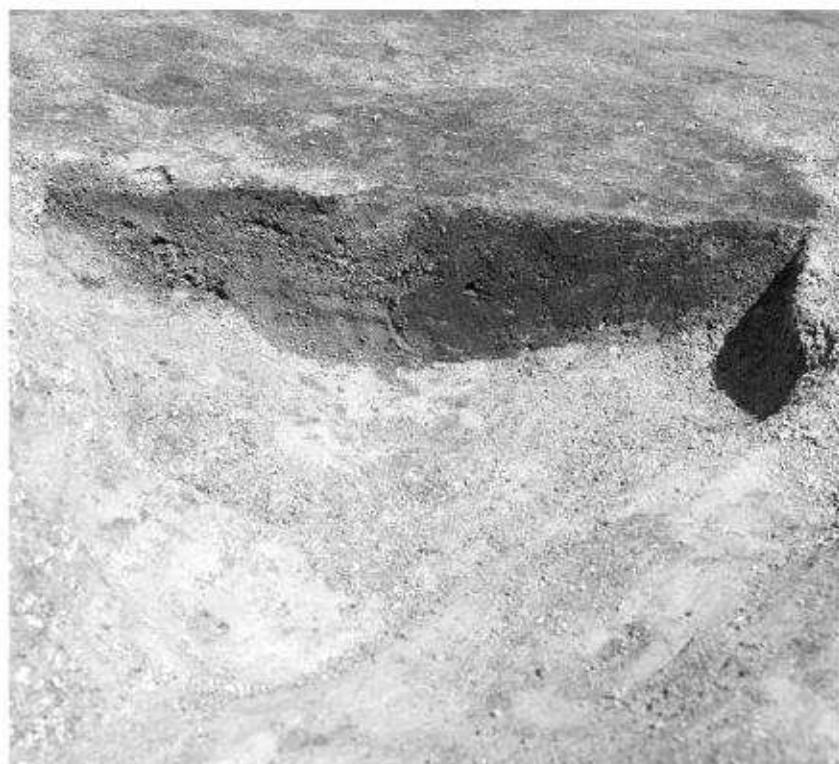
a. SD2断面 (北西から)



b. SD2遺物出土状況① (西から)



c. SD2遺物出土状況② (北から)



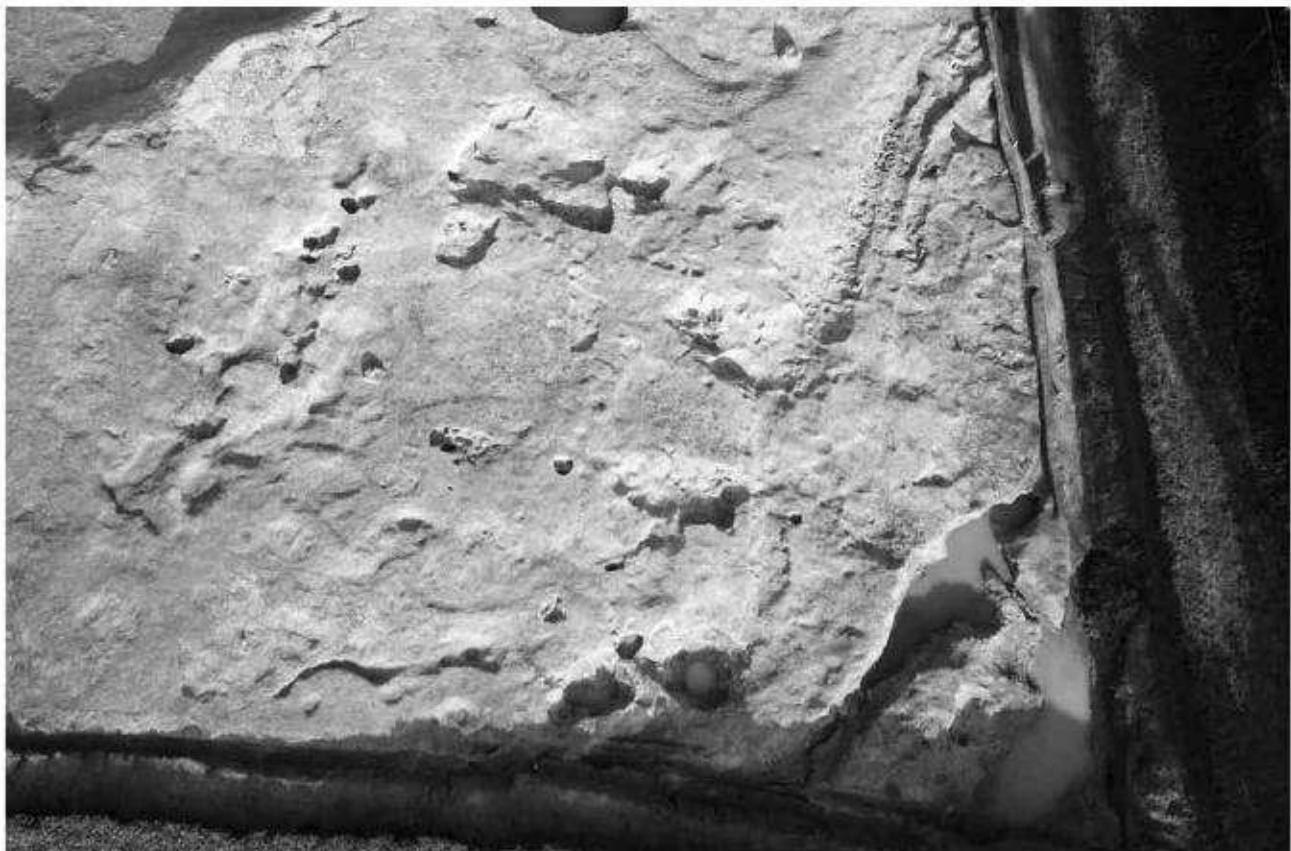
a. SD3断面（西から）



b. SD3遺物出土状況①（南西から）



c. SD3遺物出土状況②（南から）



a. SD1～SD3, SF1完掘 (西から)



b. SD1～SD3, SF1完掘 (東から)

図版 10

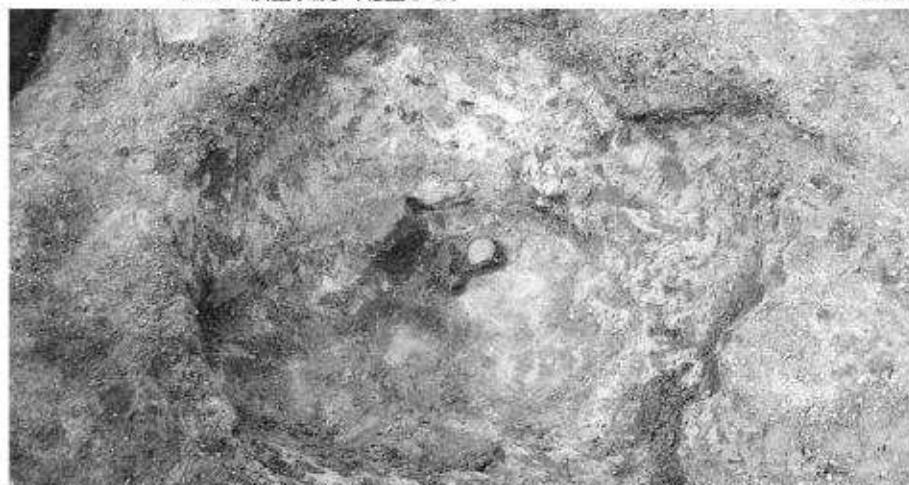
聲門遺跡



a. SE1検出状況（北西から）



b. SE1完掘（北西から）



c. SE2遺物出土状況（南東から）



d. SE2完掘（西から）



a. SX1断面（南東から）



c. SX2断面（北西から）



b. SX1完掘（北から）



d. SX2完掘（東から）



e. P5断面（東から）



g. P5完掘（南から）



f. P5遺物出土状況（南から）

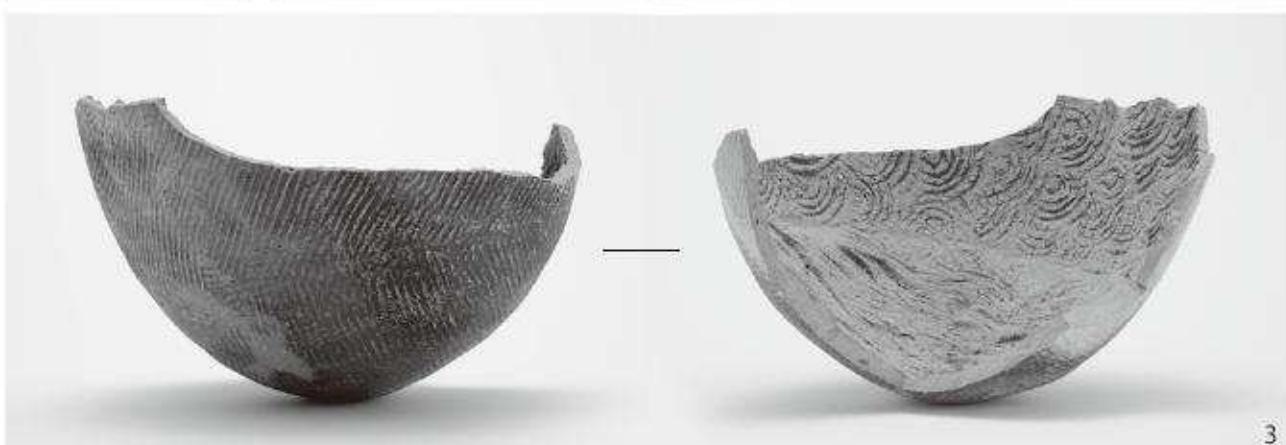
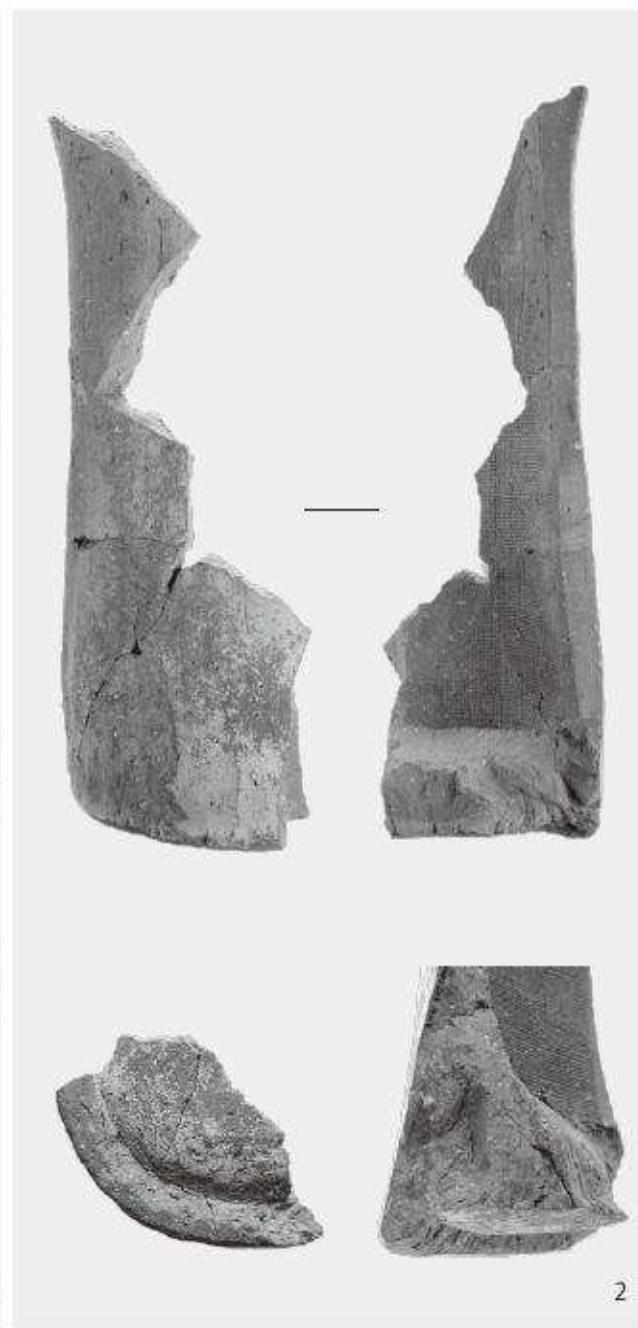


h. P1～P4、P6、P7完掘（北東から）

図版 12

聾門遺跡

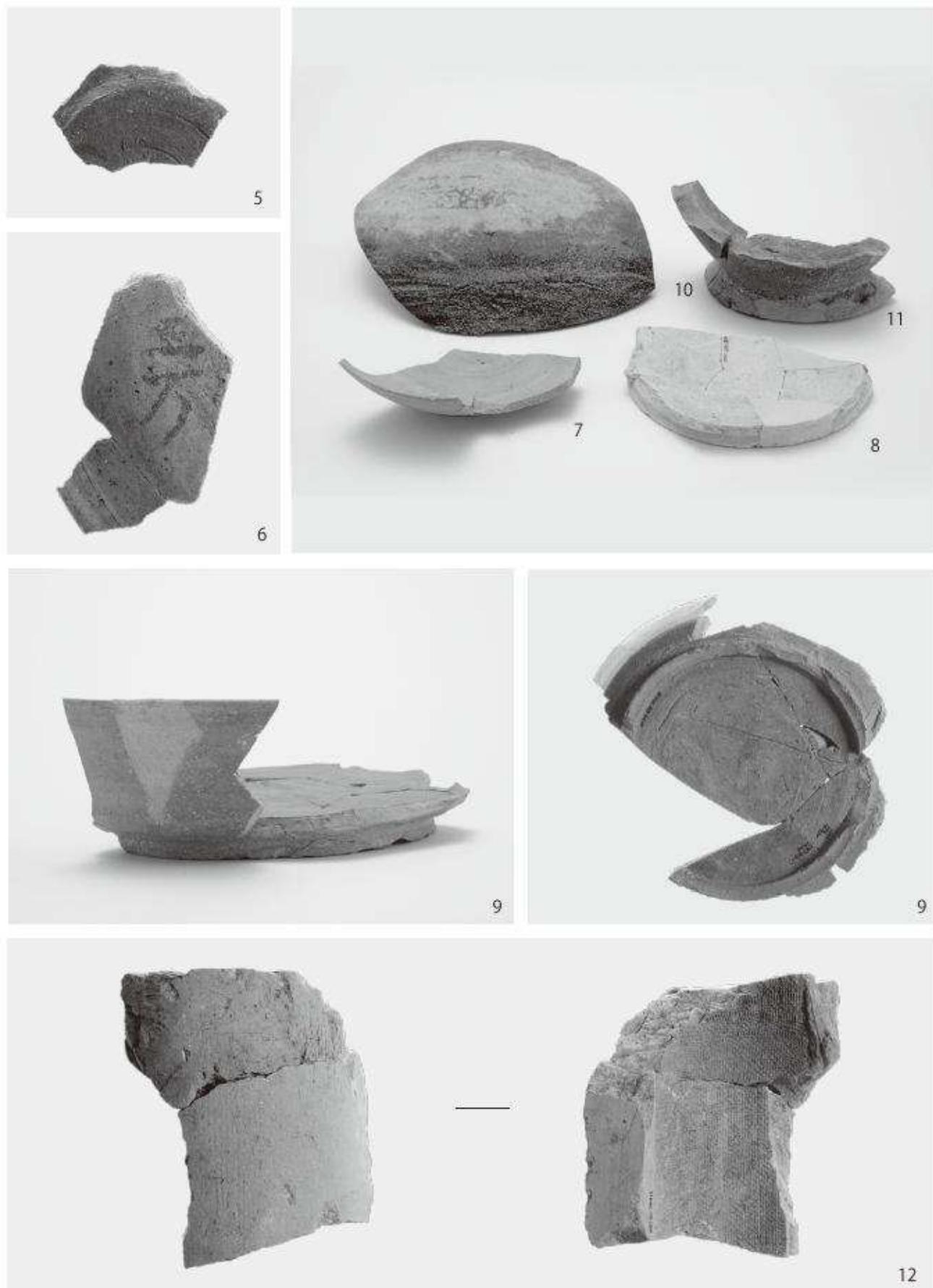




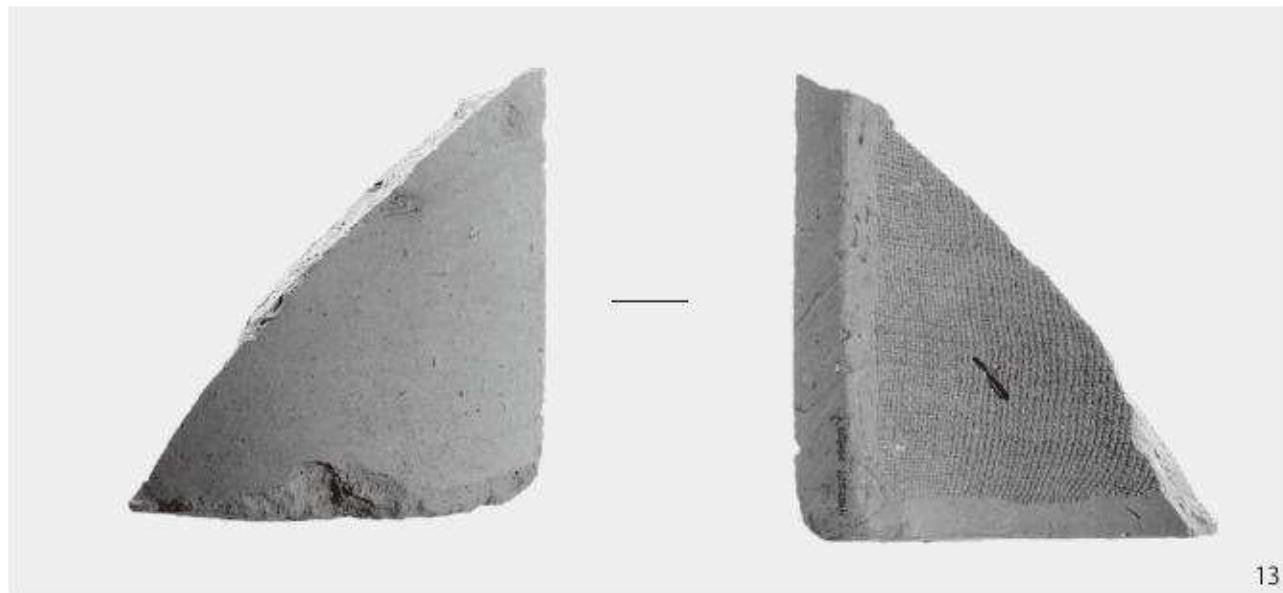
出土遺物1

図版 14

聲門遺跡



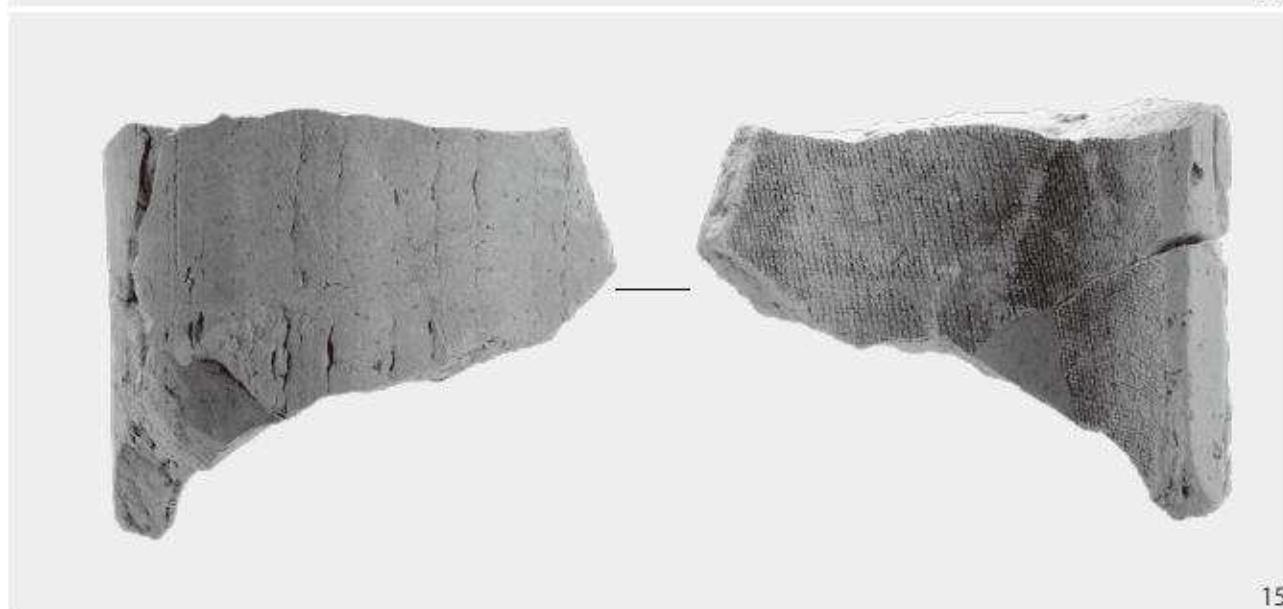
出土遺物2



13



14



15

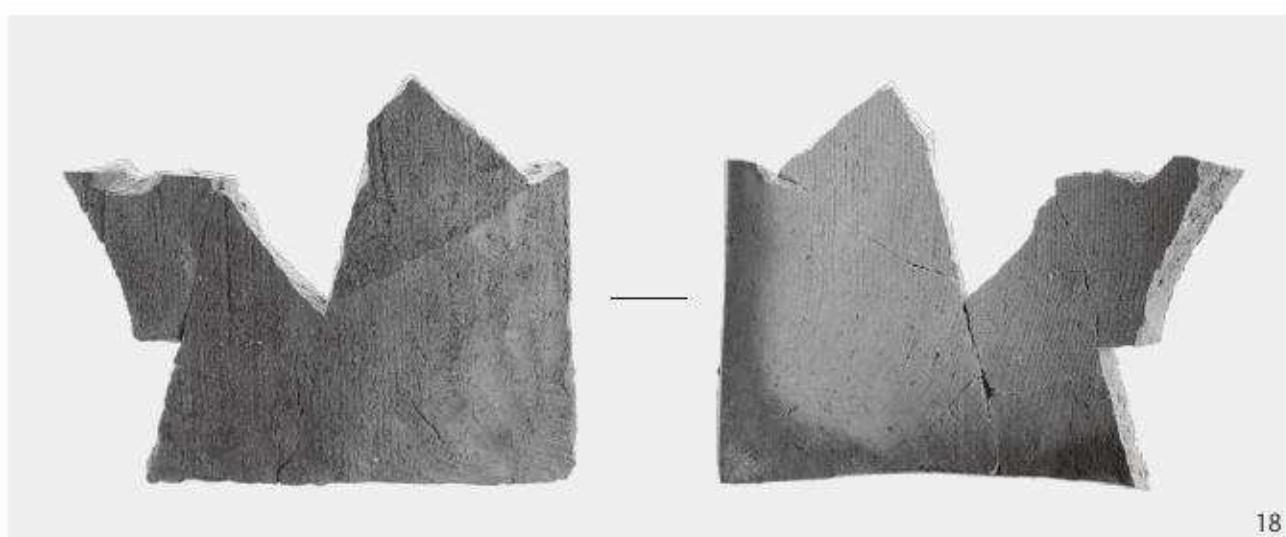
出土遺物3



16

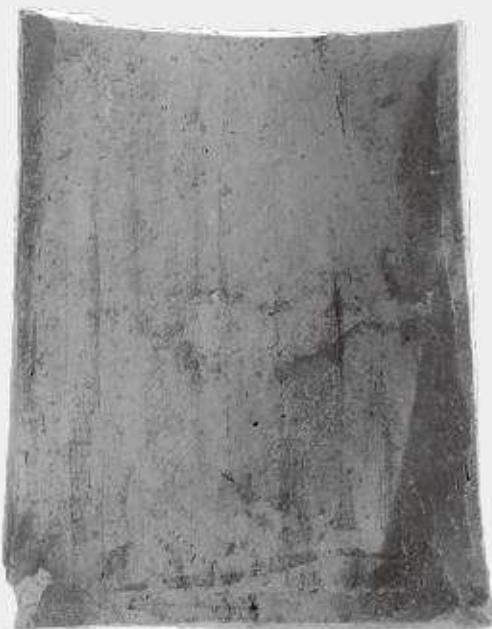


17

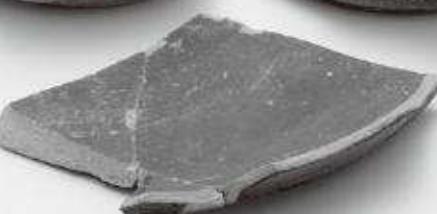


18

出土遺物4



19



21

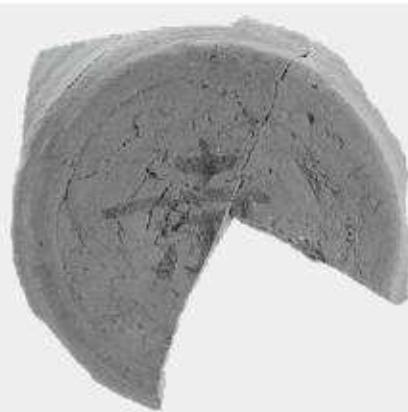


22

23

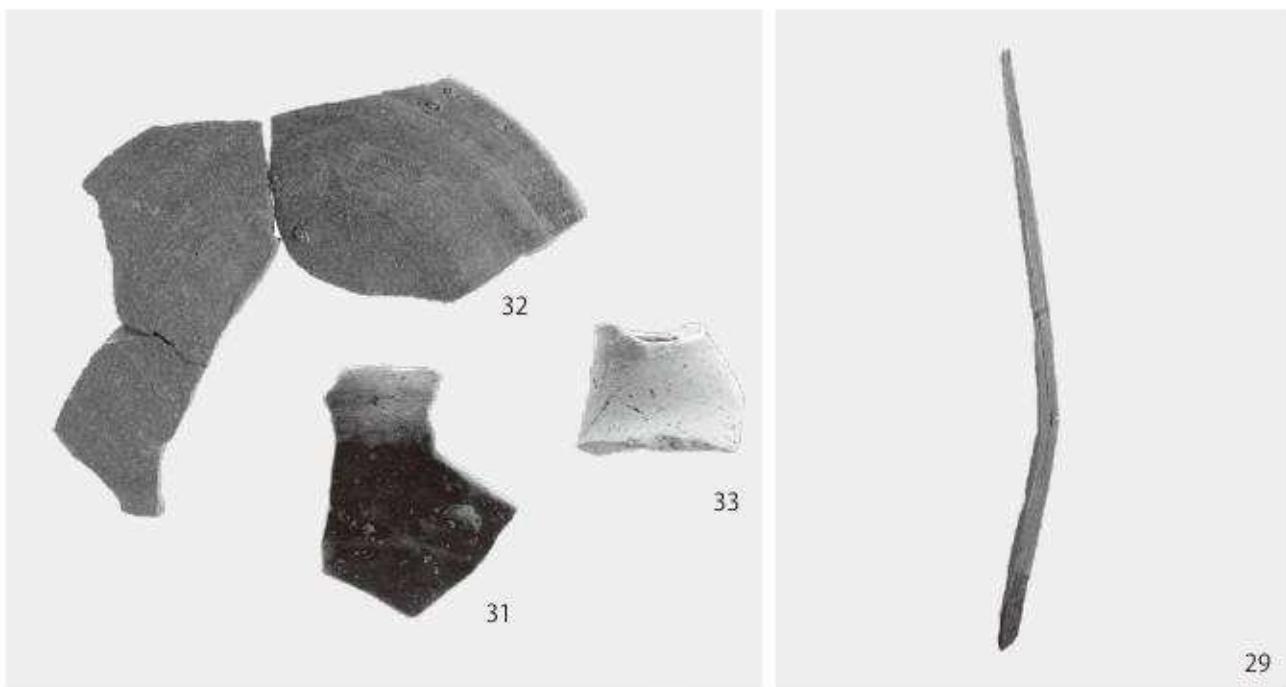
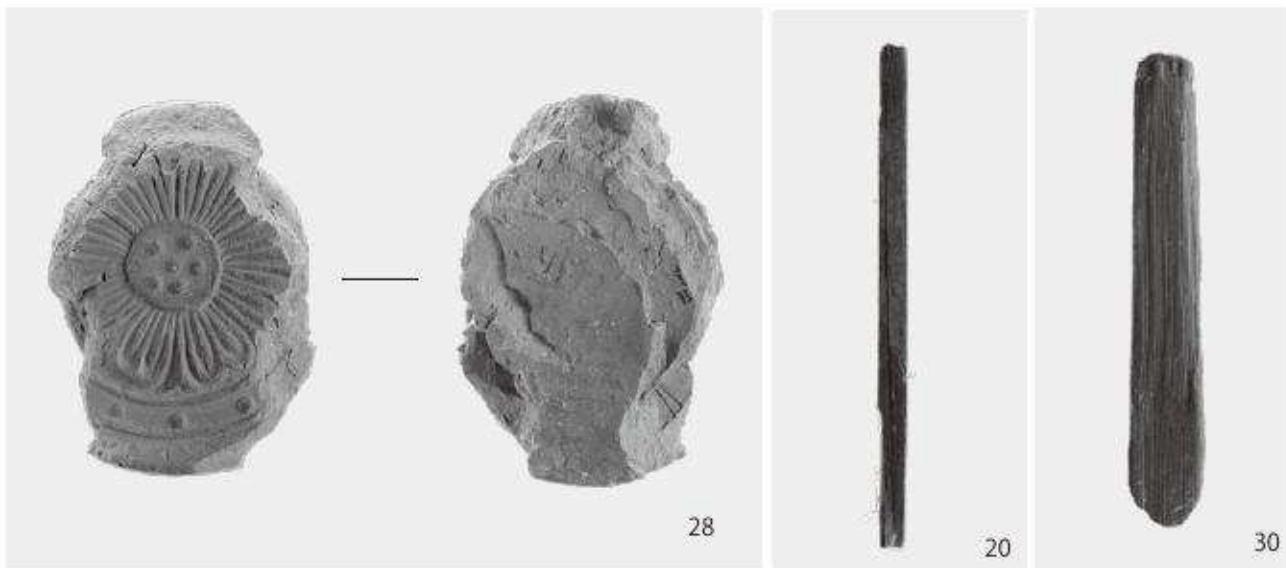
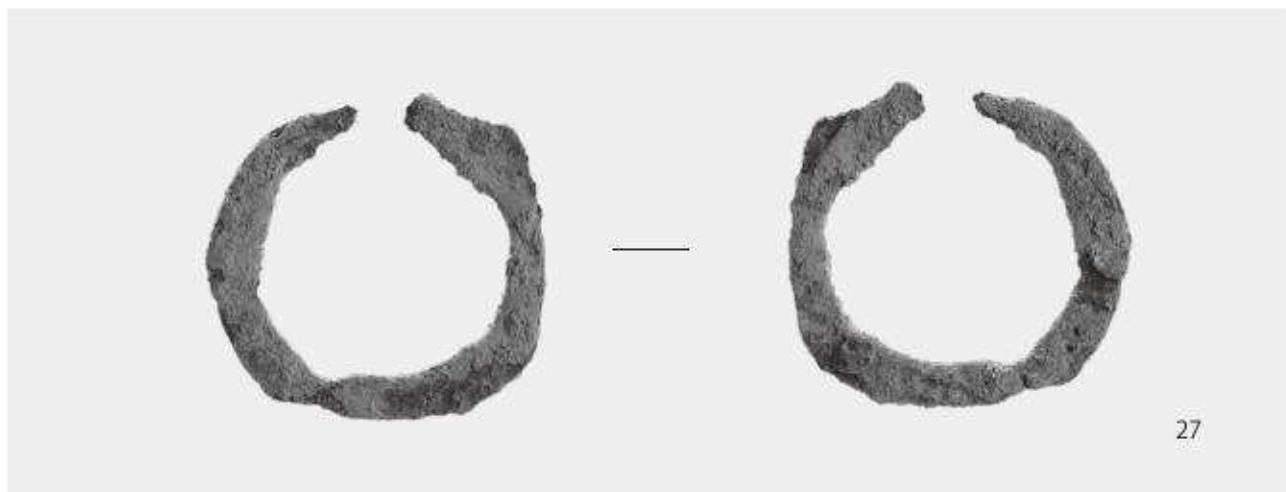


24



25

出土遺物5



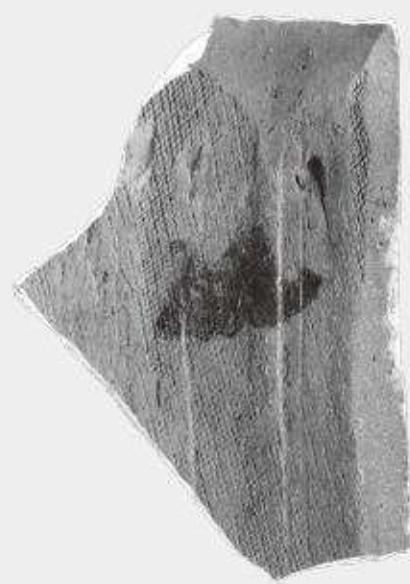
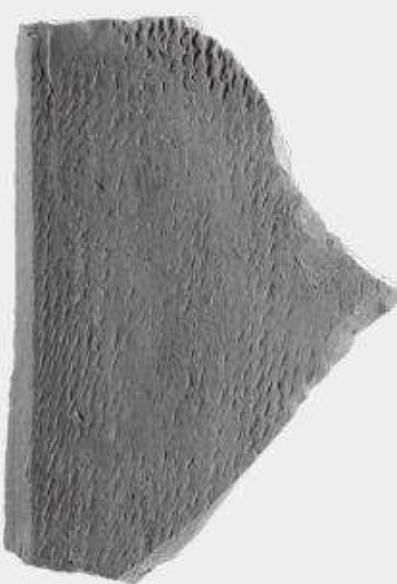
出土遺物6



34

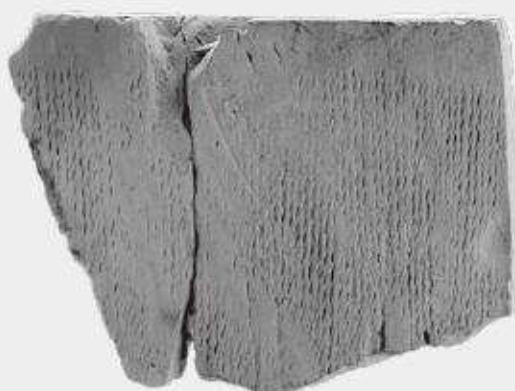


35



36

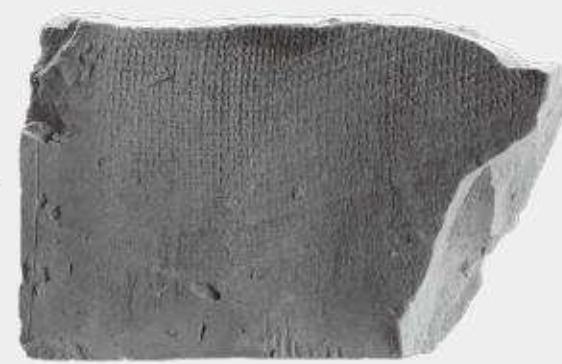
出土遺物7



37



38



39

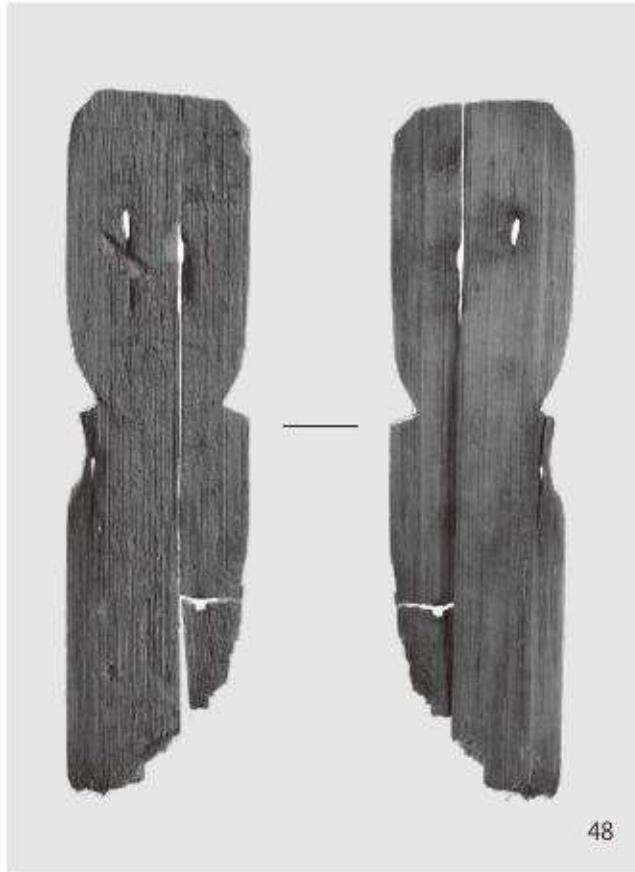
出土遺物8



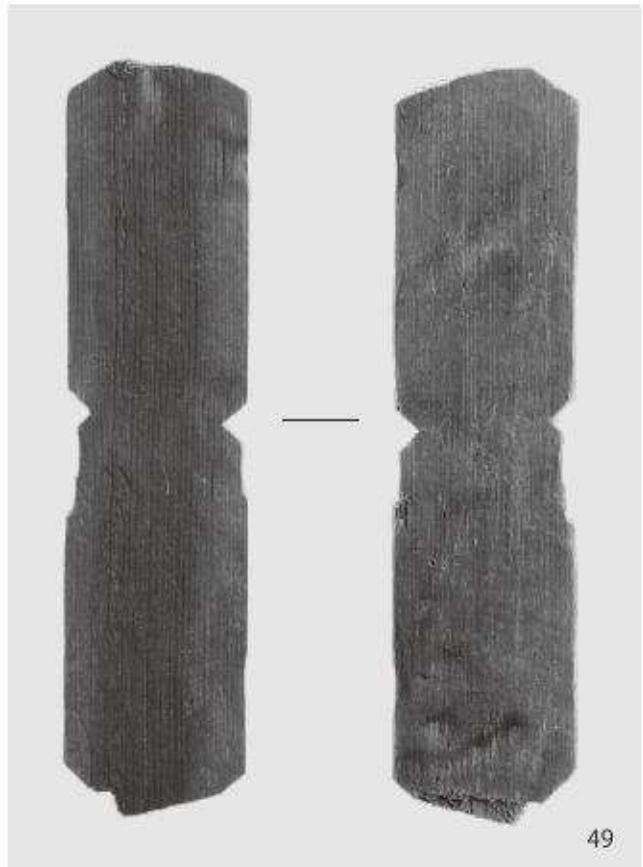
出土遺物9



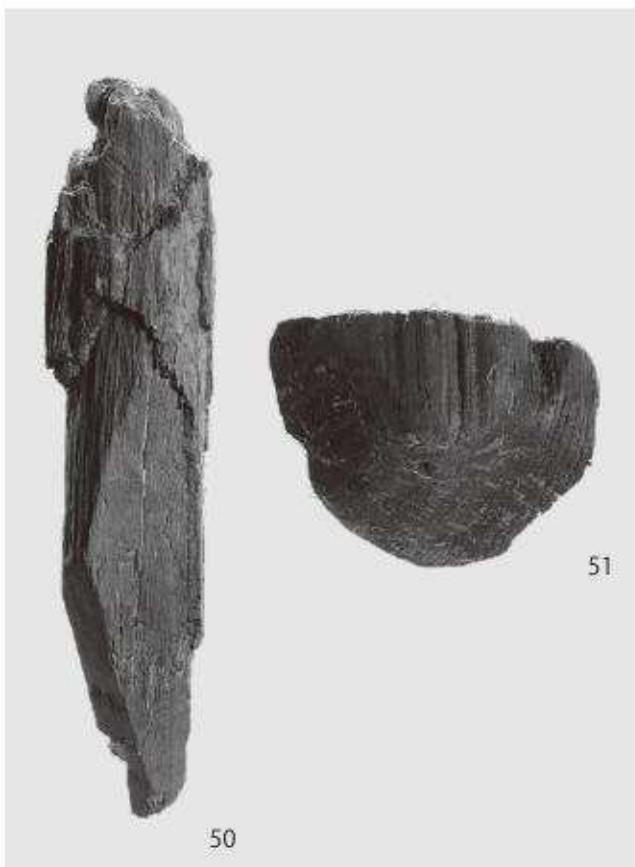
47



48



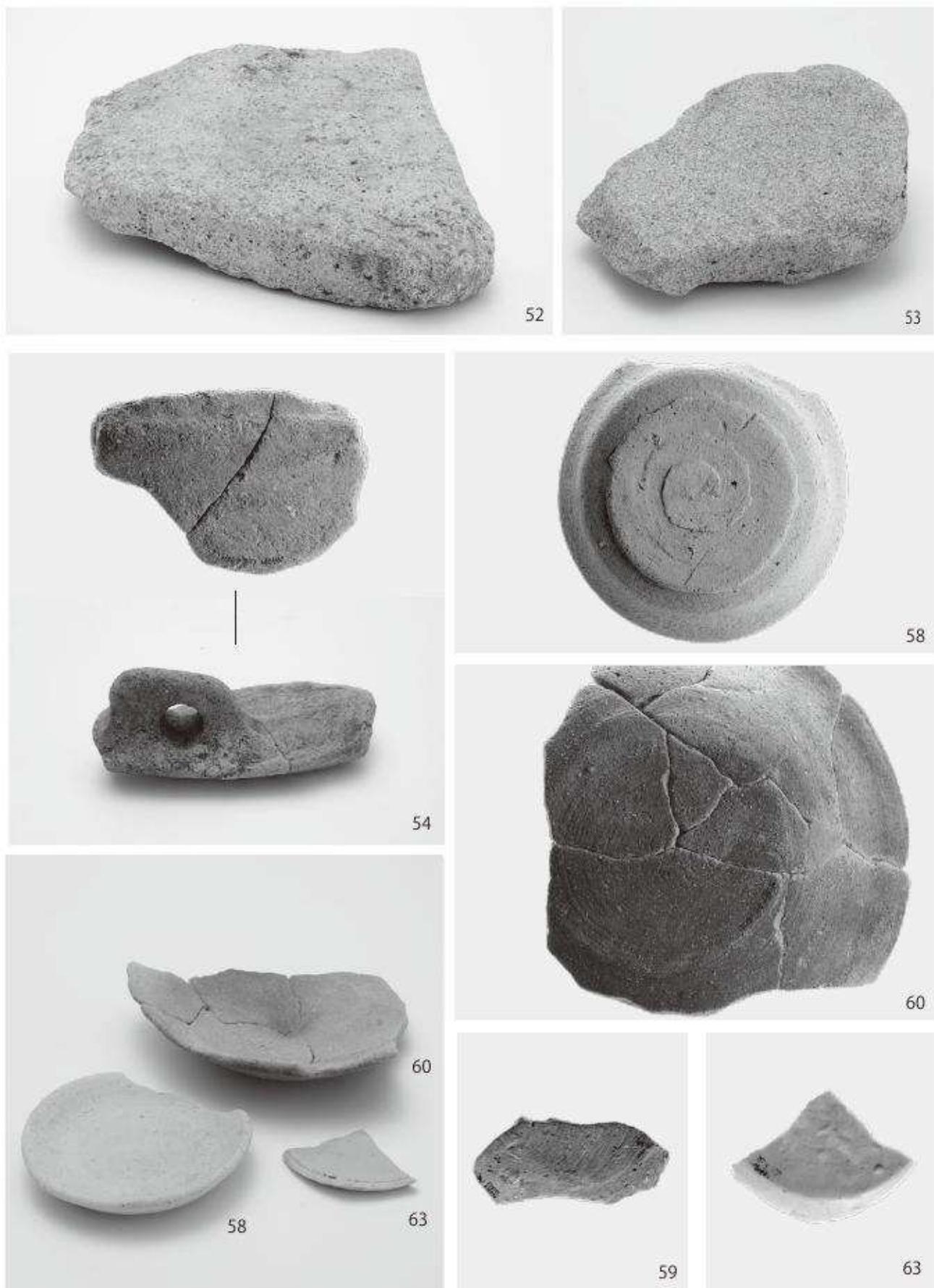
49



50

51

出土遺物10



出土遺物11



55



57



56

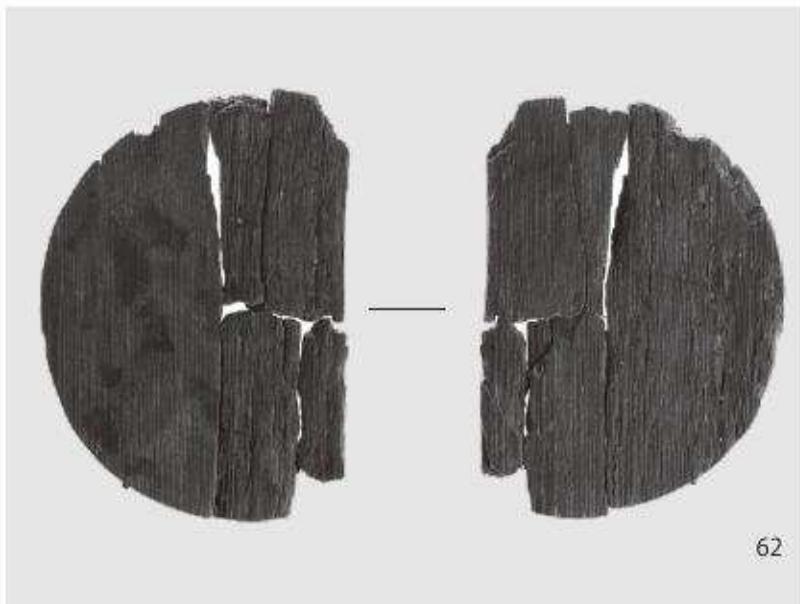


61



64

出土遺物12



62



65

66

67

68

出土遺物13



a. 調査前風景 (南から)



b. 調査区西側壁面 (北東から)



a. SD1検出（北西から）



b. SD1完掘（北西から）



c. SD1断面（北西から）



d. SD1遺物出土状況①（西から）



e. SD1遺物出土状況②（北東から）



f. 作業風景（東から）



a. 調査区北西部完掘（東から）



b. 完掘（南西から）



1



3



2



3

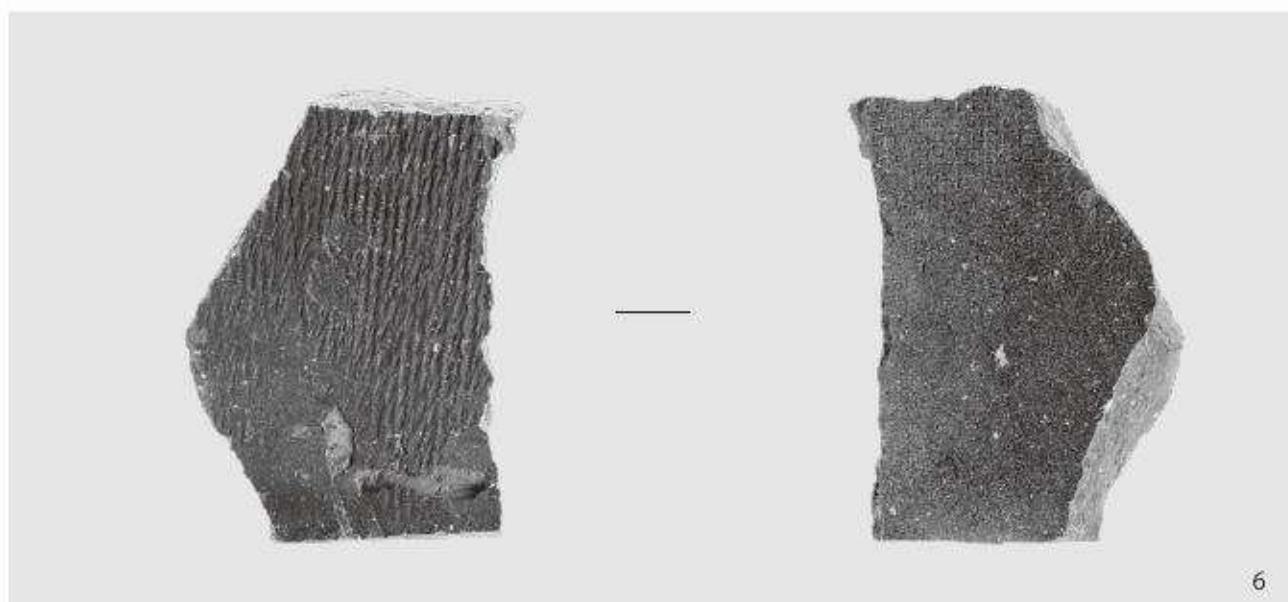


4

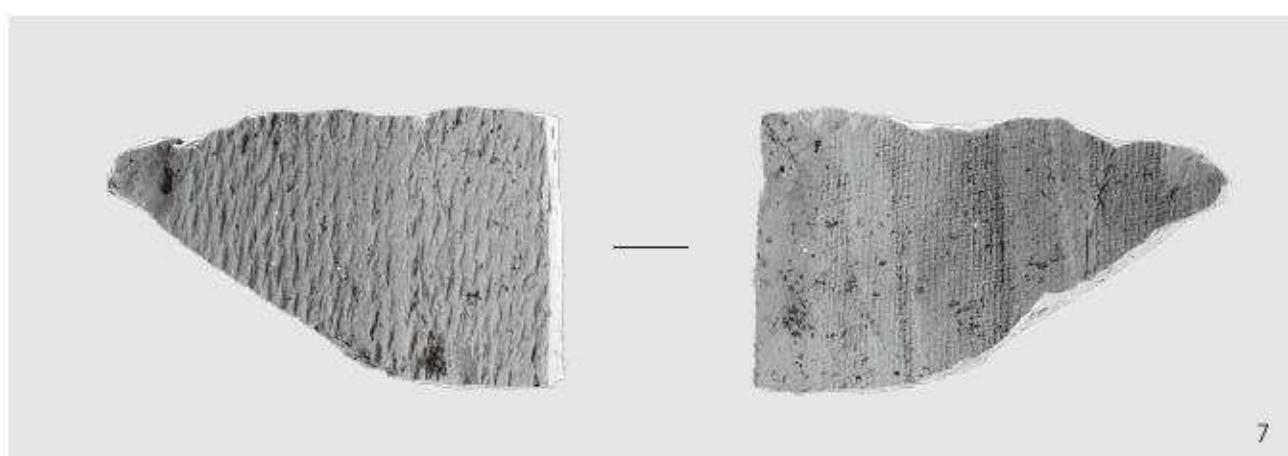


5

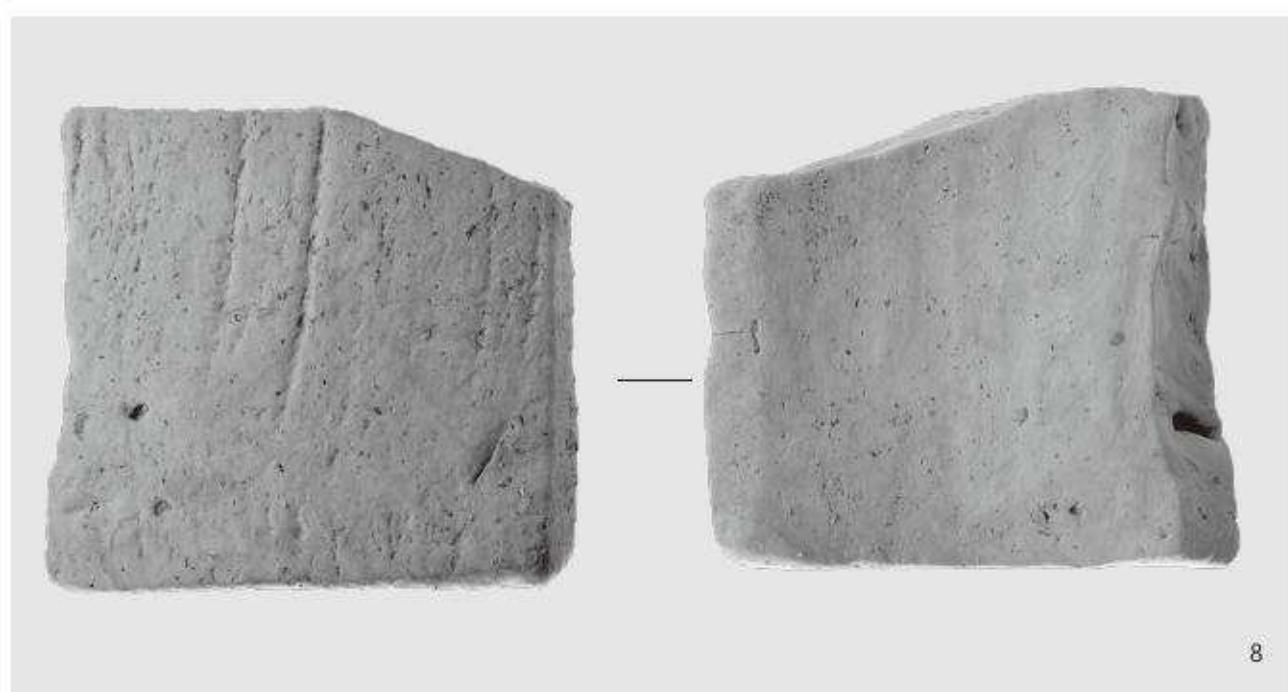
出土遺物14



6



7



8

出土遺物15



9

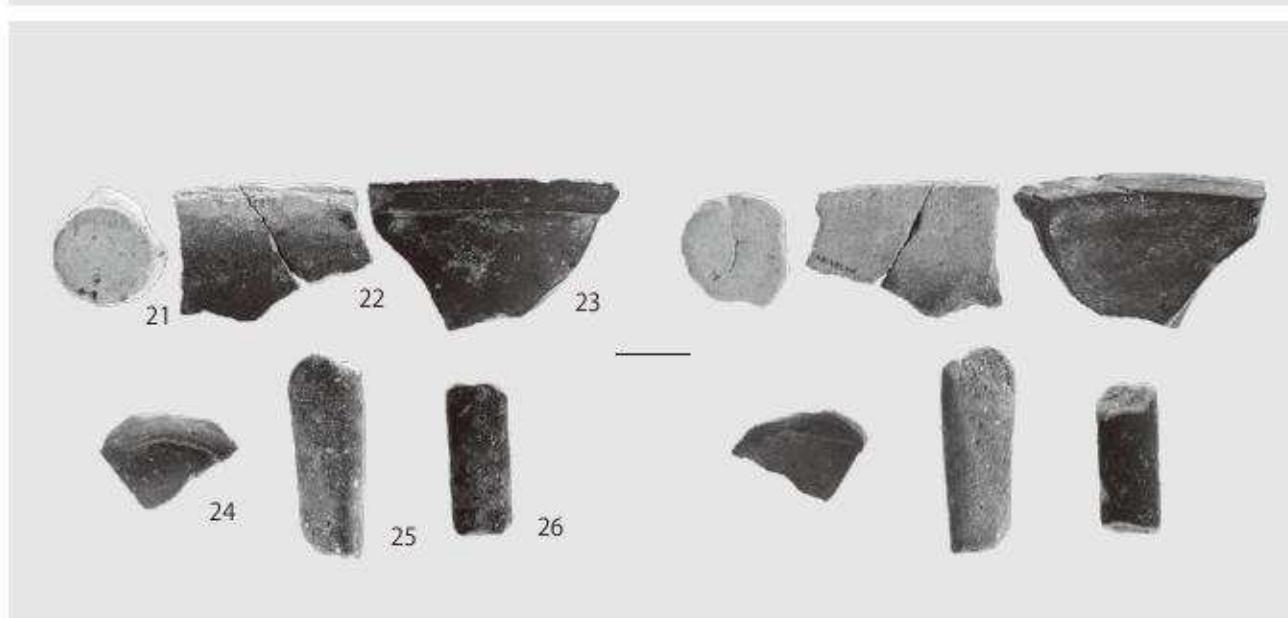
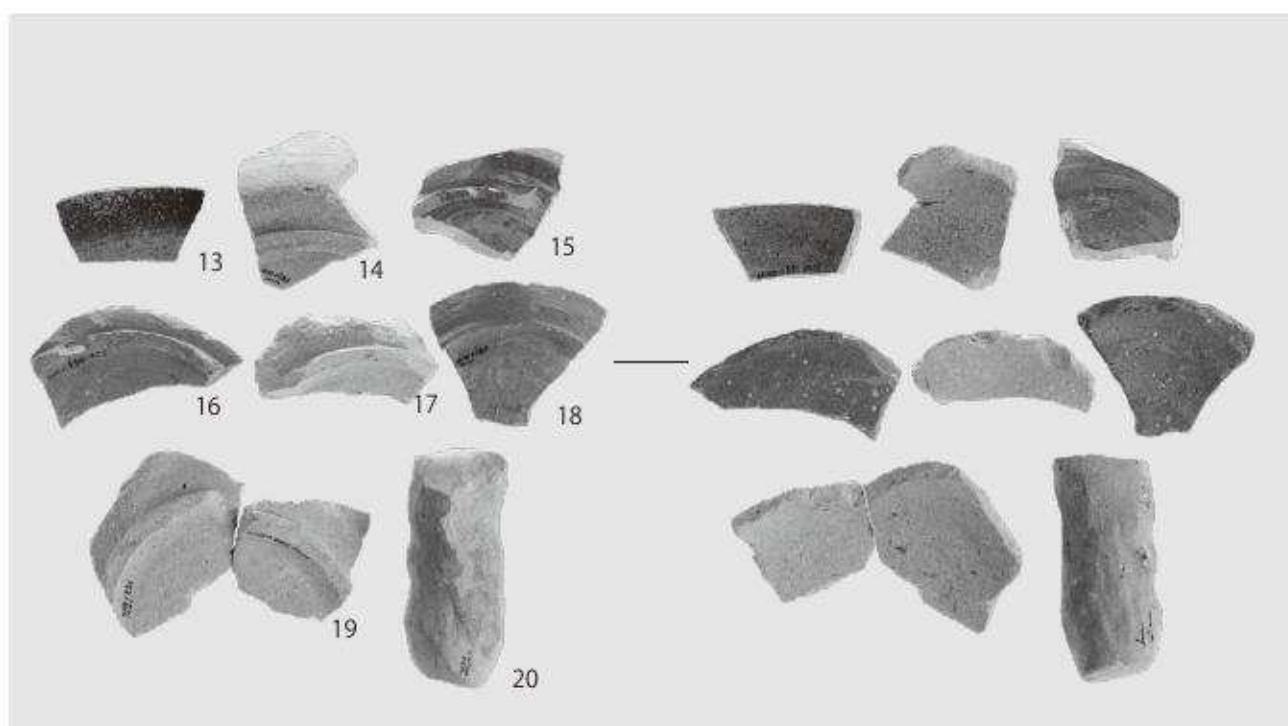


10



11

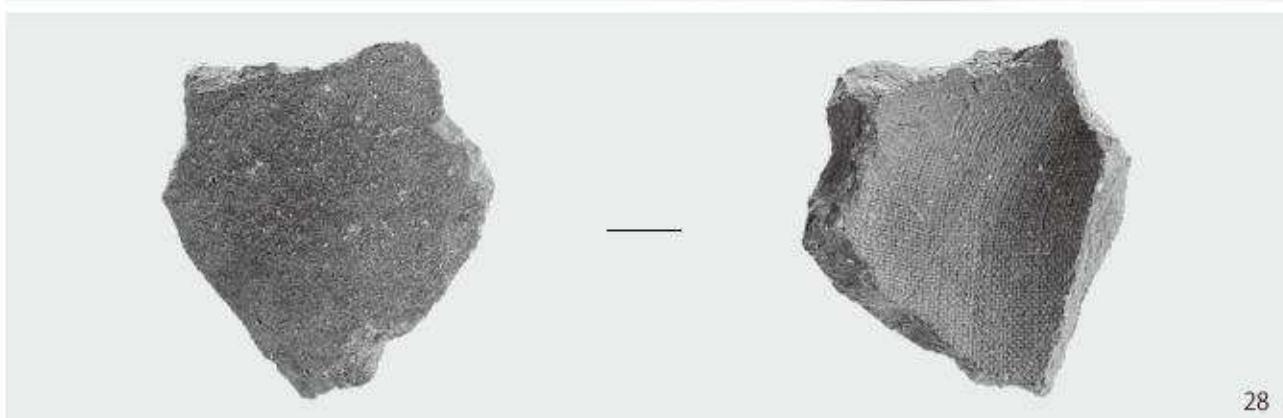
出土遺物16



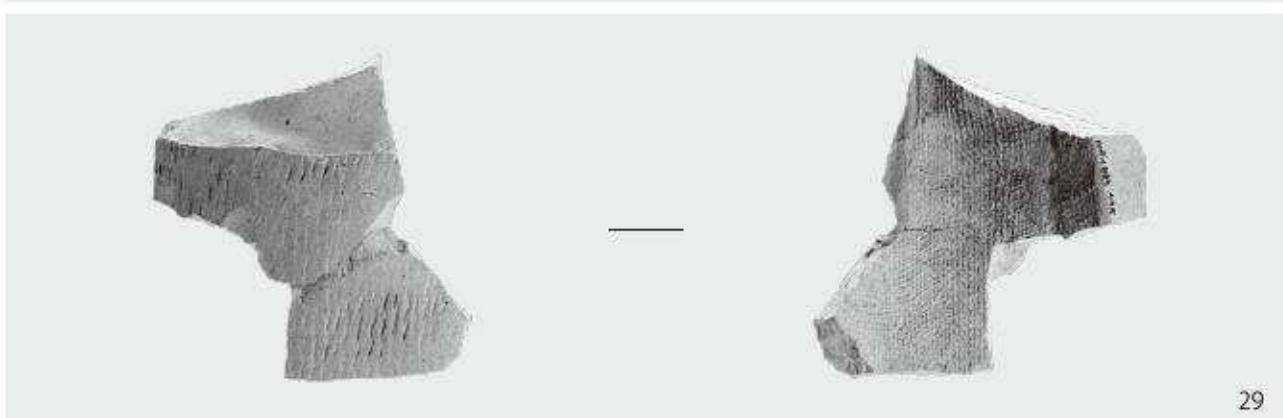
出土遺物17



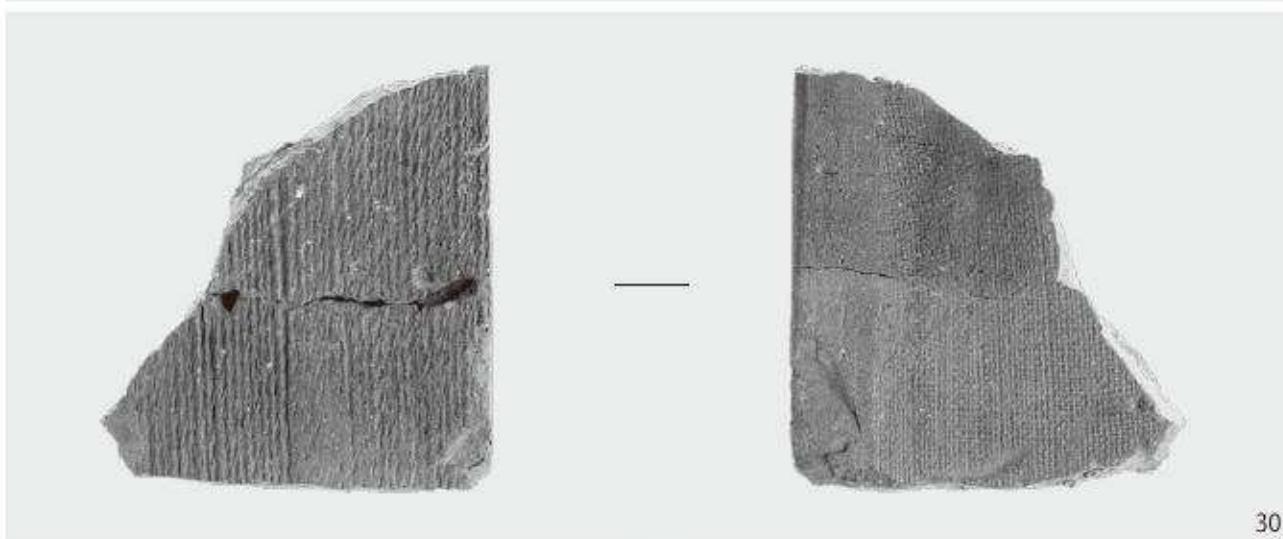
27



28

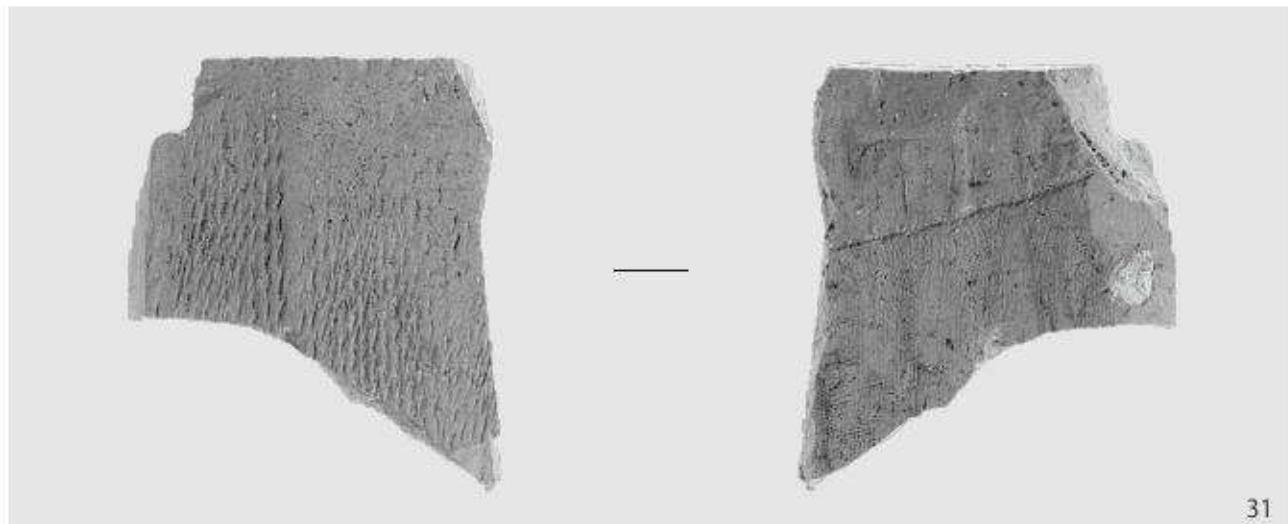


29

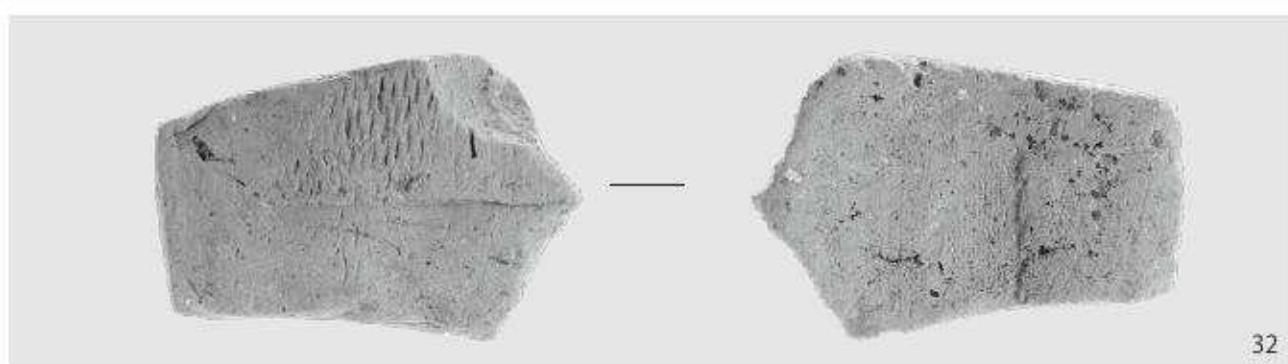


30

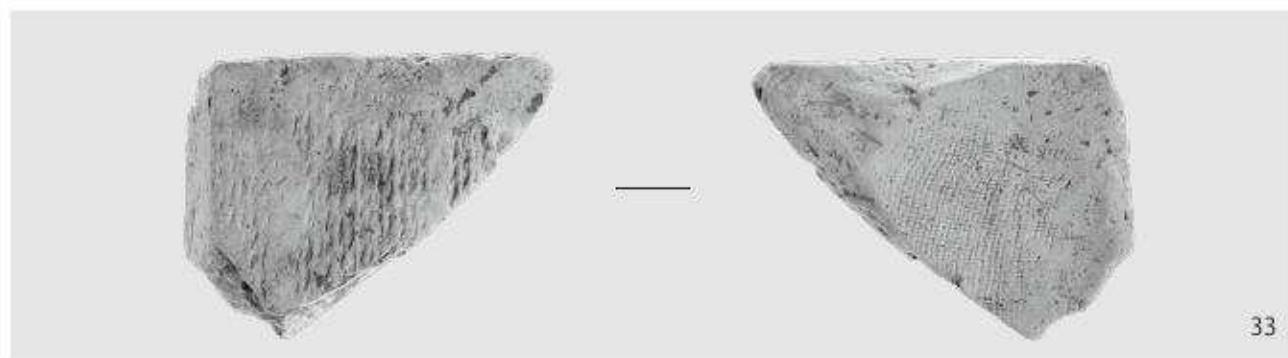
出土遺物18



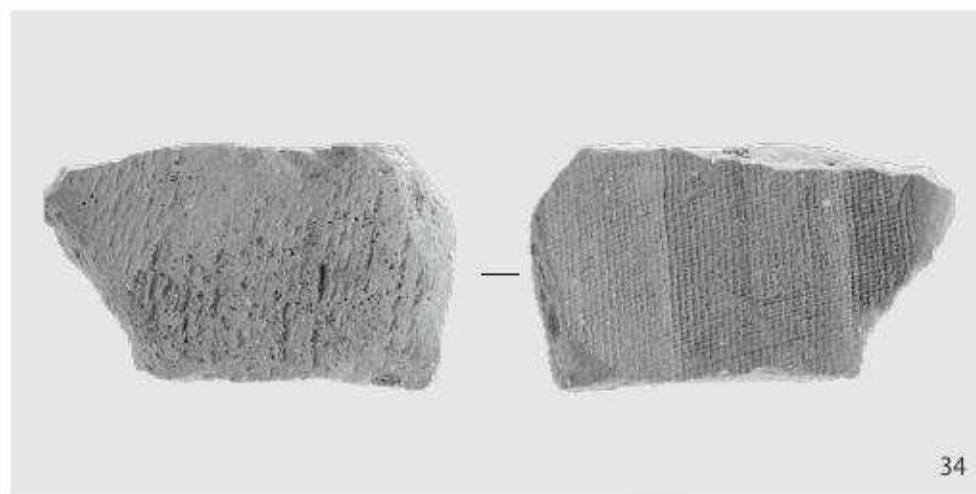
31



32



33



34



35

出土遺物19

## 報 告 書 抄 錄

東広島市教育委員会文化財調査報告書第53集

## 聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書

発行日 平成27(2015)年5月29日

編集・発行 東広島市教育委員会  
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

印 刷 大東印刷株式会社  
〒723-0052 広島県三原市皆実4丁目5-30